

324

595

5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

始



324-595



舟橋水哉著

七十五法名目講義

法藏館發行

大正
8. 5. 24
内交

小 序

一 我本山設立の内典補習會の課目に「七十五法名目」といふがある。此書は初歩の爲に書かれたものであるが、しかし實際に於て仲々六ヶ敷、且つ此會へ來る學生は世間普通の中學校卒業生のみであれば、理解力は可なり發達して居つても、佛書に對する知識は皆無さといふ有様、第一に言葉の扱ひから分らぬ、術語に至ては其理解に大に苦しまねばならぬ。此點に於て成るべく分り易く説明するが目下の急務であるけれども、從來の講義では至て讀みにくい、僅かの時間で此を理解するには餘程讀み易くする必要がある。かういふ目的の下には強ちに新しい解釋を試みる必要はない、寧ろ本書には如何に書かれてあるかを知るに止めておかねばならぬ。尙又初歩の人の爲めには餘り詳細にする必要もな

いから成るべく簡にして要を取る様にこの考より本書の講義を
開版する事としたのである。

二 七十五法名目の講義を聞くに就いて、本文としては成るべく
「冠註」を用ひられたい。参考書としては拙著「俱舍論頌疏要
義」を使用されたい。此本には論題のみを集めてあるから、統一
して考へるのに幾分便利があるかと思ふ。此本は一貫して讀む
必要はない、唯必要に応じて其部分だけを讀んで頂けば結構であ
る。次に本山通信講義として出版せられた拙著「七十五法達意」
此は本書よりも尙簡單であるが、圖記の多い事、簡潔に要を取つ
てある事、終りに問題が出てある事、この特色があるから、参考
書にして頂くよと思ふ。

大正八年四月一日

京都西六條、一念精舎に於て

著

者

識

七十五法名目講義

目次

序論

- 一 本文の種類……………一
- 二 版本註釋の種類……………二
- 三 寫本註釋の種類……………三
- 四 名目の著者……………四
- 五 名目の所屬宗派……………五
- 六 題號の意義……………六

本論

前篇 七十五法論……………七

目次

一

第一 色法論……………七

一 五根……………七

二 色境……………二

三 聲境……………一五

四 香境……………一八

五 味境……………二〇

六 觸境……………二〇

七 無表色……………二五

第二 心王論……………三三

第三 心所法論……………三六

一 大地法……………三六

二 大善地法……………三九

三 大煩惱地法……………四二

四 大不善地法……………四三

五 小煩惱地法……………四五

六 不定地法……………四六

七 相應の意義……………四八

第四 心不相应行論……………五〇

一 列名……………五〇

二 得と非得……………五三

三 同分……………六一

四 無想果……………六三

五 二無心定……………六五

六 四相……………六六

七 名句文……………七三

第五 無爲法論……………八〇

中篇 問答分別(其上)……………八三

一 七十五法と五蘊……………八三

二	七十五法と十二處	九一
三	七十五法と十八界	九三
四	七十五法と三性	九五
五	七十五法と三界繫	九六
六	七十五法と有漏無漏	一〇〇
七	七十五法と有爲無爲	一〇一
八	七十五法と四諦	一〇三
九	七十五法と見修二斷	一〇四
一〇	六識と四十六の心所	一〇六
一一	十隨眠	一〇七
一二	九十八隨眠	一〇九
一三	本惑と隨惑	一一八
一四	三種の色	一二一
一五	六根六境と三界	一二三
一六	六識と三界	一二六
一七	五受と六識	一二九

後篇 問答分別(其下)

一八	五受と三界	一三一
一九	生靜慮と定靜慮	一三四
二〇	根本定と近分定	一三六
二一	三三摩地	一四〇
二二	三等至	一四一
二三	三賢	一四四
二四	四善根	一四六
二五	見道	一五〇
二六	修道	一五九
二七	無學道	一六〇
二八	預流向	一六一
二九	一來向	一六七
三〇	不還向	一七〇
三一	阿羅漢向	一七三

三二	預流果	二七
三三	一來果	二七
三四	不還果	二七
三五	十八有學	二八
三六	阿羅漢果	二八
三七	聲聞と獨覺と佛	二七
三八	八忍と十智と八見	二九
三九	二十二根	二九
四〇	相應無明と獨頭無明	二九
四一	欲貪と有貪	二〇
四二	七慢	二〇
四三	十二緣起	二〇

已 上

七十五法名目講義

舟橋水哉著

序論



一本文の種類。本文の最も早く開版されたものは、恐らく(一)寛文五年版の五位七十五法名目一巻であらうと思ふ。此には頭に五位の文字が蒙らしてある。又註釋の見聞と合巻して出版されて居る。本文のみの開版は多分此一本だけかと思ふ。其他は何れも冠註の形で現はれて居る。其最も古きは(二)寛文八年版、編者不明の首書評註一巻二冊である。増益書籍目録には、編者は參考の様になつて居るが、其が果して編者の名かどうか分らぬ。從來本文として使用されて居るのは實に此書であつて、前の寛文五年版のは現今絶版となつて居る。私は幸にして一部を求めたが、他では殆ど見たことがない、しかし古

い寺へ往つて搜索したら案外出て来るかも知れぬ。其後は近年まで改版されて居らぬが、明治二十年前後に至て、此書一時流行したものか、冠註、標疏、冠導、標科、傍訓など種々の書が開版された。以來此等の書が使用されたけれども、中では冠註が最も善く出来て居る様に思はれる。最近佛教大系の中にも編入されたから、其を合せる本文が七本あることとなる。

二、版本註釋の種類。註釋として最も古い版は、(一)慶安五年版、著者不明の見聞五卷三冊である。此から見ると本文の開版は、或は寛文以前、既に慶安頃に顯れたものかも知れぬが、遺憾未だ其が発見されて居らぬ。見聞は其後寛文五年に再版された。大立の懸譚には承應二年版もある様に記してあるが、實際にあるかどうかは知れぬ。廣益書籍目録には著者は榮觀だと記してあるが、榮觀がいかなる人かは全く分らぬ。私所持の俱舍頌疏縁起題額序、并に同世間品私の表紙裏には榮觀と記してある。此書は慶安四年の寫本であるから、或は其が見聞著者の所持本であつたかも知れぬ。次は(二)寛文十年開版、著者不明の鈔四卷である。今回佛教大系に會本として編入された。(三)安永九年

版本註釋の種類

開版、大立成譽の七十五法名目圖一卷。大立は淨土宗の人、此書は流行極めて少い様に思ふが、何れ澤山には出版されなると見ゆる。(四)嘉永六年開版、慧澄の俱舍七十五法大意一卷。此は直接の講義ではないが、しかし此に編入してもよいかと思ふ。前の首書なども勿論註釋に違ひないが、其は既に前に記しておいたから今は再記せぬ。鳳千の講義五卷。宮地義天氏の略解。最近織田得能氏の講義及び私の達意も出版されて居るが、版本としては割合に澤山に出て居らぬ。(五)享保十七年開版、宗禎の有宗七十五法記三卷。此は直接七十五法名目の註釋ではないが、しかし名目の書き方が不完全だといふので、書き改めたものが本書であるが、一面には名目の註釋書、否少くとも、參考書としてはよからうと思ふ。

三、寫本註釋の種類。寫本としての本文の古いのを見たことはないが、註釋としては徳川以前のものを二本ほど見たことがある。(一)私一卷。天文以前の寫本。(二)見聞一卷。文祿以前の寫本、何れも江州坂本で見たのである。此は廣く古い寺で搜索したら或は出て来るであらうと思ふ。豊山には(三)快道の

寫本註釋の種類

念流抄。(四)惠隆の圖解などがある。其他本願寺派では寶雲の聽錄、慧鏡の懸談、亮惠の訓蒙記、大谷派では慧環の耳滄錄、義讓の聞響記等、頗る澤山にある。けれど現今受験應用の参考書としては、今少し読み易くする必要があると思ふから、今度本書を出版することとしたのである。

四、名目の著者。著者はよく分つて居らぬ。見聞には上總の俱舍刑部阿闍梨の作だと傳へて居るが、其人がどういふ方が第一に名前が分らぬ。什慶の天台相性私の中には、南都腹籠の著者が俱舍刑部阿闍梨だとしてあるが、其が果して同一著者であるかないかはよく分らぬけれども、天文以前の註釋がある處から見ると、著者はどうしても四五百年以前らしく見ゆる。性員編目鈔には、腹籠の著者は清圓だといふ。詳細は七十五法名目達意七〇頁「七十五法名目の作者」の下を参照せられたい。今一つは良山の初學題額集の中、俱舍宗の下が殆ど全く同じ様に記されてある邊から見ると、著者は或は良山でないかとの説もある。明五位七十五法者、五位者、一色法、有十一、五根五境及無表色、五根者といふ様に書き出してある。尤も最後は三乘修行の得果差別の處

名目の著者

で終つて居つて、途中も名目より幾分短くなつて居る。けれども大體に於て同じものであるから、寧ろ良山の著と見たい様な心持がする。良山は淨土宗の人で、應永三年に題額集を著して居る。良山の事を俱舍刑部阿闍梨といった様には見ぬから、或は後に俱舍刑部阿闍梨清圓が題額集の俱舍宗の下を別開して、其を多少改筆して一冊としたものかも知れぬ。とに角題額集と無關係に名目ができたものとは思はれぬ。

五、名目の所屬宗派。大乘か小乗かといへば勿論小乗である。小乗の中では上座部の系統に屬する説一切有部の教義の一部を極めて簡単に叙述したもので、俱舍研究の入門として一般に使用されて居る。釋尊滅後先づ上座大衆の二部に分れ、上座部より説一切有部が分離した。其後世親論師現れて、有部の教義に大改善を加へたのが俱舍論であつて、後世此を俱舍宗と稱して居る。されば有部と俱舍とは教理の上に於て大なる相違がある、有部が極端なる多元論者であるに反して、俱舍は二元論を主唱して居る。名目の如きは何れの説を叙述して居るかといへば、俱舍入門の書ではあるが、しかし有部の教義を

名目の所屬宗派

題號の意

符述したものといはねばならぬ。八宗綱要に俱舍宗としてあるのも、あれも實は説一切有部とすべきである。故に名目の所屬宗派はといへば、俱舍宗といふよりも、私は寧ろ説一切有部と答へたいのである。

六題號の意義。普通には七十五法名目となつて居る。有部では萬有を七十五種に分類する、其七十五種のもを簡單に名目だけ挙げておくといふ謙遜の意味で、名目と名けたものらしいが、實際に於ては名目だけではない、勿論可なり委しい解釋を施し、其上に諸種の方面より見た考方を記し、且つ修行階級までをも記載してある。七十五といふ文字は、印度の書物には見當らぬ、支那では普光の法宗原に、以上總有七十五法とある、多分此が其源であらうと思ふ。普光は玄奘の高弟で、俱舍論記の著者である。法の字解は本文に入てから見られたい。以上序論終る。

本論

前篇 七十五法論

第一 色法論

一 五根

七十五法名目

一切諸法、不過五位。五位法者、第一色法有十一。五根、五境及無表色。五根者、一眼根、二耳根、三鼻根、此三根、處雖各二、二類境、識同故爲一。四舌根、五身根。此五根、五識、所依四大種所造。其體清淨如珠寶光。

【文科】諸法を五種に分類して、第一に色法を明す中、先づ五根を説く。

法

色

根

【字解】一、法とはモノといふ様な意味で、物でも心でも、何でも凡てに通ずる名である。故に諸法といへば萬有のことになる。法は能持自性の義というて、能く自性を持つ。物は物の性を備へて居る、心は心の性を備へて居る、其れ其れ自分／＼の性質を具備する邊で、此を法と名けるというて居る。二、色とは物の事、心に反對した物の事を、佛教では常に色と稱して居る。禪宗などで色即是空といふ色も、同じ事である。色には變壞と質碍との二義がある。變壞とは變り壞ける、新しい本でも段々古くなつて、其内には虫が食ふ、鼠が食ふ、壞けたり、焼けたりして、遂には失はれて仕舞ふ。又質碍とは、物理學に所謂不可入性であつて、二物同時に同處を占有すべからざる性である。こゝに甲の本があれば、其と同處に、同時に乙の本を置く譯には行かぬ。本は色法であるから、互に拒む性質を持つて居る。水の中へ砂糖を入れても、一向に拒まぬ様に見わるが、其は水の分子の間へ砂糖が入る丈で、水と砂糖とが眞に同處にあるのではない。詳細は俱舍論頌疏要義二六頁「色の二義」の下を見られたい。三、根とは増上の義、丁度木の根に増上の意義があつて、よく木を倒れし

類境識

五位の諸法

めない、又葉を出し、花を咲かしめ、實を結ばしめる。其と同じ様に五官、例せば眼に増上の義があつて、松を見れば松に對して種々の精神作用を作さしめる。五官は精神作用を作さしめる所の助けとなるから、其で五官の事を五根と稱するのである。四、類境識とは、類は同類で、左の眼と右の眼と同類といふ事。境は所對の境で、左眼所對のものも右眼所對のものも、何れも同じ境界を見て居る事。識は能對の心で、左眼から起す心も右眼に依て起す心も、其心に二つはない、兩眼で見ても起る心は唯一であるといふ事。四大種の事は觸境の下に出て來るから其下を見られたい。

【講義】世界にありとあらゆる萬有を五類の位に分つ事ができる。一に色法、二に心王、三に心所法、四に心不相應行、五に無爲法である。第五の無爲法に對して前の四類を有爲法といふ。無爲法が常住法であるに反して、有爲法とは無常法の事である。其中で色法は物、心王と心所法とは心、心不相應行は非物非心の力だといふのである。かういふ様に五類に分類する事は至て古い説であつて、勿論名目の著者の説ではない。頌疏要義二〇二頁「諸法の分類」

五
根

の下を参照せられたい。

其五位の法の中で、第一は色法即ち物、此を又十一種に分つ、五根と五境と其に無表色を加へる。先づ五根から説明して見れば、世に所謂五官であつて、一に眼根、二に耳根、三に鼻根、四に舌根、五に身根である。次第の如く其が視聽嗅味觸の官能を有して居る。眼でいへば網膜の處が即ち眼根であつて、單に生理學的に見るといふ丈の官能だから、まだ知るといふ心理學の範圍ではない。五根は勝義根と扶根とに分れる。今いふ五根は勝義根である。眼球の如きは其勝義根を扶ける所の扶根である。五根の中で眼は二、耳も二、鼻も二、舌も二、身も二、これら二は同類の性である。二には所對の境を同うして居る、三には能依の識が同一であるから、根體は二ヶ處になつて居つても、今は其を一として數へておく。根と識との關係は、心が所對の境を識るに就いて、根の助けを借らねばならぬから、識に對して根は依據、即ち所依であり、識は其に對して能依である。能依の識、所依の根というて居る。次に根と境との關係は、根は外境を取るから、能取の根、所取の境というて居る。又識と境との關係は、識は境が

無くては起らぬ、識は外境に攀附する意味で、縁る、即ち能縁の識といひ、其に對して外境を所縁の境というて居る。其れ故今も五根は五識の所依といふ。五識は六識の中の五識であつて、一に眼識等である、此事は心王の下で説明する。有部の考では、凡ての色法が皆地水火風の四大種からできて居るといふ。其で今も五根は四大種の所造だといふのであるが、しかし五根は何れも靈妙不可思議なる作用をなすから、吾人の眼、即ち肉眼では其五根は見られぬものとせられてある。此は特別の清淨な四大種からできて居つて、丁度喩へて見れば珠玉の光りの様なものだといふ。聖者が天眼通で見れば見られるといふのは、多分檢微鏡で見れば見られるといふ意味であらうと思ふ。此處に所造といふのは、此には有部特別の解釋があるが、其は四大種の下で説明することとする。五根の順序が眼耳鼻舌身であることは、此は今の科學に一致するから面白い。なせ眼を先きにしたかといふに、五官の中では眼の構造が最も精好で、其作用が最も鋭敏だからである。次は耳乃至身根は最も劣等である。頌疏要義二〇四頁「五根」の下、及び三四頁「六根の次第」の下を参照せら

りたい。

二色境

五境者。一色境。五根、五境、雖是色、爲差別、最勝、故獨立、色處名。二聲境。三香境。四味境。五觸

境。色境有二。或ハ。一顯色。有二。一形色。顯色十二者。一青。二黃。

三赤。四白。五影。障、光明、於中、餘色、可見、名影。六光。日、燭、名光。七明。月、星、火、藥、等、諸、燭、名、明、也。八闇。闇、影、名、闇。九

雲。十煙。十一塵。十二霧。形色八者。一長。二短。三方。四圓。五高。六

下。七正。形、平、等也。八不正。形、不平、等也。

【文科】次に五境を明す中、第一に色境を説く。

【字解】一色境とは眼根所對の境に名けたものである。色法の色と同じ文字であるから、かういふのを總即別名と稱する。總の名がすぐに別の名となつ

顯色と形

色境

たのである。二色處とは即ち色境の事であつて、寧ろ色境といふ方が行文上よい様に思はれる。六根六境を十二處といふ時の色境は即ち色處であるから、色處といつても差支ないが、ごちらかといへば色境とあつて欲しい。其で六根六境六識を十八界といふ時の色境は即ち色界と稱せられる。されば色處も色界も色境も何れも同じものを指すのである。三顯色とは顯現せる色の事で、形に對した名である。物の色とか、光りとか、雲とかいふ様なものをいふ。四形色とは此は形の方で、長短とか、方圓とかいふ様なものをいふ。白色の四角形があるとするれば、其ものは白といふ顯色の分子と、方といふ形色の分子とが集つてできたものだといふのが有部の説である。其が白いと見られるのは、白の顯色を見たのである。又其が四角形と見られるのは、方の形色を見たのであるといふ、一寸面白い考へ方である。

【講義】次に五境とは、五根の順序にいふと、一に色境、二に聲境、三に香境、四に味境、五に觸境である。聲境以下其れ、特殊の名がついて居るが、眼根所對の境だけは總即別名で、色といふ總の名を其儘すぐにつけて色境と名けてある。

色境

丁度京都といふ市の名は、總の府の名と同じ事である様なものである。同じ名ではあるが、其京都といふ名が、伏見や丹波の福知山など、區別される意味がある。そこを本文に差別といふ。又京都は府の内でも最も大なる都市であるから、最勝の意味で、此市にのみ京都と名け、伏見や福知山には名けられぬ様なものである。そこを本文に最勝というて居る。五根五境何れも色には違ひないが、しかし眼根所對の境のみは、色といふ名義に對して最も適切である。他の四境では變壞質碍の二義があまり明瞭でない。其れ故此境にのみ色と名け、而も其がすぐに他の四境との區別になる。丁度無名の書物が一冊だけあるといへば、其がすぐに他の書物との區別になつて、此が自分のものであると知られる様なものである。

顯色の十種

色境を二種に分つ、一に顯色、二に形色、其顯色を又十二種に、形色を八種に分つから、合せて二十種となる。顯色の十二種とは、一に青、二に黄、三に赤、四に白、青黄赤の三色は、今の科學でも此を素色と稱して居るに一致する。有部が白を此に加へたのは無理はない。白は潔白で、最も氣持のよい色である。西

形色の八種

洋でも白紙といふ諺がある。有部が紫や黒を加へななんだのは最も面白い點である。尤も此は有部特殊の教義といふよりも、印度當時の科學を採用したものであらう。五に影。此は闇の反對で、影の中では物が元々、闇の方は物が見えぬ。影や闇が特殊の實體を備へて居ると見た有部の説も、随分極端な朴素的實在論といふべきである。六に光。此は太陽の光りをいふ。七に明。此は太陽の光りを除いた他の月や星や火藥や電氣の光りをいふ。八に闇、九に雲、十に煙、十一に塵、十二に霧。愈出で、愈妙なものが顯色として數へられて來た。次に形色の八種とは、一に長、二に短、長く見ゆるものは長の分子、短く見ゆるものは短の分子が集合して居る結果である。三に方、四に圓、方の分子が集つて四角形となり、圓の分子が集つて圓となる。五に高、六に下、此は高いと卑い。七に正、八に不正。此は正三角形と不等邊三角形との區別の如きである。頌疏要義二〇六頁「顯色と形色」の下參照。以上色境終る。

三聲 境

聲有八種。一有執受大種爲因有情名可意聲。如語出ニハ好聲也。二有執受大種爲因有情名不可意聲。如語出ニハ惡聲也。三有執受大種爲因非有情名不可意聲。如拍手等好聲也。四有執受大種爲因非有情名可意聲。如化語好聲也。五無執受大種爲因有情名可意聲。如化語好聲也。六無執受大種爲因有情名不可意聲。如化語惡聲也。七無執受大種爲因非有情名可意聲。如林風河等好聲也。八無執受大種爲因非有情名不可意聲。如林風河等惡聲也。

【文科】第二に聲境を説く。

【字解】一有執受とは感受性を有するもの、事で、有情所發の聲は皆其れである。此に反して無執受は非情所發の聲をいふ。二有情名とは詮表ある聲のこ

とで、理解せらるべき聲、即ち語をいふ。從て非有情名とは拍手の聲や雷聲の如きものをいふ。三可意とは心に叶つた聲、從て不可意とはいやな聲をいふ。四化語とは化人の語である。幽靈の言や、出現せる佛の語などをいふ。【講義】聲境を八種に分つ。其は一に有執受か無執受か、二に有情名か非有情名か、三に可意か不可意か、此三對の條件から、次の様な八種の聲となる。一に有執受の大種からできて居る而も詮表ある可意聲、即ち唱歌等の愛すべき聲。二に有執受の大種からできて居る而も詮表ある不可意聲、即ち怒罵等の惡むべき聲。三に有執受の大種からできて居る而も詮表なき可意聲、即ちやさしき拍手等の聲。四に有執受の大種からできて居る而も詮表なき不可意聲、即ち人を打つ時の如き聲。五に無執受の大種からできて居る而も詮表ある可意聲、即ち化佛の愛語の如きもの。六に無執受の大種からできて居る而も詮表ある不可意聲、即ち幽靈の怨語の如きもの。近代として考へて見れば、蓄音機から出る語の如きは、確に此第五第六に相當すべきものである。七に無執受の大種からできて居る而も詮表なき可意聲、即ち溪川のチヨロ〜と流れ

る聲や、鐵瓶の湯の涌く聲の如きもの。八に無執受の大種からできて居る而も詮表なき不可意聲、即ち洪水、暴風等に依て出づる聲をいふ。頌疏要義二〇七頁「聲の八種」の下参照。

四 香 境

香有_二四種_一。不論_レ唯_レ三_一。一好_レ香_一。如_レ沈_レ檀_一。二惡_レ香_一。如_レ葱_レ菴_一。三等_レ香_一。好_レ惡_レ香_一中_ニ。四_レ不等_レ香_一。好_レ惡_レ香_一中_ニ。損_レ依_レ身_一者_{ナリ}。

不等_レ香_一。好_レ惡_レ香_一中_ニ。損_レ依_レ身_一者_{ナリ}。

【文科】第三に香境を説く。

【字解】一、本論とは品類足論の事で、此は世友の著である。婆沙論に關係ある紀元一世紀頃の世友よりも、普通は百年ばかり前の人だと言はれて居るが、其と同人か異人かはよく分らぬ。品類足論が有部の主要聖典であつて、非常に重く見らるゝ點と、婆沙で世友が重く見らるゝ點と、偉人の世友が僅かの間に二人出世するは頗る怪しむべき話である。或は同人ではなきかと思はるゝ。

が、しかしまだ確なことは分らぬ。二等香とは衛生上に利益ある香の事。依身とは此肉體の事である。従て不等香は衛生上に害ある香の事であるが、しかし本論では、今の等香を好香といひ、今の不等香を惡香と稱して居るから、同じ名前でも本論と此書とは自ら意義を別にして居る。三、沈檀とは沈香と白檀との事。四、葱菴とはチギとニラとの事。

【講義】本論では香境を三種に分つ。一に好香、此は衛生上に利益ある香。二に惡香、此は衛生上に有害の香。三に平等香、此は衛生上に利益もない、又害もない香。かういふ様に衛生上から三香としたのが本論である。分類としては寧ろ此方が正確であると思ふ。四香といふ時には、三香の中の好香を等香といひ、惡香を不等香といひ、平等香を好香と惡香とに開く。其れ故四香の中の好香は、精密にいへば衛生上に利害なきものゝ上にて、而もよい香。惡香は、其中にて而も惡むべき香といふことになる。頌疏要義二一〇頁「香の三種四種」の下参照。

五味境

味有六種。一甘。二酸。三鹹。四辛。五苦。六淡。

【文科】第四に味境を説く。

【字解】一甘はアマイ。二酸はスイ。三鹹は鹽カライ。四辛は唐辛の如きヒガライ。五苦はニガイ。六淡は淡白な味。

味境の六種

【講義】味境を六種に分つ。一に甘、二に酸、三に鹹、四に辛、五に苦、六に淡である

六觸境

觸有十一。一地。二水。三火。四風。五滑。六澁。七重。八輕。九冷。十飢。十一濕。頌曰。色。二或二十。聲。唯有八種。味。六。香。四種。觸。十一。爲性。

能造所造

【文科】第五に觸境を説く。

【字解】一能造所造とは造り手、造られ手といふ事であるが、しかし物理学でいふ酸素と化合物との如き關係ではない。水は酸素水素の化合物であるから、酸素水素は能造、水は所造といふ様にも見れるが、今の所謂能造所造は決してさうではない。例へば父母の間に子が生れるが如き、父母は能造で、子は所造、今はかくの如き關係だと思へばよく分る。子が父母の外に別に存在する事が注意すべき點である。地水火風の四大種が集合して、色香味觸等を生ずるといふ事は、四大種其物の外に色香味觸の存在を認めねばならぬ。二地水火風とは、吾人の見て居る地水火風は假の四大とて、其は今の所論ではない。所論の地水火風は吾人の眼には映せぬ、唯觸れることに依て此を認める丈である。堅いと思ふのは地大、潤ひがあると思ふのは水大、暖かいと思ふのは火大、動くと思ふのは風大である。堅いものには保持する作用があり、潤ひあるものには物を攝し固める作用があり、暖かいものには熱する作用があり、動くものには縦横にのびる作用がある。三冷飢渴とは、冷飢渴其物が何も觸境では

地水火風

冷飢渴

味境、觸境

頌曰

四大種論

ない。何物か觸れたから吾人は冷飢渴を感ずる、其觸れるものが觸境である。四、頌曰とは、此頌は俱舍論頌の文である。俱舍論頌は世親論師、即ち天親菩薩の造られた聖典であつて、俱舍の研究には大切なものである。

【講義】觸境を十一種に分つ。一に地、二に水、三に火、四に風。以上四種を四大種と稱し、又能造ともいふ。能造のものは種子の如き意義を有するから種と稱し、又其等は遍く色法に行き亘つて、いかなる色法をも此四大種が造る邊にて、特に此種に大の字を附した。されば觸境の中の他の七は勿論、其外の四境及び五根、無表色、何れも皆所造と稱せられる。所造は能造の外に存在する、今の物理學化學から見るとおかしく聞ゆるが、かういふのは當時印度の思潮であつて、決して怪しむには足りないのである。勝論外道の如きも、父母の極微が集合して子微を生ずるといふのに、子微は父母の極微の外に存在する、即ち三個が集つて一團となるといふ。今も地水火風の外に色ができ、又香ができ、味ができ、觸ができる。地水火風も極微といふ分子から成立し、色香味觸も亦何れも別の極微から成立して居ると言はれて居る。地水火風と色香味觸と

の各分子の集合せるものが即ち化合物であつて、吾人の見て居る水の如きは、こゝに始めて成立されるといふ。水の中には、地水火風の分子、及び色香味觸の分子、何れも皆集合されて居る。此八種は丁度酸素水素に比較すべきものである。有部に依れば最も少き範圍に於て、色法は凡て此八種が集合して居るといふ。八事俱生隨一不滅といふ語は、確に此意味を顯したものである。八事とは地水火風と色香味觸とである。若し聲を加へば九事となり、或は身根を加へても九事となる。八事とは最も少き場合に就いていふ。

こゝに一個の疑問がある。四大種は能造だから本より存在することも考へられるが、色香味觸の實質は何れより來るものか。或は四大種の一分が分解されることも見るべきか、其邊を有部はいかに考へて居るか。其に就いて先づ親子の喩の上から考察して見ると、子はどうしてできるものかといふに、有部の輪廻轉生の考からいへば、親の成分が分解されるのではなくて、元來外から子が入て來たのだといふ。子は單に父母の縁を借つて誕生したるに過ぎぬ。されば母だけでもよきさうだともいへるが、有部に依れば、母だけでは入り込

滑造等

む縁にならぬ、姪欲の境を見て貪を起し、そこへ馳せ行つてこそ始めて母胎に入る事ができる。かくて子が生れるのだから、實は父母とは根本的に其體を異にして居る。有部は四大と所造との關係を丁度かういふ様に解釋して居る。有部は又法體の恒有を信じて居る。能造でも所造でも其體は恒有だといふ。唯作用の上に變化があつて、已作用は過去、正作用は現在、未作用は未來である。未來にある所造の法が、能造の四大の縁を借て、こゝに始めて現在法となつた、其を今所造といふのである。有部の能造所造論はかういふ様に解釋せねばならぬ、此點に於て多くの人は誤解して居るかの様に思はれる。然らば固液氣の三體といふ様に種々の物ができるのはどうかといふに、此に體増用増の二説があるが、有部は體増説を取つて居る。其は固體には地の分子、液體には水の分子、氣體には風の分子、又熱體には火の分子が澤山に集合するからだと言明して居る。四大種論は西洋でも古くからあつて、希臘哲學の主要部を形造つて居る。頌疏要義二三頁「四大種と能造所造」の下参照。五に滑とはナメラカ。六に澁とはザラツポイ。七に重とは重いもの。八に

輕とは軽いもの。以上四種は皆觸れて感得すべきもの。九に冷、十に飢、十一に渴。此も何物か、觸れたから、冷飢渴を感ずる、其何物かを今觸境と名ける。此にて觸境は終る。

次に五境論を結ぶ爲に、俱舍論頌の文を引用して居る。色には顯色と形色との二がある、細分すれば其が二十となる。聲は八種、味は六種、香は四種、觸は十種あるといふ事は前記の通りであるから、こゝに改めて説明するにも及ばぬ。これで五境の解釋は終る。

七 無表色

無表色ト、雖大種所造性、其體非種數、非令他表、知心故名無表色。體性有二種、身無表、語無表、身三

語四、七支、身三者。一、殺生、二、不與、三、虛誑語、四、離間語、五、取、三、欲邪行。語四者。一、虛誑語、二、離間語、三、虛惡語、四、雜穢語。

【文科】終りに無表色を説く。

【字解】一、無表とは表に對する語。身の働作や言語に顯れたを表業と稱する、

無表色

無表色

極微

人を殺すとか人を罵るのは此は身語に顯れた表業である。其が原因となつて未來惡趣に往くには、何物か其間を結びつけるものがなくてはならぬ。其貫通して居る一種の潛勢力を有部では無表色と稱して居る。無表色は一種の力である。二、極微とは極めて小さい微分子といふ事で、物理學に所謂分子である。物體を最も小さく分解したのが極微であつて、有部では天眼通でも其極微を見ることはできぬと稱せられて居る。頌疏要義九五頁「極微論」の下参照。三、殺生とは動物を殺すのみでなく、殺人でも何でも、凡て生きて居るものを殺すのが殺生である。植物を折るのは殺生の中へは入らぬ、有部では植物を有情と認めて居らないからである。四、不與取とは或は偷盜ともいふ。與へざるものを取ることで、竊盜でも強盜でも、凡て盜むことが不與取である。五、欲邪行とは或は邪淫ともいふ。淫欲の邪行といふ意味で、姦道の如きが其である。處女や尼を犯したのもさうである。又時と處にも制限があつて、其を犯したものはたとひ自妻でも邪行となる。尤も女の方からいうても同じ譯になる。六、虛誑語とは或は妄語ともいふ。虚言をいふ事。七、離間

身三語四

語とは或は兩舌ともいふ。語に依て友の仲をたがへる事。八、龜惡語とは或は惡口ともいふ。人の惡口をいふ事。九、雜穢語とは、染汚心から起す殘りの諸種の語を總稱して名く。

無表色

【講義】無表色は一種の力と見るのが最も正當である。其力は表に顯れて居らぬから、潛勢力であつて、無表と稱せられる所以である。有部では大體に於て心からすぐには無表を起さぬといふ。心で思うて居る事が、先づ身語二業の表業となり、次に無表が生ずる。最初にあの人を殺さうと思ひ、次に刀をふりあげて殺す、殺した刹那に無表が生ずる、其無表は臨終まで續く。其業に依つて次生に惡趣に生ずる處にて、始めて無表が斷絶する。されば殺人の表業と惡趣の果とを連結する其力が即ち無表色である。尤も業は必ずしも次生で成果するに定つては居らぬ。第三生で感ずるのもあるから、其時は無表色が第三生の初めまで續く譯である。所依の表業から顯れた無表であるから、有部は無表色を四大種の所生だといふが、此は隨分無理ないひ方であつて、有部自身にも辯解に困つて居る。此は寧ろ不相應行といふのが適當だから、阿梨

無表色

二十七

跋摩の成實論には此無表色を不相應行だとしてある。不相應行とは一種の力に名けたものだから、無表色を不相應行とする事は實に當前の歸結である。若し色法ならば極微の集合でなくてはならぬが、無表色に限つて有部でも極微の集合ではないといふ。極微の集合でないといふ點は、やがて無表色の非色論となる所以である。なせ無表といふかといへば、他に内心の善惡を表示せしめないからである。表業ならば合掌禮拜は善心を表示し、殺人の行爲は惡心を表示するも、無表業に至ては一向に其表狀がないから無表と名けたのである。

無表色には二種あつて、身業から來る無表色と、語業から來る無表色とに分ける。無表色は強い表業でなくては起らぬ故、善業或は惡業からは起るが、無記業とて、善でもない惡でもないといふ弱い業からは起らぬといふ。今こゝに惡業のみを出したは不完全な書き方といはねばならぬ。身業を三種に、語業を四種に分けるから、合せて七支となる。身業の三種とは殺生と不與取と欲邪行とである。又語業の四種とは虛誑語と離間語と龜惡語と雜穢語とであ

る。頌疏要義九八頁「身表業體論」以下三題の下參照。

無表有_三種、差別_二

一_ニ律儀、下此_ニ亦有_三

一_ニ別解脫律儀此_ニ復有_三八種_一、

一_ニ苾芻律儀

二_ニ苾芻尼律儀

三_ニ正學律儀戒女

四_ニ勤策律儀

五_ニ勤策女律儀

六_ニ近事律儀

七_ニ近事女律儀

八_ニ近住律儀男男女女通戒

無表色

一、二、靜慮律儀 亦名、定共戒、與、定同時故

一、二、無漏律儀 亦名、道共戒、與、無漏道俱故

一、二、不律儀 惡戒身、三語四

一、二、非律儀非不律儀 善惡處中

頌疏云、能遮能滅惡戒、相續故名律儀。上頌曰、色者唯五根、五境及無表。已上色、十一畢。

【字解】一、律儀とは善戒の事。戒を持てば行儀作法が正しくなるから此を律儀といふ。從て不律儀は惡戒の事である。又善惡二戒に入らざる處中のものは、律儀でもない不律儀でもないから、此を非律儀非不律儀と名ける。二、別解脱律儀とは、戒を受けると別々に惡事を解脱するといふ事。不殺生戒を受ければ、已後殺生せないといふことになる如くである。三、苾芻とは梵語であ

無表色の種類

つて、普通には比丘と寫してある。具足戒を受けたる人。從て苾芻尼は比丘尼の事。四、正學とは正しく六法を學ぶ人、此は女に限る。五、勤策とは梵語に沙彌といふ。長老に策勵せられて勤むる意、此は十戒を持つ人。六、近事とは梵語に優婆塞といふ。善法に近づく意、五戒を持つ人。七、近住とは羅漢に近づいて住する意、一日一夜の八齋戒を受くる人、此は男女に通ず。八、靜慮律儀とは、定から起る戒の事、又は定共戒ともいふ。九、無漏律儀とは、無漏は煩惱の關係を持たぬ事、無漏道から起る戒の事、又は道共戒ともいふ。一〇、頌疏とは、世親の俱舍論頌に、唐時代の圓暉といふ人が註釋を加へたもので、一般によく讀まれて居る書物である。委しくいへば俱舍論頌疏で、二十九卷ある。七十五法名目の次には多く此を讀むよになつて居る。

【講義】無表色を或意味に於て三種に分ける。一に律儀、二に不律儀、三に非律儀、非不律儀である。律儀を又三種に分ける。一に別解脱律儀、二に靜慮律儀、三に無漏律儀。別解脱律儀を又八種に分ける。一に苾芻律儀、二に苾芻尼律儀、三に正學律儀、四に勤策律儀、五に勤策女律儀、六に近事律儀、七に近事女律儀、

八に近住律儀。かういふ事は戒律の問題であつて、七十五法名目としてはあまり必要を認めない様に思ふから、不完全ではあるが、先づこれ位にして止めて置く。

次に頌疏の文を引いていふ。悪戒の續くの能く遮し能く滅するから律儀と名ける。戒を持つては一生の間殺生等をせない様になる。又俱舍論頌を引いていふ。色法とは五根と五境と、其外は無表色と、此十一種だけである。以上色法の十一種の解釋終る。

第二 心 王 論

第二心法トハ此於心王トハ此一有三名トハ此心意識トハ此集起トハ此名心トハ此思量トハ此名意トハ此了

別名識トハ此六識トハ此意根トハ此名七心界トハ此

六識中前五識無分別第六識有分別。意根現在爲識無間滅爲意也。

【文科】 第二に心王を明す。

【字解】 一、心法とは心王の事。單に心といへば心所に通するともあれど、こゝ

七心界

前五識無分別

意根

では心王の事を心法と名く。二、心王とは心を王に喩へたもの。心の作用を二種に分けて、其主なるものを心王といひ、伴なるものを心所といふ。三、集起とは心が元になつて種々の動作を集め起す義。四、了別とは了り別つ意で、認知する事。五、七心界とは、六識と意根との總稱で、其何れもが心であるから、特に心の字を附したるもの。界は一説では種類の義、同種類のものは其れ一團をなして居る。今七つに分れて居るから七界と名ける。六、無分別とは認知作用がないことであるが、しかし全くないのではない、弱い認知作用だけはある。其でない識と稱せられぬ筈である。分別に三種あつて、一に自性分別、物の自性を認知する事。此は六識に通ずる、しかし弱い認知作用である。二に計度分別、此は推理に當る。三に隨念分別、此は記憶に當る。後の二は第六識に限る。五識には強い計度隨念の二分別がないから、自性分別はあつても、特に無分別と稱する。七、意根とは、現在の六識に對してすぐ前刹那の六識に名く。二心并起を許さずといつて、二識が同時に起ることはない。又刹那生滅といつて、一瞬間も住しては居らぬ、生ずるとすぐに滅する。されば六識

は代るゝ刹那に生じて来る。前刹那の識が過去へ往つて、其境を開いて呉れたから、後刹那の識が生ずることになる。そこで現在生起の識に對して、既に過去へ往つた前刹那の識を特に意根と稱する。根は所依の義。無間滅とは、すぐ前刹那をさしていふ。無間は其間に隔てのないこと、滅は過去を顯す。頌疏要義二二頁「意根」の下参照。

【講義】以上色法の解釋がすんだから、これから心王の解釋にうつる。心王は主の如く總相を認知し、心所は伴の如く別相を認知する。心王は二識が同時に起る譯にゆかぬが、心所は少くとも十個以上一處に起る。一の心王が起れば、必ず多くの心所がついて起る。丁度陛下の行幸には多くの臣下がついて行く様なものとして居る。心王は此を六種に分つ。一に眼識、二に耳識、三に鼻識、四に舌識、五に身識、六に意識。五根に對して五識が立てられた。其上に心として最も大切な意識を加へて六識とする。眼識とは眼根を通じたる認知作用である。眼で花を見て、其に對して起つた心をいふ。此を術語では、眼識は眼根を所依として色境を緣すと稱して居る。乃至身識は身根を所依と

六
識

して觸境を緣する。又意識は意根を所依として法境を緣する。但し意識の所依は前五識の場合とは一寸異なる。前五識では識と根と同時に存在して居るが、意識では現在と過去とになつて居る。此は現在に何物にも依るものがないことを豫想して居る。即ち意識は直接に何でも考へられることを顯して居る。若し現在と過去とに就て云へば、實は前五識も意根を所依として居るから、意根と共依だと稱する。又意識は何でも考へられるから、實は前五識の境なる五境をも認知することができる、其れで五境の事を共境と稱する。六識といふは、一個の心作用が六種に作用するのか、又は六種全く別體であるか、此は識體一異といふ論題のある處で、昔から一個の問題となつて居るが、しかし有部としては識體を別とするのが正當である。識體は別であるが、同種類のものであるから、七十五法として數へる時は此を一個とする。本文に此一といふは即ち其れである。頌疏要義二八頁「識體一異」の下参照。

心王の事を集起の意味にて心と名け、思量の意味にて意と名け、了別の意味にて識と名ける。何れも心王に名けた名稱である。六識と意根とを合せて七

心界と稱して居る。六識の中前五識を無分別と稱し、第六識は有分別である。此は三種の分別から解釋される。心といふ名は三世に通じて廣く使用されて居るが識といふ名は現在の心に名けられ、又單に意といへば意根をさすから、其時は過去の心に名けられる。

第三 心所法論

一 大地法

第三心所法有四十六。心之所、有、故、名、心、所。大地法、十。大善地法、十。大煩惱

地法、六。大不善地法、二。小煩惱地法、十。不定地法、八。大地法、十

者。大、謂、受、等、遍、諸、心、故、地、謂、心、王、彼、行、處、故、大、法、之、地、故。一受。領、納、苦、一、想、於、境、取、名、爲、大、地、大、地、所、有、名、大、地、法、有、兩、重、依、主、釋、下、準、之。

三思。能、令、心、王、有、造、作。四觸。三、和、合、生、能、有、觸、對。五欲。希、求、所、作、事、業。六慧。於、法、能、有、簡、擇。七念。於、境、明、記、不、忘。八作

意。令、心、警、覺、也。九勝解。於、境、印、可。十三摩地。能、令、心、王、於、一、境、轉、也。頌曰。受、想、思、觸、欲、慧、念、

與、作、意、勝、解、三、摩、地、遍、於、一、切、心、上。

【文科】第三に心所法を明す中、第一に大地法を説く。

【字解】一、遍とは、遍く行き亘つて、何れの心にでもついて起る意味、そこが大といはるゝ點である。二、行處とは行する場處で、即ち心所の起り場處をいふ。心所は心王を起り場處として居る。心所はいつも心王にのみついて起る、心所のみ獨立しては決して起らぬ。三、依主釋とは六合釋の一で、此は後に出て來るが、簡單に解釋して見ると、主に依る釋といふ意味。二者の中一者が他のものに依つて居る時、其中央へ之の字を附して、其が依主釋だといふことを顯してある。例へば帝都といへば帝即ち都ではなくて、帝之都、帝に依るの都である。故に帝都の文字は依主に解釋せねばならぬ。四、俱非とは非苦非樂のこと、或は捨といふ。五、三和合とは根境識の三が和合する事。六、簡擇とはエラビわけることで、此は慧の作用をいふ。七、三摩地とは梵語であつて、等持

依主釋

三摩地

大地法

三十七

と譯すれども、こゝでは定じやうといふ方がよからう。定じやうというても定散の定ではなくて、心を一境に住せしめる意味である。其も刹那についていふのであるから、凡ての刹那にが定じやうといはれることになる。

【講義】第一は大地法であつて、此を十種に分ける。大地法といふのはどんな心にも、十ながらいつもついて起る心所である。そこが大といはるゝ點であつて、諸經には諸心に通すといつてある。地は心王をさす。心王は心所の起り場處だから地と稱する。大法即ち心所に依るの地といふ意味で大地と稱せられる。大地といへば即ち心王の名となる。心王の大地に依るの法といふ意味で、心所の事を大地法と稱する。大之地、大地之法、兩重に依主釋がかかる。後の大善地法でも大煩惱地法でも、皆此と同じ様に解釋すればよいのである。

一に受とは、外境を受けこむ意味で、そこに苦とか樂とか又は捨とかを感ずる、其感じが受である。實は外境を直に受けこむのではなくて、外境の觸れた其觸を受けこむのであるから、隨觸を領納するといふ言もある。苦樂捨は開け

大地法の
十

ば憂喜苦樂捨の五受となる。二に想とは外境に對して種々想ひ浮べる事。三に思とは、思は造作の義で、心を動かす動力である。常に思業と稱せられ、思が即ち業である。四に觸とは、根境識の三が和合するとそこに觸の義がある。單に三が相觸れる丈ではない、そこに別に觸の實體が生ずるといふのが有部の説である、此を三和生觸といふ。五に欲とは希望の事。六に慧とは分別力の事。忍智見は其慧の一分だといふ。されば智と慧とは幾分違ふことになる。七に念とは記憶の事。八に作意とは、ソラというて心を起らしむる心所。九に勝解とは、それでよいと許し決する心所。松を見て松なりと許し決するは此心所の作用である。十に三摩地とは定のことであつて、心を一境にとめる心所である。次に俱舍論頌の文を引いていふ、受と想と思と觸と欲と慧と念と作意と勝解と三摩地と此十の心所は、凡ての心王にいつもついて起ると、かう申してあると、大地法の解釋を結んだのである。

二 大善地法

大善地法十者

唯遍善心ニシテ故名大善

一信

澄淨

二不放逸

善法

三輕安

心堪任性

捨

於心平等

五慚

於所造罪

六愧

於所造罪

七無貪

於境不著

害

謂無損害

十勤

勇悍

頌曰

信及不放逸

輕安捨慚愧

二根及不害勤

唯遍善心

若婆沙等

更說欣厭

以非並起

此論不說

厭謂厭

背如緣苦集

欣謂欣

向如緣滅道

【文科】 第二に大善地法を説く。

【字解】 一、二根とは無貪と無瞋とである。此に無痴を加へて三善根といふ、されど無痴は慧の注で、既に大地法の下に出た故、今此を略する。二、婆沙とは、委しくいへば阿毘達磨大毘婆沙論で、卷数は二百卷もある。西曆一世紀頃、迦膩色迦王保護の下に、脇尊者、世友等の五百人が、之を編纂したものである。有部根本の大聖典で、有部は實に此に依て大成したのであつた。三、苦集とは、苦は迷の果、集は迷の因、よく苦果を集めるものは煩惱であるから、迷の因たる煩惱

の事を集といふ。四、滅道とは滅は悟の果、即ち涅槃、道は悟の因、で其に至る道である。苦集滅道は四諦と稱せられ、小乗の根本教理となつて居る。【譯義】 大善地法を十種に分つ。此十は善心ならばいつもついで起るから、其れで大善と稱せらる。地法の意味は前と同様であるから略してある。一に信とは、心を清くならしむる心所。二に不放逸とは、力めて善法を修する事。三に輕安とは、心をゆるやかにせしむる性。四に捨とは、心を平等ならしむるもので、從て警覺なき性をいふ。五に慚とは、造つた罪に對して、自分ながら恥かしく思ふ心。六に愧とは、造つた罪に對して、他人に比べて恥かしく思ふ心。七に無貪とは、境に執着せず、貪る心のなきもの。八に無瞋とは、腹を立てぬ事。九に不害とは、人に損害を加へぬ事。十に勤とは、心を勇悍ならしめて勤める事。例の通り頌を引いて結ぶ、信と不放逸と輕安と捨と慚と愧と無貪無瞋の二根と不害と勤と、此十は善心の起る時いつもついで起ると。若し婆沙論に依る時は、此外に更に欣と厭とが加へてある。欣は欣求、願ひ求むる。厭は厭離、厭ひ離れる。此二は同時に起ることができぬ故、善の心所であつても、大善

地法とはいはれぬから、今こゝには説かぬ。厭は四諦の中、苦集を縁するが如きもの、欣は滅道を縁するが如きもの。

三 大煩惱地法

大煩惱地法、六者。一、無明。二、放逸。三、懈怠。四、不信。五、惛沈。六、掉舉。頌曰。癡逸怠不信惛掉恒唯染。

【文科】 第三に大煩惱地法を説く。

【字解】 染心とは、委しくは染汚心といひ、汚れた心のこと。善惡無記の三性の中では、惡と無記の一分とに通ずる。無記には有覆と無覆とがあつて、有覆の方は染心である。

【講義】 大煩惱地法を六種に分つ。此は染心ならばいつもついて起るといふ

大煩惱地法の六

意。一に無明とは、其體愚痴で、理の如く知るそのできぬ心。迷の根本となるものなれば、十二緣起の初めが無明であり、又起信論などにも無明の事を委しく説いてある。二に放逸とは、前の不放逸の反對。三に懈怠とは、前の勤の反對。四に不信とは、前の信の反對。五に惛沈とは、心をクラク沈ませるもの。六に掉舉とは、心をトビタツ様にするもの。頌にいふ、痴即ち無明と放逸と懈怠と不信と惛沈と掉舉と、此六はいつも染心の時について起る。

四 大不善地法

大不善地法、二者。一、無慚。二、無愧。頌曰。唯遍不善心無慚及無愧。

【文科】 第四に大不善地法を説く。

【講義】 大不善地法を二種に分つ。不善心即ち惡心の時はいつもついて起るから大不善地法と名ける。一に無慚とは前の慚の反對。二に無愧とは前の

大不善地法の二

愧の反對。頰にいふ不善心の時にいつもついて思ふものは、無慚と無愧との二の心所である。

五 小煩惱地法

小煩惱地法十者。唯修所斷、意癡相應、各一ニハ、忿除瞋、瞋及害於情、非情、令心憤發。、二ニハ、覆隱蔽、自即。、三ニハ、慳違財施、法施、令心慳著也。、四ニハ、嫉於他、請與盛、事令心不喜。、五ニハ、惱堅執、諸有罪、事不取、如理、諫理。、六ニハ、害於他、能為逼迫、由此行打罵等。、七ニハ、恨於忿、所緣、數數、尋思、結怨、不捨。、八ニハ、詔謂是、心曲、由是、不能、如實、自彰。、九ニハ、誑謂能、惑他。、十ニハ、憍染著、自法、令心傲逸。、小惑更有ニハ、

多種、皆應、忿等攝、頰曰、忿覆慳嫉惱害恨詔誑憍如是類、名為、小煩惱地法。

【文科】第五に小煩惱地法を説く。

【字解】一、小とは、割註から見ると三義あることになつて居るが、大の字から見ると、遍の意味がなく、唯どれか染心について起るといふ義になる。第三の

各別現行といふのが即ち其である。二、修所斷とは、修道所斷の意で、修道の時斷せられるといふ事。修行階級の中に見道修道無學道の三道あることは後の方に出て来る。三、意癡相應とは、意識と一處に而も無明と相應して起るといふ事。四、法施とは、法を施す事。法を説いて聞かせる事。五、數數とは、タビタビといふ事。六、小惑とは、惑は煩惱の異名、從て小煩惱と同じ意味になる。【講義】第五に小煩惱地法を十種に分つ。此煩惱は、第一に修道所斷であるのと、第二に意癡相應であるのと、第三に各別現行であるのと、此三義に依て小煩惱と稱せられる。一に忿とは、やはり忿怒の意であるが、前の瞋及び害を除いたもの、其は有情非情に對して現はれる。二に覆とは、自分の罪を覆ひ隠す事。三に慳とは、吝む事で、財施や法施の反對をいふ。四に嫉とは、嫉む事で、他の盛なるを喜ばざる心。五に惱とは、人の諫めを用ひずして、却て獨り惱む心。六に害とは、損害の心より遂には打ち又は罵るのをいふ。七に恨とは、忿が元で段々重なるに遂には怨みを結ぶ様になる。八に詔とは、詔ふ事で、心が曲つて居るから、自分の思ふ通りには言語や動作に現れて居らぬ。九に誑とは、人を

タブラカス事。十に憍とは、自分をエライものとしてタカブル事。小煩惱は外にもまだ澤山あるが、しかし此十の中に含まれ得べきものだから、別に擧ぐるには及ばぬ事である。頌にいふ、忿と覆と慳と嫉と惱と害と恨と諍と憍と、此の如きものを小煩惱地法と名ける。

六 不定地法

不定地法、入者、不入五地、名爲不定、婆 一、尋、謂尋求、心、麁性 二、伺、謂伺察、心、細性 三、睡眠、謂、伺察、心、細性

四、惡作、惡作、事、心、迫悔性 五、貪、謂、愛 六、瞋、謂、恚 七、慢、謂、對於他、心、自舉性 八、疑、謂、於諸理、猶豫爲性 略

頌曰、尋伺及悔眠貪瞋與慢疑不入五地故名不定地法也

【文科】第六に不定地法を説く。

【字解】一、惡作とは、悔又は追悔の事で、前になしたる事を、ごうも悪かつたことより悔む事である。唯識では此をヲサと讀まして、作を惡むといふ様に解

惡作

略頌

不定地法の八

釋して居る。二、諦理とは、四諦の理、其に對して疑を懐くのが疑である。三、略頌とは、此は俱舍論頌の文ではない、俱舍には不定地法の頌文がないから、そこで著者が前と同じ様に作つて見たものである。

【講義】第六に不定地法を八種に分つ。前の五地に入らざる邊より不定地といふ。此はいつ起るか定つて居らぬ。起る時もあれば起らぬ時もある。婆沙論には、更に怖の心所を説いて居るが、今は彙類して八種とする。一に尋とは尋求の義、龜なる心に名く。二に伺とは、伺察の義、細なる心に名く。世界は欲界、色界、無色界の三界に分れて居る。欲界や色界の初禪天では尋伺はあるが、色界の第二禪天以上は尋も伺も決して起らぬと稱せられてある。初禪天と二禪天との間に中間定といふがあつて、こゝでは伺だけあつてもう尋はないといふ。頌疏要義二一七頁「十八界の尋伺分別」の下參照。三に睡眠とは、心をクラクするもので、チムル事。眞に寝たのは極睡眠とて、此は心所ではない、極睡眠に至るまでの處を睡眠といふ。四に惡作とは、悪い事をしたとて後悔する事。但し惡作は善惡に通ずる、何となれば盜賊の如きは、昨日あれを

盗んでおけばよかつたと後悔する、かういふのは悪の悪作である。五に貪とは無貪の反対で、此に姪貪と欲貪との二がある。姪貪は姪欲の事。欲貪は金が欲しい器具が欲しいの心。愛には信愛と貪愛とあつて、貪愛が即ち今の貪である。信愛とは佛を敬愛するが如きをいふ。六に瞋とは無瞋の反対で、恚といふも同じ事である。色界以上には瞋はないとせられて居るから、瞋は欲界の特色である。七に慢とは、他に對して自らタカブル心で、前の憍によく似て居る。慢には七慢あつて、我慢とか卑慢とかいふのがある。八に疑とは、四諦の理に對して疑を懷き、決定のできぬのをいふ。小乗の根本教理は四諦であるから、今四諦に就いて疑の心所を解釋するのである。著者の略頌にいふ、尋と伺と悔と睡眠と貪と瞋と慢と疑と、此八は前の五地に入らないから、其で不定地法と名ける。

七 相應の意義

心心所名相應法、有五義、一所依平等、一所緣平等、

心心所、必、同所依根、

同、所、緣、境、三行相平等、心、心所法、其、體、明、淨、四時平等、謂、心、心所、必、定、同、時、五事平等、事、者、體、心、

心所法、其體各一、已、上四十六心所等、

【文科】終りに相應の意義を説く。

五義平等

【講義】今まで心王心所の事を説いたから、これからは心王心所を相應法と名くるといふ事を説くのである。心王心所は次の如く五種の條件の下に相應法と稱せられる、此を五義平等と申して居る。一に所依平等。此は心王心所が所依の根を同じうして居るとで、例せば眼識の所依は眼根、其について起る心所の所依も同じく眼根、といふ様に所依の根が同じいのを所依平等といふ。二に所緣平等。心王心所は所緣の境を同じうして居る。眼識ならば所緣は色境である。三に行相平等。此は心王の行する相、即ち起る相と、心所の起る相とが相等しいといふ意味。共に心作用の事であれば、其邊は相等しいといへる。しかし精密にいへば、心王と心所とは境に總別の差があるから、唯識

といふ。五に無想定、六に滅盡定。此二を二無心定といふ。七に命根。命根とは壽の事で、イノチをいふ。八に生、九に住、十に異、十一に滅。此四を四相といふ。有爲法を相する邊から四有爲相とも稱せらる。十二に名身。名は作想と稱して、名に依て種々の想を作す、松といふ名から吾人は其に對する種々の考を作す故、名は作想と註して居る。俱舍の頌では單に想とあるも、註釋の上では作想と申してある。總説といふは複數といふ意味で、總説を以て身の字を解釋したのである。十三に句身。松は綠なりとか、花は紅なりとか、一章をなせるものが句である。十四に文身。單にアとかイとかいふ字が文である。尤も紙面に顯れた文字を文とはいはぬ、其は下に至て委しく説くこととする。こゝは單に列名の下であるから、先づ名を擧げる丈として、一々の解釋は下に譲ることとする。例の頌文では、心不相應行とは、得と非得と同分と無想果と無想定滅盡定の二無心定と命根と生住異滅の四相と名句文身の如きものをいふ。

二 得と非得

問得獲成就差別云何。答從來未得法上得創至生相名得名獲。不論初後得至現在名成就也。

【文科】十四不相應を明す中、第一に得非得を説く。

【字解】一、得とは得せしむる力をいふ。吾人が物を得して居るのは、單に因縁の關係で得せられたのでなく、其外に得といふ一種の力あつて此を得せしめるのだといふのが此得である。從て非得といふのは、得の反對で、物を引き離す力をいふ。有部に依れば、此の如き二力が特に實在して居るといふ。二、獲とは得の一部に名けられたもの。得其者が未來から段々進んで來て未來生相の位に至れる時、其時を特に獲と名ける。得も獲も同じ様な事なれど、有部では此の如く區別をつけて居る。三、成就とは、其獲が現在に至つた時をいふ。成就も得の一部に名けたものなれば、得は總名で、獲成就は別名といふ事にな

得と非得

獲と成就

得と非得

五十三

得非得の作用する範圍

る。四、生相とは、次下四相の下で解釋するから、今は略しておく。
【講義】第一に得非得を解釋する。物を結びつける力が得だとすれば、一寸引
力に似たものであるが、しかし其力はどの邊にまで及ぶかといふに、大體に於
て得の力は有情に及ぼして非情に及ぼさない。本が自分のであつても、其本
には得はかつて居ない。自己の五蘊即ち依身に結びついて居るもの丈に
得がかゝる。五根や五識又は煩惱等には得が關係して居る。他人と非情と
には得は關係せぬ。又擇滅非擇滅には得が關係する。其れ故俱舍の頌には、
自相續二滅とあつて、自相續は自身の事、二滅は擇滅非擇滅の事、されば得の力
は自身と二滅とに局られて居る。從て非得の作用する範圍も此と同様であ
る。得非得相翻而立といつて、得と非得とは正反對であるから、得のかゝらぬ
ものは非得もかゝらぬ。

得獲成就の差別

初に問答を設けて、問の意は得と獲と成就とはどう異なるかと問ふ。答の下は
明瞭を欠いて居る。得に就いて第一に心得おくべきは能得の得と所得の得
とを混雜せぬ様にせねばならぬ。能得の得は不相應行なれど、所得の法は自
身と二滅と何でもよい。今は能得の得に就いて論ずる。得其者が未來生相
の位に来る時、特に其を獲といふ。其が現在に入て繼續して居る間を特に成
就といふ。しかし精密にいふと、得が繼續して居るのは、其は刹那／＼に分け
ることができぬ。第一刹那の生相の位は獲で、現在に入れる時其が成就とな
る。第二刹那の現在に成就であるが、生相の位に在るのは此を何といふか。
第三刹那でも、凡て生相の位に在るのを何と名けるか、問題である。其で私
が思ふには、得其者の生相の位に在るは獲、現在に入れるは成就と、大體をかく
の如く定めて、第二刹那でも第三刹那でも、凡て生相の位に在るは獲、現在に成
就、又生相以前の未來に在るは得、過去に入れるも得といふより外に名はない。
獲成就は單に得の一部に名けたものと、かういふ様に解釋して見たい。しか
し俱舍論の上は左様になつては居らぬ、前述の通りであるから、何と名けてよ
いか不明の處がある。本文に未得の法とあるは、本論では未得の法と已失の
法とに分けてある、此は所得の法に就いていふ。精密にいへば、所得の法は未
得でも已失でも何でもよい、若し未得といへば、已失を略するのはおかしい。

本文の意味は、今まで得たことのない法の上に起つた所の得其者が、創めて生相の位に至れるを獲と名ける。されば得と名けるといふのは不用の文字と見てよい。得について説明するに、其を得と名くるはちと不穩であるから、此二字は削ることとする。次に其得の現在に入れるが成就である。第二刹那でも第三刹那でも成就と名けるといふ意味を、初後を論せずと申したものであらう。さうすれば至の字は稍不穩の文字である。頌疏要義三七頁「得と非得」の下参照。

得總有四種有爲法上ニハ一與彼法俱此是法俱得亦二在彼法前此是法前

得亦名ニ牛ニハ三在彼法後此是法後得亦四非前後俱此是非前後俱得擇減非
王引前得 不滅故無前後及俱之義得有前後 所得無爲無前後故云非前後俱得

【字解】一、有爲法とは爲作造作を有する法といふ意、因縁所生の法をいふ。從て無爲法とは、爲作造作を有せぬ法で、因縁所生のものでなく、本來常住の法を

得の四種

いふ。二、牛王とは親牛のことで、次の犢子とは子牛をいふ。三、擇減非擇減とは、次下無爲法の下に至て解釋する。

【講義】得を四種に分つ。初の三種は有爲法につき、第四は無爲法に關して立てたものである。一に法俱得、二に法前得、三に法後得、四に非前後俱得。かういふ様に分類するのは、得の力の大小といふことから起る。善惡の法、又は無記の中でも、幾分強いものは、從て得の力が強いとせられて居る。元來得と法とは必ずしも同時ではない、強い法の得は、法よりも先きに得が顯れ、又法よりも後まで得が残つて居る。丁度太陽は光りが強いから、日出前に既に東が白む、又日没後も西が明るい様なるものである。日出前は段々明るくなり、日没後は段々暗くなる。光りの強弱は山の形を以て顯される様に思ふ。有部の刹那的の考から見ると、強い得の力を刹那的に分解することができる。初めの内は弱くして、其が段々強くなる。遂には法と合す。又段々弱くなつて、遂には得の力が滅する。やはり山の形をなすものと見られる。法と合した時は、法俱得、法より前のは皆法前得、法より後のは皆法後得と、かういふ様に名けら

れる。磁石の喩は最もよく其意を顯し得る様に思ふ。磁石の鐵を吸ふ力、初め離れてある間は其力弱く、接近するに従て段々強く、遂には吸ひつく。其を離さんとするに、初めは強く後は弱く、遂には其力が無くなる。強い力には法前法俱法後の三得あることが知れる。弱い力のものほど法前得の數が減じて、山の勾配が急になる。最も弱いものは、全く勾配なしに、遂には一本の直線だけとなつて、法俱得だけになる。

一に法俱得とは、所得の法と能得の得とが同時に存在して居る。影が形に従ふ様なものであるから、又は如影隨形得とも名づける。二に法前得とは、得が法の前にある場合、丁度親牛が子牛を引いて行く様な譯から、此を牛王引前得と稱する。三に法後得とは、得が法の後にある場合、丁度犢子が親牛の後について行く様な譯から、此を犢子隨後得と名ける。四に非前後俱得とは、此は無爲法即ち擇滅非擇滅に關する得であるから、法と得との前後が論せられない。無爲法は常住法で不生不滅だから、得に對して前とも後とも俱とも何とも申されない。其れ故に無爲法の得を非前後俱得と稱せられる。得其者は有爲

法なれば前後の義あるも、無爲法には前後の義がないから、特に此を非前後俱得と稱して、他の三得に區別する。

非得總有二類。一法前非得。二法後非得。三非前後非得。

現在法無非得。法現必有得故。眞諦三藏所譯中立現法非得。

謬。

眞諦三藏
非得の三

【字解】眞諦三藏とは、經論の翻譯者として有名な方である。玄奘三藏以前の人であれば、玄奘を新譯と稱するに對して、眞諦などは舊譯と稱せられる。兩人共に俱舍論を翻譯した人である。三藏とは、經律論の三藏に通達して居る人の稱である。

【講義】非得の種類を三種に分つ。一に法前非得、二に法後非得、三に非前後非得。第三は無爲に關した非得である。法俱非得といふのはないから、非前後俱非得と俱の字を添へる必要はない。法俱非得がなせないかといふに、法が現在すれば得が作用して居る、得が作用して居れば非得は作用して居らぬ、其

大得と小得

小非得の有無

れ故に法と俱なる非得は考へられぬ。然るに舊譯家たる眞諦三藏は、舊俱舍論の中に現在法にも非得がある様に書いてあるのは大なる誤謬である。得の所在は何れなるかといふに、勿論此五蘊和合の依身の中になくはならぬ。然れば得其者を得するものは何か、更に得ありといはゞ、更に又得あつて無窮の失があるといふに對して、有部は此を次の如く説明して居る。得に更に得が無くてはならぬ、其を得得又は小得と名ける。其に對して前のは得又は大得と稱する。しかし小得を得するものは更にありとはいはない、前の大得が却て小得を得する。大得と小得とは同時相互の因果である。同時相互の因果は世の中にも澤山ある。机の四脚の如き、其脚が互に因と果となりて机を成立せしめて居る。一脚の果に對して相互に他の三脚は因といへる。社會といふ事などは、やはり此同時相互の因果である。普通に因果は前後時に解釋するが、かういふ様に同時にも解釋ができる。今有部は大得小得の關係に此教理を應用したのである。

大得に小得があると同様に、大非得にも小非得があるかといふ疑問がある。

此は一寸見ればさう見ぬるが、しかし小非得をかける譯にはいかぬ。なぜかといふに非得がかゝれば其物の存在を否定する。非得に非得をかければ、つまり得がかゝる事になるから、大得に小得をかける場合と同様にはならぬ。大得を作用せしめる爲に小得をかける。非得を作用せしめる爲には非得をかけたはいかぬ。やはり得をかけねばならぬ。非得を得した所にて非得が眞に作用する。されば小非得の必要を認めぬ、唯非得を得するか捨するかの問題である。

三 同 分

同分有^二一^{ニハ}無差別^{同是レ}。二^{ニハ}有差別^{有レ情}。又有^二一^{ニハ}種^{一ニハ}。一^{ニハ}有^{レ情}。

情同分^{如レ前}。二^{ニハ}法同分^{能レ令レ諸法}。問同分^{互相似也}。義云何。答同者相似義^{ナリ}。有^{レ情}。

情、身形等、諸法相似、之同分者、因義也。謂諸法同之因、同之分^{ナリ}。故名同分。依主釋也。

同 分

同分

界地趣生

法同分

類同分の種

【文科】 第二に同分を説く。

【字解】 一、同分とは有情をして互に同じからしむる或力をいふ。人同分あるが故に、人同士が似て居る。天同分あるが故に、天同士が互に似て居る。其同じからしむる力が同分である。二、界地趣生とは、界は欲界色界無色界の三界。地は色界無色界を更に各四地に分ち、欲界を合せて九地。趣は地獄、餓鬼、畜生、人、天の五趣。生は胎卵濕化の四生である。三、法同分とは、有情同分に對した名。有情同分とは有情同士の比較なれど、法同分の方は、其有情を形成して居る要素、即ち五蘊十二處十八界、其者同士の比較である。一寸見れば同分は非情にも通ずる様にも見ゆるが、有部の説としては決して非情に通ずるとはいはぬ。

【講義】 同分を二に分つ、一には無差別、二には有差別。同じ様に有情といふ方から見れば、其間に差別がないから、此を無差別と名く。三界九地五趣四生といふ様に、有情の中にて而も種々の區別がある、其區別あらしむるものは即ち有差別同分の力だといふ。此は有情同分を二種に分けたものである。又同

分を全體の上から見て有情同分といひ、構成の要素から見て法同分といふ。手を形成して居る色法と、足を形成して居る色法と、其が相似て居るのは法同分の然らしむる所といふ。されば順序としては、初に有情同分法同分の二とし、次に有情同分を無差別有差別の二とすと見るがよい。理論からいへば、法同分にも無差別有差別を分けてよい。同分といふ言の意味は如何といふに、同とは相似る義で、有情の形や動作等の諸法が相似て居るのをいふ。分とは因の義、諸法を同じからしむる因が同分である。同之分、依主釋がかゝつて、同分と名けられる。

四 無想果

無想果者。在無想天。有情身中心心所滅也。外道計無想天真、
涅槃寂靜城。爲生彼修無想定。爲是因五百大劫之間引生無
想果。身中令不生心。心所無想果亦云無想事。

無想天

【文科】第三に無想果を説く。

【字解】一、無想天とは、色界第四禪の中に廣果天といふがあり、其一部に無想天があつて此處へ生れると心々所が少しも起らぬこととなる、丁度熟睡の状態となる。無想とは、想は想の心所で、此はアラ／＼しい心所を代表に出したものである。實は心々所全部が滅するといふのである。二、外道とは、佛法から見て外の道、外の教といふ事で、數論、勝論等、當時種々の外教があつた、さういふのをいふ。三、涅槃とは梵語、普通には滅と譯す。煩惱の滅したる状態で、阿羅漢の證りをいふ。四、劫とは梵語、時の極めて長いのをいふ、其を又大中小に分て、大劫といふのは其中でも一番長いのである。俱舍論では八十中劫を一大劫とするといふ。此世界の成立から、遂には壞けて、永く世界の無い間、此を術語に、成住壞空の四劫といふ。各二十中劫だといふから、つまり世界の一生が一大劫だといふことになる、尤も空劫をも含む。五、無想事とは、事は體の義、無想果が實體を有して居る邊から、或は無想事とも稱する。

無想果

外道 涅槃 劫

【講義】無想果とは、無想天の有情の身中に於て、心々所の作用を滅せしめる或

力をいふ。換言すれば無想天の有情は心々所を起さぬ、丁度睡て居る通りである、其はどうしてさうであるかといふに、有部では之を解釋して、無想果といふ或力があつて、其が心々所を起させぬ様にするといふ。無想天はかういふ處であるから、一寸見ると其處が眞の涅槃であり、寂靜無爲の都である様に思はれる。其で外道はこゝを涅槃の都城だと思ひ計つて、其處へ生れる爲に無想定といふ定を修する。此が因となつて無想天へ生れると、五百大劫の間、身中に生じた無想果の力で心々所が起らぬこととなる。其力を無想果といふ、無想即ち果の持業釋である。或は略して單に無想ともいふ。或は無想事とも釋する。

五二 無想定

一、無心定者、定中唯此、一、無想定、外道、二、滅盡定、不還、阿羅漢、聖者修之也。問無想定、外道爲生無想天、修之、滅盡定、聖者爲何修之、答擬入無

二 無心定

六十五

餘涅槃故修之也。

【文科】第四に二無心定を説く。

【字解】一、無心定とは、普通定は無心ではないが、此二に限つて無心であるから無心定といふ。心々所をして起らしめぬ或力を無心定と稱する。此は前の無想果と同種類のものである。二、無想定とは、無想之定の依主釋、或は無想定即定の持業釋、どちらでもよい。無想之定といへば無想は無想果を指す、無想果を得るに就いての定といふ事になる。又無想定即定といへば、定其者が無想であるから、此時は持業釋となる。三、滅盡定とは、或は滅受想定ともいふ。受想は代表に出した心所の名である。やはり無想定と同じ様に、凡ての心々所を滅盡せしめる或力に名けたものである。唯修する人が無想定とは異つて居るが、其状態はよく似たものである。四、不還とは四果の中の第三果の人。五、阿羅漢とは同じく第四果の人。四果の事は後に出るから、今は略しておく。六、聖者とは凡夫に對した名。世第一法までが凡夫で、其次の見道以上が聖者である。四果の中の初果からが聖者となる。七、無餘涅槃とは有餘涅槃に對す

無想定

滅盡定

無餘涅槃

る名。委しくは無餘依であつて、依は依身の事。涅槃の境界に至ても、まだ餘の依身のある間が有餘依涅槃であるに對して、命終の後を無餘依涅槃と名ける。有部では無餘涅槃に對しては人格を認めて居らぬ、從て淨土思想を有せぬ。

二無心定

【講義】二無心定とは、定の中でも此二種のみは心々所が少しも起らぬから、其で無心定と稱せられる。一に無想定、此は外道が修する。二に滅盡定、此は不還果と阿羅漢果との聖者が修する。無想定は外道が無想天へ生れんが爲に修することは分つて居るが、滅盡定は聖者が何の爲に之を修するかといふに、其は心を静める爲であつて、暫くの間でも時間を無駄に費さぬ様に、無餘涅槃に入つた様な心持になる爲に滅盡定を修する。しかし入定は一週間を越してはならぬことゝなつて居る。又出定するには何かの暗示を得ねばならぬ。例へば鐘の聲が鳴ると出定すると定めておく。其邊は催眠術によく似て居る。或は一種の自己催眠術というてもよからうと思ふ。印度で或出家が食堂へ往つたがまだ時間が一寸早い。時間の鐘が鳴るまで滅盡定に入て休息す

二無心定

六十七

ることゝしたが、生憎其寺に騒ぎが起て、出家たちは皆逃げて仕舞つた。三月の後出家たちが歸つて来て、初めて鳴らした鐘の聲に暗示を受けて出定した處、時間經過の爲に、其人は遂に死亡したといふ話が婆沙論に出て居る。頌疏要義四九頁『無想定と滅盡定』の下参照。

次に命根の解釋が略されてある。命根のことは俱舍論では委しく説いてあるが、頌疏では極めて簡略になつてある。其れ故今も略したものであらうが、こゝで一吋解釋を加へておく。吾人が生きて居るのは命根の力に依るといふ。命根といふ一實體があつて、其力に依て吾人は生きて居る、命根の力が盡きて仕舞へば吾人は其時には死なねばならぬ。かういふ或力を命根と名けて居る。根は増上の義、命即ち根の持業釋である。命根は過去の業で定まるか、又は現在の業でも命根を延ばし得るかといふ問題があるが、有部では命唯是異熟といふ俱舍論頌の文の通り、過去の業で定まるものと決定して居る。

命根

六四 相

四有爲相ニハ一一本相ニハ二隨相ニハ三異相ニハ四滅相ニハ
諸行有爲由四本相。本相有爲由四隨相。亦名大相。

一生相ニハ能起名生。未來世内。二住相ニハ能安。三異相ニハ能衰。四滅相ニハ能壞。名異。此三在現。

四隨相者トハ隨本相ニハ故ニハ一生生相ニハ謂從小生。二住住相ニハ謂從下准之。三異異相ニハ謂從下准之。四滅滅相ニハ謂從下准之。

四滅滅相頌曰。相謂諸有爲。生住異滅性上已

【文科】第五に四相を説く。

有爲相

【字解】一、相とは標相の義、シルシといふ事、法若し此相を有せば、其は有爲法といふ事になり、有爲法のシルシとなるものが此四相である。やはり此も或力に名けたもの。有爲相とは有爲之相でもよし、又有爲即相でもよし、何れでも通ずる。有爲之相といへば有爲は所相の法を指す。有爲即相といへば、相其物が有爲であるから即がかゝる。二、本相とは根本の相といふ事、隨相に對した名。三、隨相とは本相について起る相の事。四、諸行とは有爲法の事、有爲法は無常であつて、常に行といはれるから、其で諸行と名ける。五、本法とは所相

の法の事。相せられる法は根本の法だから本法といふ。六、功能とは作用の事、時に依ては功能と作用とを區別することもあれど、此邊では區別する必要はない。

四本相と四隨相

【講義】四相を二種に分つ、一には本相、二には隨相。有爲の諸行をして有爲ならしむるは四本相の力に依る。四本相をして有爲ならしむるは四隨相の力に依る。四本相とは、本法を相するから本相と稱する、此も一説であるが、私は根本の相と見る方がよいと思ふ。根本の相だから又大相とも名ける、隨相を小相と名けるに對した名である。一に生相とは、物を生起せしめる力。此力は未來世の最後、即ち今にも現在に入らんとする處で作用する、此を常に未來生相の位と申して居る。二に住相とは、物を安住せしめる力。三に異相とは、物を衰異せしめる力。四に滅相とは、物を壞滅せしめる力。後三相は現在に在て作用する。次に四隨相とは、本相について起るから隨相と名ける。又大相に對して小相ともいふ。一に生々相、生相を生せしめる力。小生の力で大生を生せしめるから生々相と名ける。二に住々相、住相を生せしめる力。三

八一有能

に異々相、異相を異せしめる力。四に滅々相、滅相を滅せしめる力、以上此を四隨相と稱する。頌にいふ、相とは諸の有爲法をして生住異滅せしめる或力といふ。其力は體を有して居るから、今時に性といてある。

以上の説明ではまだ隨相を立てねばならぬ理由が分明でない。若しも隨相を立てるならば、なせ隨々相を立てぬか、隨相を有爲ならしめるものは何かといふ事が何とも記してない。有部では得の解釋と同じ様に、本相と隨相とは同時の因果であつて、相互に作用すると稱して居る。されば隨々相を立てる必要はないと、かういふ様に説明して居るが、しかし得の様に簡單には説明ができません。今は生住異滅と體が四個になつて居るから、實は四相の前後があつて、生相は先き乃至滅相は後である。有部では一個の體に作用して居る四個の用だから、四相は同時であるといふ。九法俱起といつて、本法と四本相と四隨相とが同時だといふ。同時だから、本相は本法と他の三本相と四隨相とを相し、隨相は單に本相を相する。本相は八法を相し、隨相は一法を相するから、此を術語に八一有能と稱して居る。四相の前後を認めながら、而も俱起とい

ふはごうしても矛盾である。又俱起でないを得と同じ様には説明ができぬから俱起と申したのであらうが、そこは随分有部の苦しい點である。有部は作用ではない功能だというて逃れ様として居るが、何れにしてもこゝは前後せる四個の體があるから、得と同じ様には説明されぬ。かういふ處が實に有部教理の一大破綻點である。

種子から生じたのが生で、乃至枯れたのが滅といふ様に、人間でも誕生から死亡までが四相になつて居るが、かういふのは一期生滅というて、今の所論ではない。有部の生滅は刹那的であつて、刹那の生滅に四相がかゝるとする。其點は大層面白い教理であるが、八一有能論に至てはごうしても完全には説明されぬことゝなつた。頌疏要義五五頁『生住異滅』の下参照。

七名 句 文

名 句 文 身 三 者 一 名 身

一名は名、非名身、二名は名、如説、色、聲等、三名は已去、名、多、名、身、如説、色、聲、香等、有三名也。

頌疏

第五云、論云、名謂作想、解云、想者取像、或契約義、若取像、名、想、想是心所、如説、色、名、能、生、色、想、因、名、生、想、名、爲、作、想、若、契、約、義、想、卽、是、名、謂、諸、賢、聖、共、爲、契、約、立、色、等、名、名、卽、是、想、由、此、名、想、能、有、詮、表、故、名、作、想。

【文科】第六に名句文を説く。

【字解】論云とは、此は俱舍論の文である。俱舍論を直に引くのではなくて、頌疏に引いてある俱舍論の文を又引したのである。

【講義】語に依て了解せしめるは、聲の上に名句文が交つて居るからだといふ。名句文も或力である。單なる聲は意味がないが、其に名句文が交ると語となる故、人が聞いて其を了解する。名句文身の三とは、一に名身。一個の名は名であつて、名身ではない、身は複数を顯す文字。二個の名を名身といふ、色聲といへば此は名身である。三個以上の名を多名身といふ、色聲香といへば此は多名身である。頌疏の第五に俱舍論を引いていふ、名とはどんなものである

かといへば其は作想だというてある。其を頌疏に解釋していふ、一義に想どは像を取る義、或は約束の義である。像を取る義で想ど名けるならば、想は心所の名となる。松といへば松を想ひ起す、名から想を生ずる故に、其で作想ど名ける。若し又約束の義ならば、想が即ち名である。昔諸の聖人賢人が集て、共に約束をして、此を松と名ける、此を花と名けると定む。其約束に依てできた名はよく物をいひ顯すから作想ど名けるといふ。

於諸法立名有六種釋略頌云持業依主與有財相違隣近並帶數。上光記第一云西方釋名多依六釋言六釋者一依主釋謂此依彼或云依土名異義同二有財釋如人有財亦名多財如有多財名異義同三持業釋謂一法體雙持兩業業謂業用或云同依兩用同依一體名異義同四相違釋謂二法體彼此各異據互不相屬五隣近釋體非是彼近彼得名六帶數釋謂法帶數如言五蘊上私曰一依主釋如言水瓶水之瓶故名水

瓶二有財釋如以所領名爲領主名三持業釋如言石硯一法體雙持石與硯兩業用故四相違釋如言善法惡法東海西海善惡東西相違爲名故五隣近釋如當國言隣國六帶數釋帶數爲名如言五蘊

【字解】一、光記とは普光の俱舍論記の事。普光は玄奘の弟子で、俱舍論を書いて居る、説が穩健だといふので、後世多く用ひられて居る。二、西方とは印度の事、支那から見て印度が西方にあるからである。

【講義】因に六合釋の事を記載する。諸法の名を立てるに六種の釋がある。合釋というて、二個以上の言が連結して居る時でなくてはならぬ。著者の略頌にいふ、其は持業釋と依主釋と有財釋と相違釋と隣近釋と帶數釋とである。例せば王臣というても、王と臣と別々に見ることもある。次に王之臣とも見られる。或は王即臣ともいへる。其場處に依て何れかに決定するには、此六合釋にかけて、其は何釋に見ねばならぬといふ。光記第一にいふ、西方印度で

は名を釋するに多く六合釋に依る。六合釋といふは、一に依主釋とは、主に依る釋といふ意味で、乙が甲に依て居る時、例せば臣が王に依て居るから、王之臣で王臣といふ、かういふのが依主釋である。或は依士釋ともいふ、士に依る釋で、依主釋とは名が異て義が同じである。二に有財釋とは、財を有する釋で、他の名を取て自分の名とするが如きは其例である。對法藏論といふが如き、對法藏の三字を一應は根本の發智論等につけても、其を俱舍論が有して居る邊から、俱舍論の事を對法藏論といふ、かういふのが有財釋である。或は多財釋ともいふ、多財を有する釋といふ意味で、つまり名異義同である。三に持業釋とは、一の法が兩の業用を持つから、甲即乙といふ形式となる。朝鮮の國王は即ち日本國王の臣下であるから、王即臣となる、此時の王臣は持業釋となる。或は同依釋ともいふ、兩の業用が同じく一の法に依る意味なれば、前の持業釋と名異義同である。四に相違釋とは、二の法體が全く別のものであつて、相互の關係を有せざる時をいふ。君と臣といふ時は相違釋となる。五に隣近釋とは、體が其者ではないが、其に近い邊から其名を得る場合。實は此釋は副

詞で無くてはならぬといふので、近來其非を鳴らして居るが、今は先づ古來の通りに述べておく。六に帶數釋とは、此は數を帯びて居るもので、五蘊とか六合釋とかいふが如きものを指す。著者の私釋にいふ、一に依主釋とは、水之瓶といふ邊から水瓶と名けられる様なもの。二に有財釋とは、所領の國名を領主の名とするが如きもの。三に持業釋とは、硯石といへば、硯が即ち石で、一の法體に硯と石と兩用あることになる。四に相違釋とは、善法惡法とか東海西海とかいへば、善惡にしても東西にしても全く別なものが一處になつて居る丈である。五に隣近釋とは、此志摩國を伊勢といふが如き、又は伏見を京都といふが如き、都合上かくいふことがある。六に帶數釋とは、前記の通り數を帯んで居るもので、五蘊の如きをいふ。

二句身

一句は、是句非、非句身、兩句は、是句亦、亦句身、三句は、已去、名、多、句身、如、レ説、諸行無常、一切法無我、涅槃靜、此皆有、三句、名、多、句身。

頌疏第五

云、論云、句者謂章、詮義究竟、如説諸行無常等、音、或能辨了業、用、德、時、相應、差別、此章稱句、解云、且如一色、有所見業、能發識

用、青黃等徳、過未等時、與四相合名爲相應、不相應者名曰差別、謂能辨色是所見等、此章稱句也、上巳

諸行無常

我一切法無

句身

【字解】一、諸行無常とは、有爲法は常住でないといふ事。七十五法の中では、三無爲を除いて他の七十二法は皆有爲法であつて、生住異滅に遷されるから、其が無常だといふのである。二、一切法無我とは、外道のいふ様に實我といふものは存在せぬ、唯諸法が集つて居るのみである。我と思はれても其は實我でなくて、唯假我が存在するのみであるといふ。諸行無常と諸法無我と涅槃寂靜と、此を佛教の三法印といひ、此を説くのが佛法の印であるといふ。

【講義】二に句身とは、一句ならば句であつて句身ではない。二句ならば句身といはれる。兩句は句といふは穩當でない様に思はれる。三句以上を多句身といふ。諸行無常と諸法無我と涅槃寂靜と三句あるから、かういふのは多句身である。但し皆の字は穩當でない。頌疏の第五に俱舍論を引いていふ、句とは章の事で、義を充分に顯し盡して居るをいふ。諸行無常等といへば、義が充分に顯れて居る。或はよく業や用や徳や時や相應や差別をいひ顯して

又身

居るものを句と稱すること。頌疏に此論文を解していふ、例せば色境に就いていへば、見られるといふ業と、識を發す用と、青黃等の徳と、過去未來等の時とがある。四の場合が共に同じければ相應であり、同じからざれば差別である。かういふ様に色は見られるものなどいへば、此章を句と稱する。

三文身。一字、是文、非文身。二字、亦文、亦文身。三字、已去、頌疏第五云、者謂

字、如說惡阿壹伊等字、是不相應行、中字、不同、此方墨書之字、

已上十四
不相應畢、

【字解】一、迦佉伽とは、梵語の文字を漢字に寫したるもの。釋迦の迦佉伽の佉、楞伽の伽である。二、惡阿壹伊とは、梵語の母音を漢字に寫したるもの。大體に於て梵語は日本の片假名に似て居る。

【講義】三に文身とは、一字ならば文であつて文身ではない。二字ならば文身となる。この亦文の二字は穩當でない。三字以上は多文身である。迦佉伽といへば三字あるから多文身となる。頌疏の第五にいふ、文とは字の事で、

惡阿壹伊といふが如きをいふ。今こゝに字といふは不相應行の字であつて、紙面に顯れた所の墨で書いた字の事ではない。以上十四不相應行の説明がすんだ。

第五 無爲法論

第五無爲法有三。一擇滅無爲。

即ち以て離繫爲性。擇謂簡擇。即慧差別。各別簡擇。四聖諦二故。擇力所得。滅名爲擇滅。如牛所駕車名曰牛。一非擇滅無爲。

永礙當來。得非擇滅。謂能永礙未來法。生。二虛空。

上來七十五法竟。

【文科】第五に無爲法を明す。

【字解】一、離繫とは繫縛を離れる事。煩惱の繫縛を離れた所が即ち擇滅である。二、四聖諦とは苦集滅道の事。四諦の理は聖者の諦むる所なれば此を聖諦と名ける。三、縁闕とは縁が闕けた位である。縁があれば生ずる、無れば生

せぬ、其で縁闕不生といふ。未來法には、當生法と縁闕不生法との二種がある。【講義】第五に無爲法を三種に分つ。無爲法とは常住法である。小乗の中でも九無爲を立てるものもある。無爲の多體を説くのもあれば、各一體だといふものもある。有部は多體説に従て居る。唯識の如きは六無爲を立て、而も六無爲は本體たる真如に名けた異名であるといふが、有部には本體論はない、同じく現象界の一部として、有爲法とは別個のものだと考へられてある。無論有部では實法だとして居る。一に擇滅無爲とは、其體離繫である。煩惱の繫縛を離れて見れば、そこに此無爲が得せられる。擇は簡擇の義、慧の一分である。四諦の理を種々に觀察することに依て、他方に煩惱が吾人を離れて行く。擇力に依て得られた滅だから擇滅と稱する。中言の力所得の三字を略したものである。牛に引かれる車を牛車といふが如きも、所駕の二字が略されてある。要するに中央の言を略したから擇滅とか牛車とかいふ言になつた。擇滅が即ち涅槃である。二に非擇滅無爲とは、未來から生じて來る法を永く碍へる處に非擇滅が得せられる。當生の法を碍へて滅を得する事、前の擇力所

得と異つて居るから非擇と稱する。得する事は擇力ではなくて、唯縁關に依る。縁が關けて永く生ぜざる處に滅が得せられる、其滅を非擇滅と稱する。例へば花を見て眼識が起るべき時に、縁關けて眼識起らずとせば、其眼識はもう永久に起る譯にはいかぬ。なせなれば其時の花は既に過去に往つて、眼識ではもう縁せられぬ、唯意識所縁の境となる。其れ故其時の眼識は縁關不生の爲に非擇滅を得することとなる。非擇滅は凡夫でも幾らも得せられる。三に虚空無爲とは、時間空間といふ時の空間をいふ。空間の事であれば其體無碍であつて、色法は空間の中で自由に起ることが出来る。時間無爲をも説きさうに見ゆるが、時無別體依法而立とて、時には別體がない、法の作用の上から三世ができる故、時の無爲をば立てる譯にいかぬといふ。未作用は未來、正作用は現在、已作用は過去と、法を離れて時はないといへど、しかし空間の實在を信するならば、時間の實在もいはれぬことはないともいへる。勝論外道の如きは時の實在を信じて居る。頌疏要義二〇頁『三無爲法』の下参照。以上七十五法の解釋終る。

中篇 問答分別 其上

一 七十五法と五蘊

問以七十五法如何立五蘊耶答一色蘊謂色二受蘊大地法中三

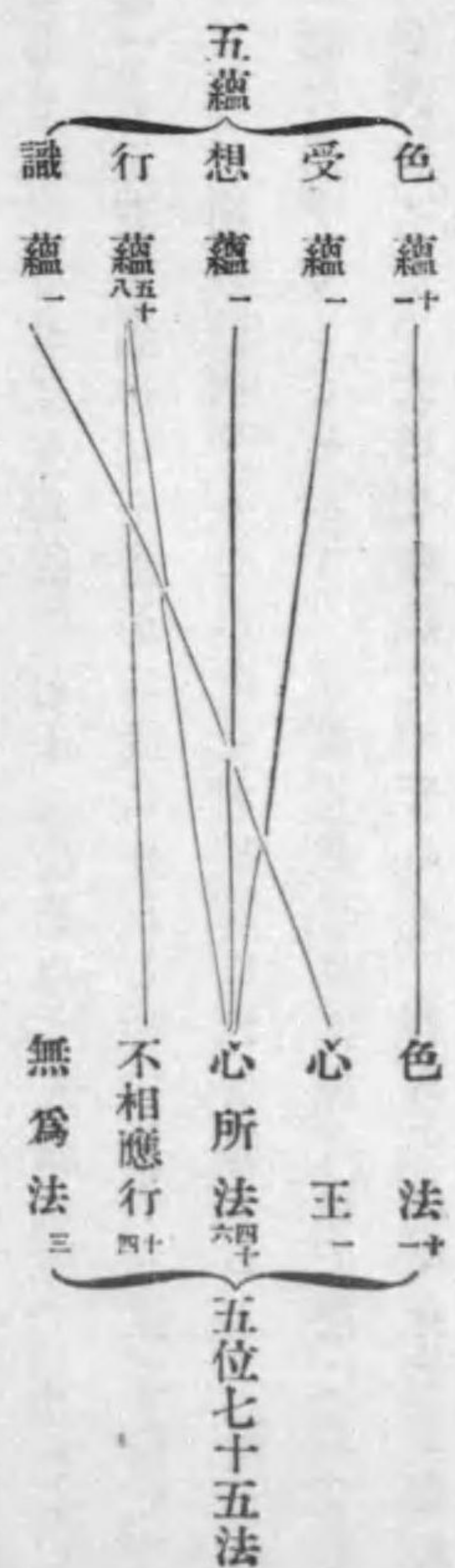
想蘊大地法中四行蘊心所四十六中除受想餘四十四五識蘊心王

【文科】次に問答分別の中、第一に七十五法と五蘊との關係を示す。

【字解】蘊とは積集しほじの義、アツマルといふ意味であるから、無爲法は此には漏れて居る。無爲法は常住であつて分解のできぬものであるから、從て積集の意味を有せぬ。されば有爲法の七十二法を以て五蘊に攝することとする。

【譯義】七十五法名目は全體が二段に分れる、初に七十五法の名を釋し、後に其に就て種々問答分別する、これからが後段に代る處である。第一に七十五法を五蘊に攝することを示す。五蘊の教理は、其源は阿含經に出て居ること、釋尊の説法として大切な教理の一である。吾人の此肉身は五蘊から出來て

七十五法の關係



居ると常に申して居る。外道や佛教内の犢子部では實我を説き、五蘊の外に實我の存在を認めて居る。其に對して有部では、實我は吾人の認むべきものではない、吾人の此肉身は五蘊の假和合より外はない、五蘊の外に如何にして實我の存在を認むべきかと論じて居る。諸法無我論はかういふ様にして立てられる。

五蘊とは、一に色蘊此中へ色法の十一種が入て居る。二に受蘊此は心所法の中、大地法の一種である。三に想蘊此も大地法の一種である。以上二蘊は、七十五法としては一個となつて居るが、しかし受も想も其が種々に分れるから、勿論蘊の意義を有して居る。受には三受五受の分類がある。又想には六想

といふことがある。後の識蘊も、七十五法としては一個となつて居るが、此も六識に分れて居る。其等が和合積集して一團となる意義を有する邊から、其でかういふのを蘊と稱する。四に行蘊、此中へは心所四十六の中、受想を除て四十四と、不相應行の十四と、合せて五十八法が入て居る。行とは諸行の行で、實は有爲法全部に通ずる名であるのを、今は總即別名して行蘊と名けたもの。五に識蘊、此中には心王が入て居る。されば無爲法の三を除いた餘の七十二法は皆此五蘊の中に攝せられる。頌疏要義三〇頁「三科と五位七十五法」の下参照。

問何故餘四十四心所總置行蘊別分受想爲二蘊耶答界品
 第一頌曰諍根生死因及次第因故於諸心所法受想別爲蘊
 且同論第一云諍根有二謂著諸欲及著諸見此二受想如其
 次第爲最勝因味受力故貪著諸欲倒想力故貪著諸見
 又生死法以受及想爲最勝因由耽著受起倒想故生死輪廻

因也。又云。或從無始生死已來。男女於色更相愛樂。此由耽著樂受味故。耽受復因倒想生故。此倒想生由煩惱故。如是煩惱依識而生。私云。於次第因隨處。次第隨染。次第隨器等。次第隨界別次第。四之中此文隨染次第也。且出一次第因。由此諍根因生死因次第因義受想二心所別立蘊也。

【字解】一、界品第一とは、俱舍論が九品に分れて居る中の第一を界品といふ。品とは篇の意。二、諍根とは、諍は煩惱の異名。受想が根本となつて、其れから煩惱が起る、諍即根の持業釋である。受想は諍根の因なれば、諍根之因依主釋である。三、同論第一とは、俱舍論卷第一界品の下をいふ。四、諸欲とは、吾人は色等の五境に貪着するが故に、五境のことを五妙欲境といふ。尤も此中には姪貪をも含む。五、諸見とは、身見等の五惡見のことで、心所の中では大地法の慧に攝せらる。六、味受とは、正常な受はよいが、凡夫の受は多く反對であつて、樂と思ふべからざるものを樂と思ひ、其に貪着する邊から味の字をつけたも

のである。七、隨處次第とは、處なる色蘊から初めて、細なる識蘊に終るといふ様に、處の順序に五蘊をならべたのである。八、隨器等次第とは、此は色を食器に、受を飯に、想を菜に、行を料理人に、識を客人に喩へ、晚冷に客でも請待するには、先づ食器を整へ、乃至客人が其を食するといふ様な順序となる。九、隨界別次第とは、此は三界の別に隨ふもの。欲界では色の相が顯了、色界では受の相が顯了、下三無色では想の相が顯了、最後の有頂では思業の相が顯了、但し思業は行蘊の攝である、而して識は能住で、其四蘊の中に識が住して居るから、識を最後とする。

【講義】心所は四十六あるが、其中で何故に受想の二だけを別開して二蘊とし、他の四十四は凡て行蘊の中に攝したのか。其答に、其は次の様に三因がある、諍根因と生死因と次第因とである。俱舍論界品の頌を引いていふ、諍根因と生死因と次第因との故に、四十六の心所の中で、受想を別開して二蘊としたのである。又俱舍論卷第一にいふ、諍根には二種ある、一には貪、二には見。貪とは諸欲に着すること、見とは諸の惡見に着すること。此二の諍根は其次第

の如く受と想とが最勝の因となる。受が根本となつて貪が起り、想が元となつて諸見が起る。樂受に耽るから、其力で五欲の境に貪着し、倒想の力で諸見を起して其に貪着する、故に受想は諍根の因となる。又生死輪廻の根元は受想であつて、此が最勝の因となつて居る。樂受に耽て倒想を起すから、生死輪廻は何時までも止まぬ、故に受想は生死の因となる。又俱舍論にいふ、此文は少し次の方にあるから、特に又云としてある。無始の生死より已來、男女が五蘊の初めの色に於て互に相愛着し、見て喜び、乃至觸れて樂しむ、其は何故なれば樂受に耽着するから起るのである。次に受に耽ることは倒想から生ずる。次に倒想の起るのは煩惱から生ずる。煩惱は行蘊の攝である。次に煩惱は心王を所依として生ずる。染汚の起る順序になつて居るから、かういふのは次の四種の中、第二の隨染の次第である。著者の私釋にいふ、次第因には四種ある、隨龜の次第と隨染の次第と隨器等の次第と隨界別の次第とである。此四の中今は第二の隨染の次第だけを出して見たのである。此諍根因と生死因と次第因との三因があるから、特に受想を別開して二蘊としたのである。

問何故無爲説在處界非蘊攝耶答頌曰蘊不攝無爲義不相應故論云三無爲法不可説在色等蘊中與色等義不相應故謂體非色乃至非識亦不可説爲第六蘊彼與蘊義不相應故聚義是蘊如前具説謂無爲法非如色等有過去等品類差別可略一聚名無爲蘊

無爲を蘊に入れない理由

【講義】何故に無爲は十二處十八界の中にあつて而も五蘊の中に無きか。其答に俱舍論頌を引いていふ、蘊には無爲を攝せない、何となれば蘊の義と相應せないからと。俱舍論にいふ、三無爲法を色等の五蘊の中へ攝する譯にはいかぬ、色等の義と相應せないから。無爲の體は決して色ではない、乃至識でもない。さればといつて第六蘊とすることもできぬ、何となれば無爲は蘊の義と相應せないから。蘊は聚の義であつて、其事は前に既に説いておいた。前具説といふは、此は俱舍論の上で前の方に説いてあると云ふ話で、此七十五法名目に就いていふのではない。無爲法は色等の様に、過去等の種類差別があ

つて、其を略して一聚として無爲蘊となすことのできるものではない。されば第六無爲蘊として特に此を増加する譯にもいかぬ、やはり五蘊の儘として無爲だけを除外にするより外はない。

又論云、諸有爲法、和合聚義、即是蘊義。如契經言、諸所有色、若過去、若未來、若現在、若內、若外、若麤、若細、若劣、若勝、若遠、若近、如是、一切略爲一聚、說名色蘊。由此聚義、蘊義得成。此文有五門、一門、三、二、內、外、門、三、麤、細、門、四、劣、勝、門、五、遠、近、門、受、想、行、識、四、蘊、五、門、准、色、蘊、可、知、如、前、具、說、者、此、文、也。

【字解】契經とは、契は理に叶ふ事。普通に經といふのを新譯では契經といふ。

【講義】又俱舍論にいふ、此文は少し前に出て居る。諸の有爲法には和合聚の意味がある、そこが即ち蘊の義である。阿含經の中には、凡ての色法、例へば過去の色、未來の色、現在の色、又内色と外色、又麤色と細色、又劣色と勝色、又遠色と近色、かういふ様に種々に分れて居るが、其等を略して一聚となして色蘊と名

蘊は聚の義

けると、かやうに説いてあるから、聚の義が蘊だといふ事は必ず成立する。此經文は五門に分れる、一に三世門、二に内外門、三に麤細門、四に劣勝門、五に遠近門。受想行識の四蘊の五門も、此色蘊に准じて考へて見ればすぐ分る。前の論文の中に如前具説とあつたのは、今こゝに引いた此論文をさしていふのである。

二 七十五法と十二處

問、以七十五法、如何立十二處、耶。答、十二處者、六根、六境也。其中五根、五境、十者、色、十一、中五根、五境也。此名十處。意處者、心王也。法處者、有六十四法。謂四十六、心所十四、不相應、三、無爲、並、色、中、無表也。

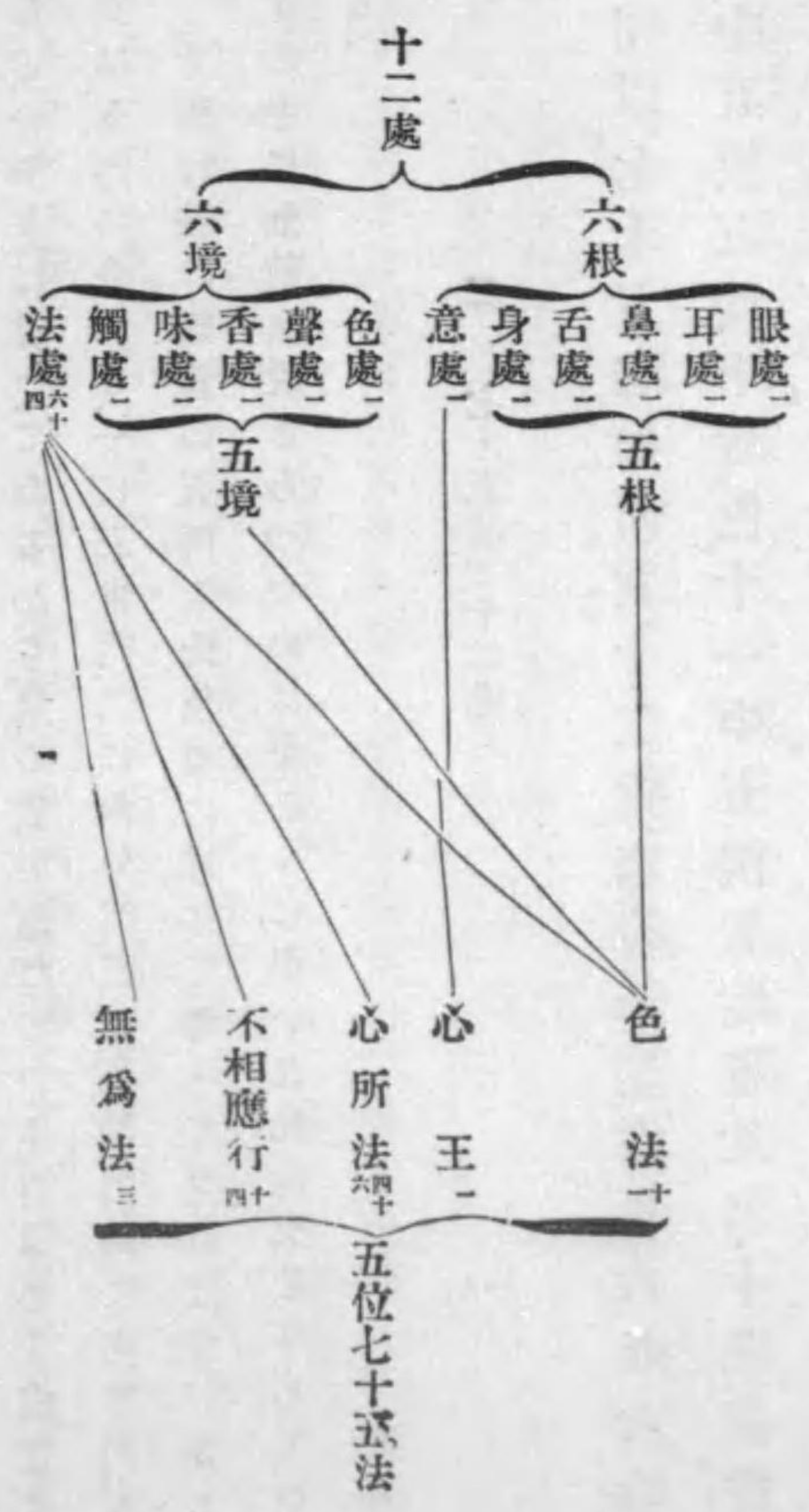
【文科】第二に七十五法と十二處との關係を示す。

【字解】處とは生門の義、委しくは生長門の義で、心々所を生せしめる場處をい

ふ。六根六境を十二處といふ、根は所依となり、境は所縁となつて、よく識を生ぜしめる故、六根と六境とを處と名ける。

【講義】七十五法をいかにして十二處とするか。其答に、十二處とは六根と六境とである。其中で五根五境の十は、色法の下で説いた五根五境である。又

七十五法との十二處との關係



意處といふのは心王である。意根を意處と名けてあるが、實は意根といへば過去の心王の名であるけれども、體からいへば現在の六識が其儘過去に入て意根となつたのであるから、此意處の中へは六識心王が皆入て居ることゝなる。次に法處といふは、意根に對する境に名けたもので、残りの法は皆此中へ入てある。色法の中の無表色と四十六の心所と十四不相應と、其外に三無爲を合せて、合計六十四法となる。

三 七十五法と十八界

問以七十五法如何立十八界耶。答十八界者六根六境六識。六根、眼界、耳界、鼻界、舌界、身界、意界、六境、色界、聲界、香界、味界、觸界、法界、六識、眼識界、耳識界、鼻識界、舌識界、身識界、意識界。此中六識界者心王一依六根起故成六識也。餘如十二處分別問何故七十五法中以六十四法合立一法處法界耶。答六境者六識所縁。然眼識唯縁色境。耳識唯縁聲境。鼻識唯縁香境。舌識

唯緣味境、身識、唯緣觸境、五識、唯緣色法、境中猶不緣過未境、况非色法、故六十四法、唯第六意識、所緣、依之、立一法處法界也。雖意識亦緣五境、五識不緣六十四、非色境、故六十四法、立法境也。六境對六根六識分別故也。

【文科】第三に七十五法と十八界との關係を示す。

【字解】界には、種族の義と種類の義と二義あるが、種族といへば生本を顯すから、無爲に通せぬことなる。種類の意味ならば、無爲でも何でも、角十八の種類に分れて居つて、同種類のものは其れごとく一界をなして居る。

【講義】七十五法をいかにして十八界に攝するか。其答に、十八界とは六根と六境と六識とである。六根とは眼界乃至意界、六境とは色界乃至法界、六識とは眼識界乃至意識界である。此中の六識界は七十五法の時では、單に一個となつて居る。今は六根に依て起る邊で、此を六識と分つたのである。十二處の時の意處から六識を別開したものなれば、意處よりも意界の方が六識だけ

界

七十五法
と十八界
との關係

法境

少くなつた譯である。其他は十二處と別に異らぬ。

七十五法の中で六十四法をなせ法處法界と名けたか。其答に六境は六識の所緣である。然るに眼識は唯色境を緣じ、乃至身識は唯觸境を緣する。五識は色の五境を緣しても、唯現在に限つて過去や未來の境を緣する譯にいかぬ況や色法でないものは尙更緣せられぬ。第六識は何でも緣する。實は前五境でも第六識の所緣となが、しかし其は別々に他に通せざる能緣の識を持つて居る。其れ故残りの六十四法を法境と名けて、此を第六識の所緣の境とするのである。法境とは總即別名である。されば十二處では法處、十八界では法界と名ける。六境を六根六識に對するから、其で十八界となる。

四 七十五法と三性

問以七十五法、如何分別善惡無記、三性耶。答色、十一、中色聲、二通三性、無表、一通善惡、不通無記、所餘、八色法、唯無記、心王、一通三性、心所、四十六、中大地法、十、不定、中、尋伺、竝睡眠、此、十

三通三性不定中惡作、一法唯通善惡、二性不通無記、大善地法、十唯善不通惡、無記、大不善、二小煩惱、中忿、覆、慳、嫉、惱、害、恨、七不定、中瞋煩惱、已上此十法、唯不善不通善、無記、大煩惱、六小煩惱、中諂、誑、憍、三不定、中貪、慢、疑、此十二法、不善有覆無記、二性也、十四不相應、中得、四相、五通三性、二無心定、唯善也、非得、同分、命根、無想果、名句文、七唯無覆無記也、次三無爲、中擇滅、勝義善也、虛空、非擇滅、勝義無記也。

【文科】第四に七十五法の三性分別を示す。

【字解】一、無記とは善とも惡とも記すべからざるものをいふ。此を二種に分つ、一に有覆、二に無覆。覆は染汚の義。無記ではあるが染汚的のものを有覆といひ、不染汚的なるを無覆といふ。其れ故に染汚不染汚に分類すれば、惡と有覆無記とは染汚、善と無覆無記とは不染汚となる。此を二性門三性門相互の關係といふ。二、勝義善とは、絶對善、又は至善の事、涅槃即ち擇滅をさしてい

ふ。三、勝義無記とは、絶對の無記で、三無爲の中で他の二無爲をいふ。

【講義】七十五法を善惡無記の三性に分類すればどうなるか。其答に、先づ十一の色法の中で、色聲の二は三性に通ずる。善心若しくは惡心所發の身表業又は語表業、例へば人を殺す時の動作、又は他人を惡口する時の聲の如き、かういふのを惡の色又は惡の聲といふ。無表色は善惡に通じて無記には通ぜない。他の八色は唯無記に限る。次に心王は三性に通ずる。次に四十六の心所法の中、大地法の十と不定地法の尋伺と睡眠と此十三は三性に通ずる。不定地法の惡作は善惡に通じて無記に通ぜない。大善地法の十は唯善であつて惡と無記に通ぜない。大不善地法の二と小煩惱地法の忿覆慳嫉惱害恨の七と不定地法の瞋と此十は唯惡であつて善と無記に通ぜない。大煩惱地法の六と小煩惱地法の諂誑憍の三と不定地法の貪慢疑の三と此十二は惡と有覆無記に通ずる。次に十四の不相應行の中、得と四相との五は三性に通ずる。二無心定は唯善である。非得と同分と命根と無想果と名句文と此七は唯無覆無記である。次に三の無爲法の中、擇滅は勝義善、非擇滅と虛空と

は勝義無記である。

五 七十五法と三界繫

問以七十五法如何分別三界繫耶。答色、十一、中、五根、色、聲、觸、竝無表。此九通欲色二界。香味二境唯欲界繫也。言無色故。色法不通無色。心王一通三界。心所中大地法十。大善地法十。大煩惱六。小煩惱中、憍、不定、中、貪、慢、疑、三。此三十通三界。小煩惱中、諂、誑、二。不定、中、尋、伺、二。此四在欲界初禪。不通二禪已上。大不善、二。不定、中、惡作、睡眠、小煩惱中、除、諂、誑、三。餘七。此二唯欲界繫。不通色無色。不相應、中、得、非得、同分、命根、四相。此八通三界。滅盡定唯在有頂無下界。無想定、無想果唯在第四禪。名句文若隨語繫唯在欲界初禪。若隨身繫通欲界竝四禪。三無爲、不墮界繫法故三界外也。

界 繫

隨語繫隨身繫

七十五法分別

【文科】第五に七十五法と三界繫との關係を示す。

【字解】一、界繫とは、欲界色界無色界の中で、其界に繋がれて居る意。欲界にあるもの必ずしも欲界繫ではない、時には其が色界繫であることもある。喩へば日本に居るから必ずしも日本人とは定らぬ、時には外國人も居る様なもの。例せば無想定、の如きは、欲界で起しても欲界繫ではなくて、其は色界繫である様なものである。二、隨語繫隨身繫とは、語に隨ふと身に隨ふとで界繫が異つて來る。身に隨へば色界第四禪まで通するが、語に隨へば色界の初禪以下でなくてならぬ。語は二禪以上にはないものとせられてある。

【講義】七十五法の三界繫分別は如何といふに、十一の色法の中では五根と色聲觸と無表色と此九は欲色二界に通ずる。香味の二境は唯欲界繫で、色界には通せぬ、香味は段食であつて、色界にはないとせられてある。又無色といふから、勿論無色界に通せぬ。次に心王は三界に通ずる。次に四十六の心所法の中で、大地法の十と大善地法の十と大煩惱地法の六と小煩惱地法の憍と不定地法の貪慢疑の三と此三十は三界に通ずる。小煩惱地法の諂誑の二と不

定地法の尋伺の二と此四は欲界と初禪とにあつて、二禪以上に通せない。大不善地法の二と不定地法の惡作睡眠瞋の三と小煩惱地法の中、誑誑橋を除いて餘の七と此十二は唯欲界繫であつて、色無色には通せない。次に十四の不相應行の中、得と非得と同分と命根と四相と此八は三界に通ずる。滅盡定は無色界の第四有頂に限り餘界にはない。無想定と無想果とは色界の第四禪に限り此も餘界にはない。滅盡定を修する時の所依の定は有頂であつて、無想定を修する時の所依の定は第四禪であるからかういふ様になる。名句文は、若し隨語繫ならば欲界初禪に通じ、若し隨身繫の義ならば廣く欲色二界に通ずる。されど名句文は語に關したものでなれば、隨語繫の方が正當であらうかと思ふ。三の無爲法は無漏法とて界繫に關係を有せぬから、此は三界の外である。たとひ有爲法でも無漏ならば界繫を有せぬ。其事が名目では書き落してある。

六 七十五法と有漏無漏

問以七十五法、如何分別有漏無漏耶。答色、十一、中無表、一通、有漏無漏、餘、十色、唯有漏也。心王、一通、有漏無漏、心所、中、大地法、十、大善地法、十、不定、中、尋伺、此、二十二、通、有漏無漏、所餘、二十四、心所、唯有漏也。不相應、中、得、四相、五、通、有漏無漏、所餘、九、唯有漏、三、無爲、唯無漏。

【文科】第六に七十五法の有漏無漏分別を示す。

【字解】有漏とは、漏は煩惱の異名、煩惱と隨増するものは皆有漏である。隨増とは煩惱と關係して段々染汚的に共に深入りする事で、此に相應隨増所緣隨増の二種がある。相應隨増とは煩惱と相應の心々所との隨増で、所緣隨増とは煩惱と所緣の境との隨増である。かういふ様に煩惱と關係あるものを有漏といふ。頌疏要義一一頁「二種の隨増」の下參照。無漏とは煩惱と隨増の關係を持たぬものをいふ。たとひ煩惱に緣せられても、無漏のものならば隨増をなさぬ點が異なる。喩へば蓮や芋の葉に雨滴が落ちて、少しも葉の

有漏と無漏

七十五法の有漏無漏分別

上に其を留めておかぬ様なのが無漏である。
【講義】七十五法の有漏無漏分別は如何といふに、先づ十一の色の中で、無表色は有漏無漏に通ずる。五根五境は有漏に限る。前十五界唯名有漏というて、五根五境五識は有漏だといふのが有部の正義である。たごひ佛身でも前十五界は有漏だといふ。そこは大衆部の無漏説と大に論じて居る點である。次に心王は有漏無漏に通ずる。次に四十六の心所の中で、大地法の十と大善地法の十と不定地法の尋伺の二と此二十二は有漏無漏に通ずる。他の二十四は唯有漏に限る。次に十四の不相應行の中、得と四相との五は有漏無漏に通ずる。他の九は唯有漏に限る。次に三無爲法は唯無漏である。

七 七十五法と有爲無爲

問以七十五法、有爲無爲分別、様如何。答七十五法、中除三無爲、所餘、七十二法、有爲也。

【文科】第七に七十五法の有爲無爲分別を示す。

七十五法の有爲無爲分別

【講義】七十五法の有爲無爲分別は如何といふに、此は前記の中に既に充分に顯れて居る通り、三無爲法は無爲であつて、其他の七十二法は皆有爲である。

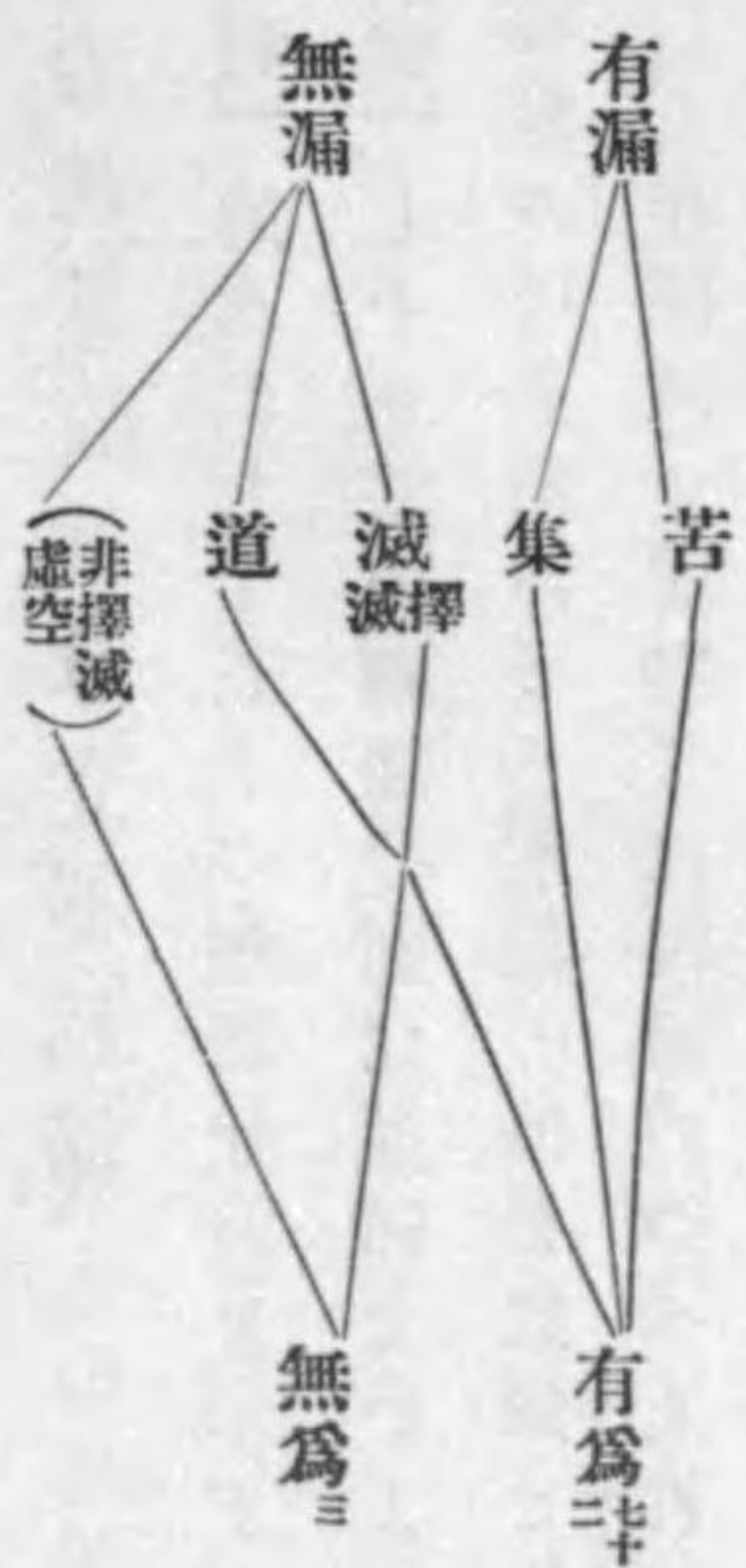
八 七十五法と四諦

問以七十五法、如何分別四諦耶。答有爲法、中以有漏物、立苦集、二諦、有爲法、中以無漏物、立道諦、三無爲、中以擇滅、立滅諦、虛空、非擇滅、非四諦、攝婆沙云、若法、是苦、是苦、因、是苦、盡、是苦、對治者、世尊立爲諦、虛空、非擇滅、非苦、非苦、因、非苦、盡、非苦、對治者、是故世尊立不爲諦。

【文科】第八に七十五法の四諦分別を示す。

【講義】七十五法の四諦分別は如何といふに、有爲法の中で有漏の果を苦諦とし、有漏の因を集諦とし、無漏の因を道諦とする。又無爲法の中で擇滅を滅諦として、非擇滅と虚空とは四諦の中へ入れぬ。されば苦集は有爲有漏で、道諦

七十五法の四諦分別



は有爲無漏滅諦は無爲無漏である。婆沙論にいふ、若し法が苦ならば、其が苦諦、苦の因ならば集諦、苦の盡滅ならば滅諦、苦を對治する者ならば道諦、釋尊はかういふのを諦と仰せられた。諦は眞實の義で、此の如きは決して間違のない見方である。非擇滅と虚空とは、苦でもない、苦の因でもない、苦の盡滅でもない、苦を對治する者でもないから、そこで釋尊はかういふのを諦とはなされぬ。苦集滅道は、喩へば病氣と病氣の原因と全快と藥との如きものである。頌疏要義一二二頁「四諦」の下参照。

九 七十五法と見修二斷

問以七十五法、如何分別見修二斷耶。答色、十一。大善地、十。小煩惱、十。不定、中、惡作、不相應、中、除得、四相、所餘、九。此、四十一。唯修所斷也。不定、中、疑、一。法、唯見所斷、不通修所斷。心王、一。大地法、十。大煩惱、六。大不善、二。不定、中、尋、伺、睡眠、貪、瞋、慢、不相應、中、得、四相、此、三十法、通見修二斷也。

【文科】第九に七十五法の見修二斷分別を示す。

見修二斷 【字解】見修二斷とは、見所斷修所斷の略である。見所斷とは見道で斷せられるもの、修所斷とは修道で斷せられるもの。見道修道の事は後に委しく出る。外に非所斷とて二道所斷でないものがある、無漏法や無爲法の如きは其れである。見修二斷に非所斷を合せて此を三斷門といふ。

七十五法の見修二斷分別は如何といふに、色の十一と大善地法の十と小煩惱地法の十と不定地法の惡作と不相應行の中、得四相を除く餘の九と此四十一は唯修所斷である。不定地法の疑は唯見所斷であつて修所斷には通

せない。元來疑は四諦に對して疑ひを懐くものなれば、此を唯見所斷とするのである。心王と大地法の十と大煩惱地法の六と大不善地法の二と不定地法の尋伺睡眠貪瞋慢の六と不相應行の得四相と此三十は見修二斷に通ずる。

一〇 四十六の心所と六識

問四十六、心所、中六識相應、様如何。答大地法、十、大善地法、十、大煩惱、六、大不善、二、不定、中、尋伺貪瞋、此三十二通六識相應、小煩惱、十、不定、中、睡眠、惡作慢疑、此十四唯意識相應也。

【文科】第十に四十六の心所と六識との相應關係を示す。

【講義】四十六の心所の中で、六識と相應不相應の關係は如何といふに、大地法の十と大善地法の十と大煩惱地法の六と大不善地法の二と不定地法の尋伺貪瞋の四と此三十二は通じて六識と相應する。次に小煩惱地法の十と不定地法の睡眠惡作慢の四と此十四は唯意識と相應する。

心所と六識との關係

一一 十 隨 眠

問於心所、中諸煩惱、中幾本煩惱耶。答十隨眠、是本煩惱也。十隨眠者、五見疑、無明貪瞋慢、五見者、一身見、二邊見、三邪見、四見取見、五戒禁取見、此五見大地法、中慧一分也。頌曰、我我所斷常撥無、劣謂勝、非因道妄謂、是五見自體、上。

【文科】第十一に十隨眠を明す。

【字解】一、本煩惱とは根本煩惱の事で、此は隨煩惱に對する名である。煩惱の中にも根本になるものと伴になるものとの二種がある。前者は根本煩惱で、後者は隨煩惱である。二、隨眠とは煩惱の異名。煩惱は心を味略ならしめるから、此を隨眠とも稱する。三、身見とは、委しくは有身見といふ。又我見ともいふ。實我を信する、從て我が所有といふことをも信する。此身は五蘊假和

本煩惱

五見

れば、此は道諦の下にもある。次に色無色界では、瞋の煩惱はないから、各から、瞋を除く故、十七七八四は九六六七三となる。諦々といふは、苦諦が九、集諦が六といふ様に、各諦が一つ宛滅することを示したものの。色界が三十一、無色界が三十一、欲界の三十六を合せて、合計九十八隨眠となる。色無色界では修惑は各三なれば、欲界を合せて十惑となる。從て見惑は八十八となる。

八十八使、見惑者。此九十八隨眠、中除修所斷十、所餘八十八也。三界、四諦、下欲界三十二、色界二十八、無色界二十八、合八十八也。是名迷理惑。迷、四諦、理、起、煩惱、故。修所斷十者、欲界貪、瞋、慢、無明也。色界貪、慢、無明也。

無色界貪、慢、無明也。是名迷事惑。迷、事、相、起、煩惱、故。

【講義】根本煩惱は見惑修惑の二種より成立するから、九十八隨眠を見惑修惑に二分することが出来る。八十八使の見惑とは、九十八隨眠の中で、修惑の十を除いた残りの八十八である。四諦を通じて欲界が三十二、色界が二十八、無色界が二十八、其で八十八となる。次に十使の修惑とは、前記の通り、欲界が四、

色界が三、無色界が三、其で十となる。見惑の事を一に迷理の惑と名ける。此は四諦の理に迷うて起る煩惱、しかし斷じかければ速に斷せられるから、見惑頓斷如破石といふ。修惑の事を一に迷事の惑といふ。此は事相に迷うて起る煩惱なれば、斷ずるのに至て斷じにくい、修惑漸斷如藕絲といふて居る。

八十一品、修惑者。此、貪、瞋、慢、無明、四煩惱。欲界四、色界無色界各三、隨所應三界九地各有九品、故九九八十一品也。九品者、上品三、品、上上品、上中品、中上品、中中品、中下品也。中品三、品、中上品、中中品、中下品也。下品三、品、下上品、下中品、下下品也。雖有四煩惱實、或四九三十六品、界、欲、或、三九二十七品、界、上上品乃至下下品同故云、九品也。

【講義】見惑一品斷、修惑九品斷というて、修惑の方は、どの煩惱でも煩惱に構はずに九品に分けて、上々品は上々品、乃至下々品は下々品と一處にして此を斷する。但し場處の上からは却て細く三界九地に分ける、其で八十一品の修惑となる。見惑の方は各種の煩惱に重きをおき、九品合して一品として斷ずる。

但し場處の上からは上界欲界と二分する、從て二種の四諦となる。其れ故こ
こに於て八十一品の修惑といふことを明すのである。

八十一品の修惑とは、此貪瞋慢無明の四煩惱が欲界に四、色界無色界では瞋を
除て各三、合計十種であつても、煩惱の種類はさておき、煩惱其者の強弱より上
々品乃至下々品と分け、更に三界九地に配すると、かくて八十一品の煩惱とな
る。

九品とは、上中下を又上中下に分けるから其で九品となる。四の煩惱が九品
に分れるから、實は欲界では三十六品、上二界では二十七品となるが、上々品は
上々品、乃至下々品は下々品、同品であるから、其を合すると九品となる。

三界九地者。一欲界五趣地。五趣地者、一欲界、二色界、三無色界、四人趣、五天趣也。此一地名、散

地。無禪定故。二離生喜樂地。初三定生喜樂地。二離喜妙樂

地。三禪定故。三捨念清淨地。四禪。第一二三四五、四地、色界也。六空無邊處

三界

五趣

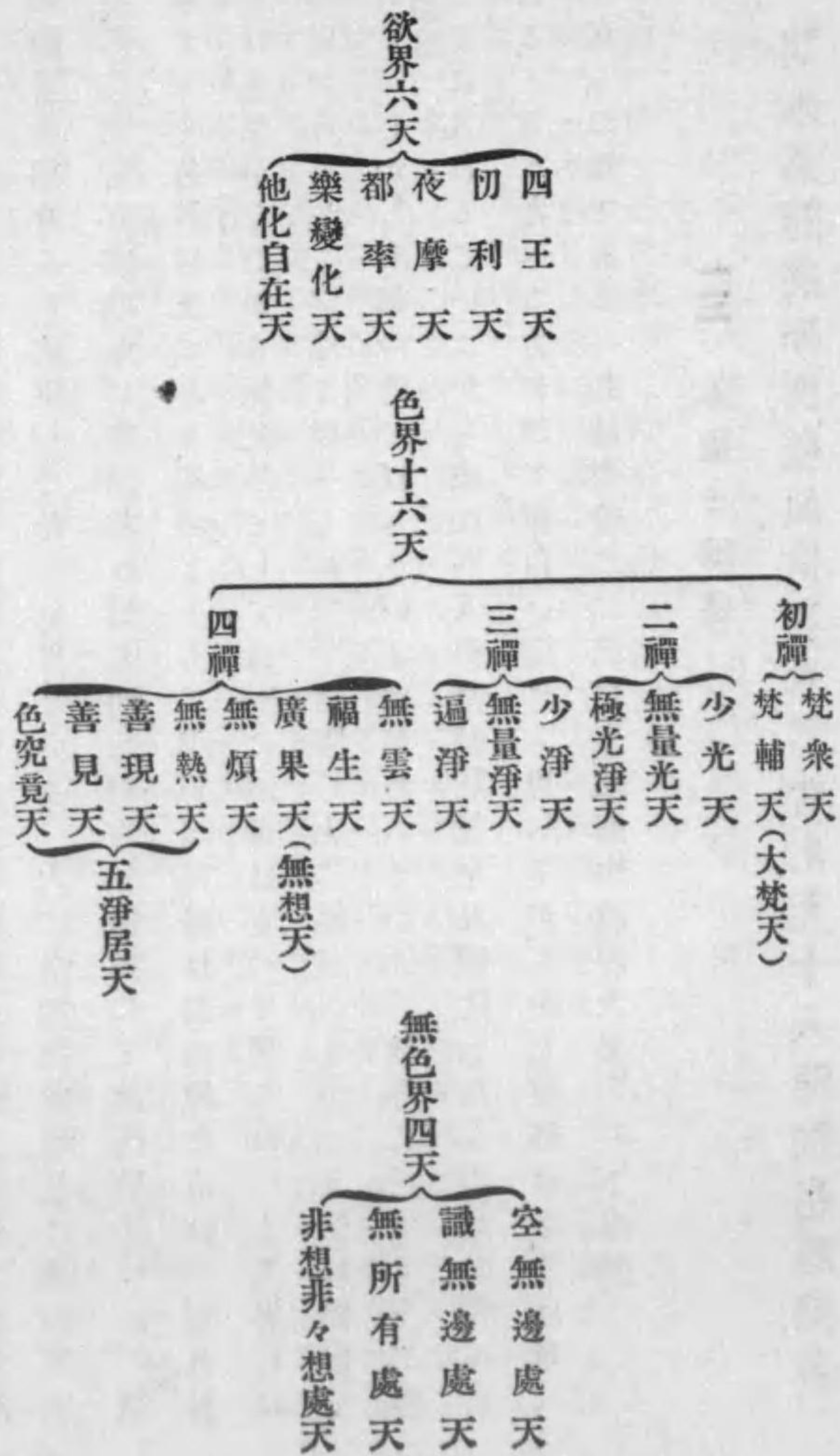
地。七識無邊處地。八無所有處地。九非想非非想處地。第六七
八九、四地、無色界也。色界無色界、八地名、定地、有禪定故也。

【字解】一、三界とは、一に欲界、欲は貪欲の事、此に欲貪と姪貪との別があるが、欲
界としては寧ろ姪貪が其特色をなして居る。たとひ天でも六欲天は男女關
係があつて、子が生れるといふことがある。二に色界、無色界に對した名で、色
法のある世界の事、此名は欲界にも通するが、今は總即前名で、特に上界の名と
なる。三に無色界、色法の全くない世界である。色界無色界を各四地に分つ
から其で三界は九地となる。二、五趣とは、一に地獄、此世界の下のところ稱せ
らる。此に八熱地獄や八寒地獄があるけれども、印度が熱帶國である故、常に
は多く八熱地獄が説いてある。二に傍生、此は或は畜生ともいひ、犬や猫をい
ふ。三に鬼、此は或は餓鬼ともいふ。常にいふ鬼の事ではない。四に人。五
に天。欲界には此五趣を具備して居るから、欲界の事を欲界五趣地といふ。
界と趣との差は、界は有情及び場處に通じて居るが、趣の方は有情に限て居る。
地獄趣といへば、地獄の場處をいふのでなくて、そこに居る有情をいふ。天趣

四禪四無色

といふも、天の場處をさすのではない、その天人の事をいふ。阿修羅を入れ
て六趣ともいふが、有部では阿修羅は餓鬼の一種だとして居る。三、離生喜樂
とは、欲界の苦受を離れて、初禪の喜樂を生じたるに名く。初禪は舊譯であつ
て、新譯では初靜慮といふ。上二界は凡て天である。四、定生喜樂とは、初禪の
定が元になつて、其から第二禪の喜樂を生じたるに名く。五、離喜妙樂とは、第
三禪へ行けば、喜受がなくなつて樂受のみとなる。故に喜を離れて妙樂に住
するといふ。六、捨念清淨とは、第四禪へ行けば、樂もなくなつて、單に捨受とな
るに名く。七、空無邊處とは、空の無邊を觀じて生るゝ處に名く。八、識無邊處
とは、識の無邊を觀じて生るゝ處に名く。九、無所有處とは、凡てを拂ひ捨て、
所有なしと觀じて生るゝ處に名く。一〇、非想非々想處とは、前地の様な想を
否定して非想といふも、全く想がないでもないから非々想といふ。定地の極
處であるから、單に消極的に此を顯したるもの。此地を或は有頂ともいふ。
【講義】三界九地とは、一に欲界五趣地、此地には禪定がないから散地と名ける。
欲界で定に入れぬこともないが、其は色界又は無色界の定に入るのであつて、

三界九地



定は欲界のものでない。喩へば都會は散地、田舎は定地なれど、心の持ち方に

依ては随分都會でも閑靜に暮す人もある様なもの。二に離生喜樂地。三に定生喜樂地、四に離喜妙樂地、五に捨念清淨地、此四地は次の如く初禪二禪三禪四禪とも稱せられ、總稱して此を色界といふ。六に空無邊處地、七に識無邊處地、八に無所有處地、九に非想非々想處地、此四地を總稱して無色界といふ。欲界よりも色界は上にある、初禪よりも二禪乃至四禪は最高地にあれど、無色界には色法がないから、無色界としては別に場處は定つて居らぬ。上二界には禪定があるから定地と稱せられる。實際に上二界があるかどうかは問題であるが、しかし有部の考ではさういふ處があるといふ。欲界に於ても上二界の定に入れるといふから、或は吾人の精神状態を具體化したものとも考へられる。さう考へる方が却て面白い様にも思へるが、しかし有部はさうは考へて居らぬ様である。頌疏要義二二三頁「須彌山說の大要」の下参照。

二三 本惑と隨惑

問本惑隨惑分別、様如何。答本惑者上、九十八隨眠也。隨惑者、

本惑と隨惑

大煩惱、中除、無明、餘、五、大不善、二、小煩惱、十、不定、中、不善、睡眠、惡作、此、十九法也。頌曰、隨煩惱、此、餘、染、心、所、行、蘊、也。

【文科】第十三に本惑と隨惑との別を示す。

【字解】一、本惑とは、惑は煩惱の異名。前の本煩惱の事をいふ。二、隨惑とは隨煩惱の事。本煩惱について起る煩惱をいふ。

【講義】本惑と隨惑との別は如何といふに、本惑とは前の九十八隨眠をいふ。隨惑とは大煩惱地法の中、無明を除て他の五と大不善地法の二と小煩惱地法の十と不定地法の中、惡の睡眠と惡の惡作と此十九である。頌にいふ、隨煩惱とは根本煩惱より外の染汚の心所行蘊所攝のものである。

問此、本惑隨惑、中、何自在起、何隨從起、耶。答本惑、中除、無明、餘、九、唯自在起也。無明、通、自在隨從、隨惑、中、小煩惱、十、并不善、惡作、自在起也。餘、唯隨從起也。睡眠、或、自在起、或、隨起。

【字解】一、自在起とは、無明と相應することは別として、自由に獨りで起るこ

自在起
隨從起

このできるもの。二隨從起とは、此は無明の外に他の煩惱と相應して起るもの。

【講義】本惑隨惑の中で自在起隨從起の別を示すならば、本惑の中で、無明は自在隨從に通ずるが、其他の九惑は自在起である。又隨惑の中では、小煩惱地法の十と惡の惡作とは自在起であるが、其他は隨從起である。但し睡眠には自在起もあり隨從起もある。

問百八煩惱者何耶。答本惑九十八隨眠加十纏云百八也。十纏者頌曰纏八無慚愧嫉慳并悔眠及掉舉惛沉或十加忿覆上已。

【字解】纏とは煩惱の異名。但し十纏は隨煩惱をいふ。

【講義】百八煩惱とは如何といふに、本惑の九十八に隨惑の十纏を加へたもの。十纏とは、頌にいふ纏の八とは無慚と無愧と嫉と慳と悔即ち惡作と睡眠と掉舉と惛沈とである。若し十纏ならば忿と覆とを加へると。此は八纏説と十纏説とあるが、有部では普通十纏説を取つて居る。百八といふ數は、珠數の珠が百八であり、又百八の鐘の音などにも用ふ。

百八煩惱

一四 三種の色

問於七十五法中就色法經說三種色樣如何。答一有見有對

色。一無見有對色。二無見無對色。

【文科】第十四に三種の色を明す。

【字解】有對とは、對は對碍の義、質碍の義を有するもの。即ち極微所成のものを有對といふ。從て無表色の如く、極微所成に非ざるものは此を無對といふ。有對にも障礙と拘碍との別があるが、今は障礙の方であつて、拘碍の方は今の所論ではない。頌疏要義三五頁「三種有對」の下參照。

【講義】七十五法の中の色法に就いて、阿含經に三種の色を説いて居るが、前の十一種の色と如何なる關係を有するかといふに、一に有見有對色とは色境を

有對

三種の色

三種の色

さす。二に無見有對色とは五根と聲香味觸の四境をさす。三に無見無對色とは無表色をさす。無表色は極微所成でないから無對色である。其と反對に五根五境は極微所成だから有對色となつて居る。又吾人の眼に映するものは松とか竹とか山とか川とかといふ色境のみであるから、此を有見といひ、他は皆無見となつて居る。五根の如きも吾人の肉眼には映せぬからやはり無見である。無表色が色法として存在するか否かは一個の問題となつて居るが、有部では此無見無對色がどうしても無表色をさすから、無表色は色法として必ず成立するといつて居る。

問於眼等、五根扶根、清淨根體性如何。答扶根者、色香味觸四境也。清淨根者、體清淨故、如殊寶光、其體極微、扶根不可見有對色也。

扶根

【字解】一、扶根とは、扶ける根といふ意味で、五根の扶けとなつて居るもの、即ち眼根に於ける眼球の如きものをいふ。二、清淨根とは、普通には勝義根と稱し

扶根と清淨根

て居るが、其體清淨であるから清淨根といつても差支ない。此は今いふ五根をさすのである。

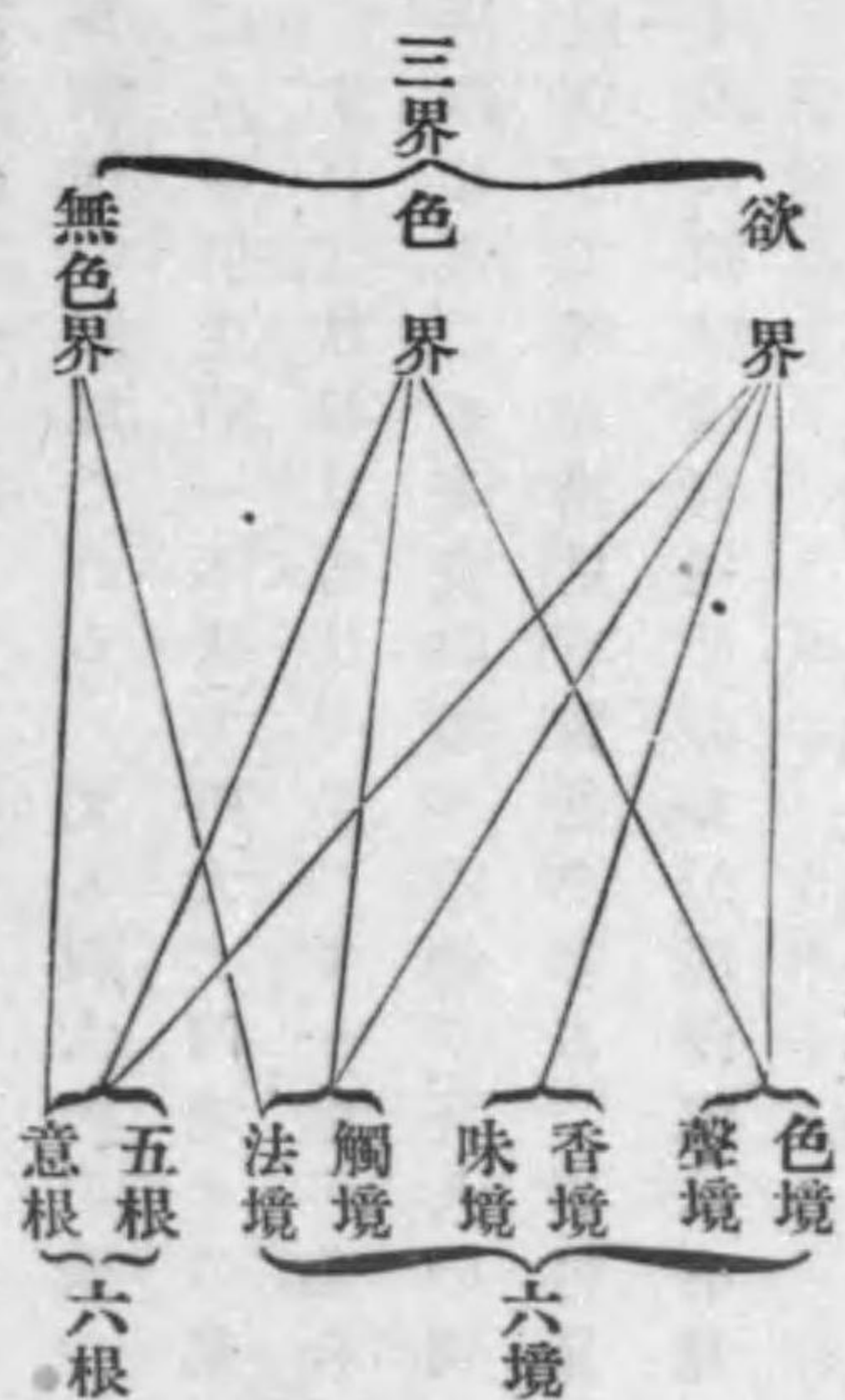
【講義】眼等の五根に於て、扶根と清淨根との體性は如何といふに、扶根は其體色香味觸の四境である。尤も四大種の交つて居ることは勿論である、なせならば八事俱生隨一不滅で、四大と四境との集合より少いものはない筈である。換言すれば扶根は假法であつて、一種の集合體にすぎぬ。次に清淨根とは、其體清淨なること珠寶の光りの如く、吾人の肉眼には映せないが、しかし極微から成立して居る無見有對色である。不可見とは無見と同じ意味。扶根と比較するに、扶根は有見であるが、清淨根は有見ではない。

一五 六根六境と三界

問根境、三界分別如何。答欲界具有六根六境、色界有六根四境、除香味二境、無色界唯有意根法境。

【文科】第十五に六根六境の三界分別を示す。

【講義】六根六境の存在を三界に配すれば如何といふに、欲界には六根六境の凡てがある。色界へ行くに六根四境となつて、香味の二境を除くといふ。無色界へ行けば色法がないから、従て五根五境はない、唯意根と法境とだけになる。



問何故色界無香味二境耶。答香味二境段食性故。色界離段食處香味二境無也。

【字解】段食とは、段をつけて食する意味で、吾人の食事の如きは即ち主なる段食である。其體は味のみでなく、香も觸も段食の一種である。香を嗅ぐ事、又は入浴、納涼等、皆段食の種類である。頌疏要義九四頁「四食」の下参照。
【講義】色界にはなせ香味の二境がないかといふに、香味の二境は段食の性だからといふ。色界は段食の欲を離れた處なれば従て香味の二境を有せない。然らば觸も段食の性だから、色界に觸がない筈であるのに、而も色界に觸あるは如何といふに、段食を離れて香味の二境はないが、しかし段食を離れても別に觸境はあるから、色界に觸境があるのは決して不思議ではない。

問若爾者何故有鼻舌二根耶。答論第二曰。謂起言說及莊嚴身矣。

【講義】然らば色界に於て何故に鼻舌の二根があるかといふに、俱舍論第二にいふ、其は物を言はねばならぬ必要があり、又身體を莊嚴する爲にもついで居るといふ。

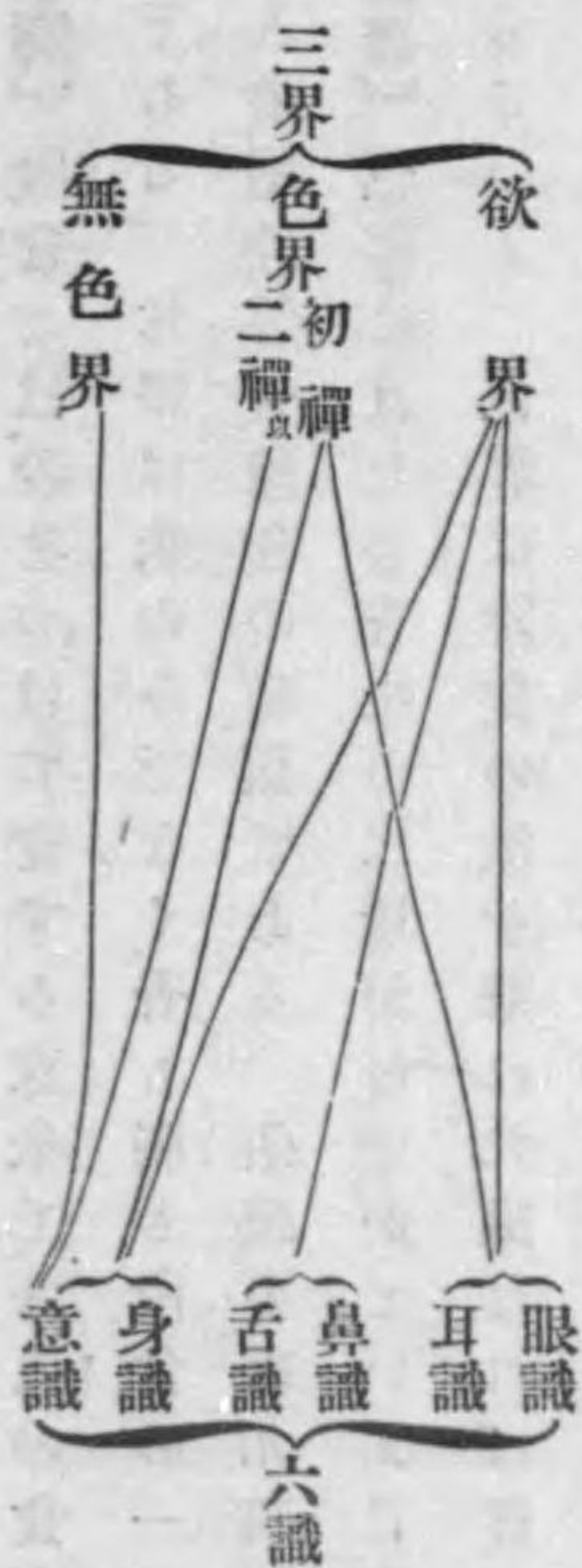
一六 六識と三界

問於七十五法中心王一由依六根起成六識此六識三界分別如何答欲界六識具有色界中初禪有眼耳身意四識除鼻舌二識二禪已上乃至無色界唯有意識

【文科】第十六に六識の三界分別を示す。

【講義】七十五法の中の心王は一種であるが、其が六根に依て起るから、六種の識となる、此六識の三界分別は如何といふに、欲界には六識が具備して居る。

六識の三界分別



色界の初禪には鼻舌の二識を除いて、他の眼耳身意の四識だけある。二禪以上五識皆無とて、二禪以上乃至無色界では唯意識のみとなる。初禪に鼻舌の二識がないのは、香味の二境がないからである。二禪以上に五識がないのは、次の問答に出て居る。

問何以二禪以上無五識耶答五識必尋伺相應行相麤動二禪以上寂靜地尋伺無故五識無也

【講義】二禪以上にはなせ五識がないかといふに、五識は尋伺の心所と相應して、其行する相狀がアラ／＼しい。二禪以上は極めて静かな處なれば、尋伺の心所もなく、従て五識もないこととなる。

問二禪已上天衆六根具足既無眼耳身三識何以了知色聲觸三境耶答二禪已上天子見色聞聲覺觸時借起初禪尋伺相應眼耳身三識此云泛借起三識也借起云意二禪已上寂靜地麤動三識起如客非當地識云借起也非人間如借用他

二禪以上五識

物。泛起者任運泛泛起事也。

【字解】任運とは、自然にといふ事。

【講義】二禪以上の色界の天人は六根は具足して而も眼耳身の三識がないといふ、されば色香觸の三境を如何にして認知するかといふに、二禪以上の天人が色を見、聲を聞き、觸を覺せんとする時は、初禪の尋伺相應の眼耳身の三識を借て起すから、此を借起識又は泛借起の三識と稱する。借起とは借て起すといふ意である。二禪以上の静かな處でアラ／＼しい三識を起すことは丁度客の如く、二禪以上の其場處のものでないから、借起といふのである。吾人仲間、他人から物を借用する様な譯でなく、泛起といふて自然に獨りで起つて來るものと考へられてある。此に就いて古來傳へて居る面白い狂歌がある。

櫻花二禪以上に咲くならば

下地の眼識借りて詠めん

借起識

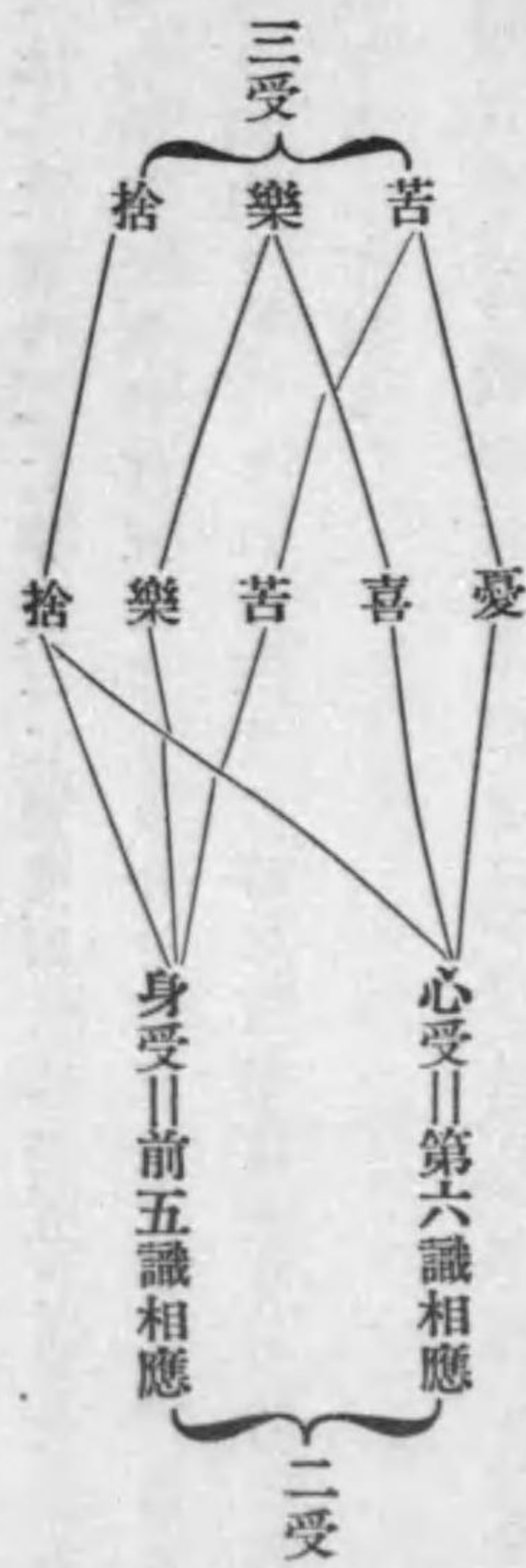
三受と五

一七 五受と六識

問七十五法、中於四十六、心所大地法、十中受、一分別三受五受、様如何。答三受者。一苦受。二樂受。三捨受也。五受者。一苦受。二樂受。三憂受。四喜受。五捨受也。三受五受、開合、異也。苦、開、憂、樂、開、喜。

【文科】第十七に五受の六識分別を示す。

【講義】七十五法の中、十六の心所の中で、大地法の中の受の心所を、三受五受と區別するは如何といふに、三受とは、一に苦受、二に樂受、三に捨受である。又五



五受と六識

受とは、一に苦受、二に樂受、三に憂受、四に喜受、五に捨受である。三受と五受とは開合の異で、開けば五受となり、合せば三受となる。苦より憂を開出し、樂より喜を開出する。されば三受の時の苦樂は、五受の時の苦樂よりも、より廣き意義を有して居る。

問五受、六識相應、様如何。答苦樂、五識相應、憂喜、意識相應、捨、六識相應也。但、第三禪、樂、意識相應。

【講義】五受と六識相應の關係は如何といふに、苦受は五識相應、憂喜は意識相應、捨は通じて六識相應である。其理由は次の問答に示してある。但し第三禪の樂に限り意識相應である。冠註には、五受六識相應といふのが五識相應となつて居る。古版の名目でも、首書でも皆六識となつてあるから、全く冠註者の粗漏であるといつてよい。

問何故苦樂限、五識、憂喜限、意識、捨通、六識、耶。答苦樂、無分別、憂喜、有分別、捨通、有分別、無分別、故、五識、無分別、識、苦樂、相應。

五受と六識相應

同上の理由

意識、有分別、識、憂喜、相應、捨通、有分別、無分別、故、六識、相應、第三禪、意識、極悅、無分別、故、樂受、相應也。頌曰、身、不悅、名、苦、即此悅、名、樂、及三定、心、悅、餘處、此名、喜、心、不悅、名、憂、中捨、二無別。以上。

【講義】苦樂は五識相應、憂喜は意識相應、捨は通じて六識相應といふ理由は如何といふに、苦樂は元來無分別なものなれば、無分別の五識と相應し、憂喜は有分別であれば、有分別の意識と相應するのである。前者は身的受なれば此を身受といひ、後者は心的受なれば此を心受といふ。捨受は身心に通じて居るから、其で通じて六識相應とする。捨は元來無分別のものであれば、其が有分別無分別に通ずるといふは穩當でない。苦樂の中間の捨と憂喜の中間の捨と、即ち身受の捨と心受の捨と二種があるから、従て六識相應となる譯である。第三禪の意識は悦び極つて無分別となるから、意識相應ならば喜受の筈であるが、特に此を樂受と稱する。されば樂受でも五識相應ではない。頌にいふ、

身的不悦は苦であり、身的悦は樂である。及び第三禪の心的悦も樂である。一般としては心的悦は喜であつて、心的不悦は憂である。中間は捨であつて、身心の區別はない、何れでも捨と稱する。

一八 五受と三界

問五受、三界九地分別如何。答欲界五受具有、色界、中初禪有

三受。一喜受。二樂受。三捨受。二禪有二受。

一喜受。二捨受。三禪有二受。一樂受。二捨受。

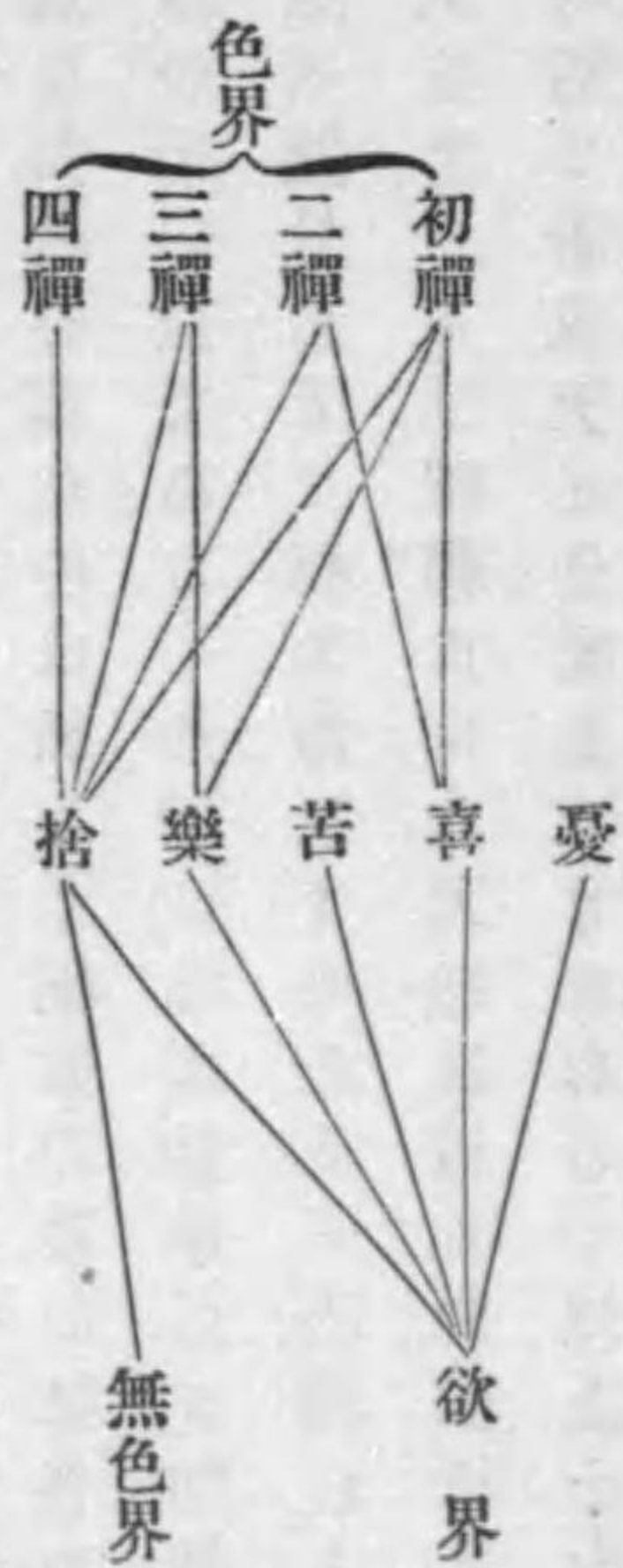
四禪已上乃至有頂、唯捨受地、故無喜樂受也。

【文科】第十八に五受の三界分別を示す。

【講義】五受を三界九地に分別せば如何といふに、欲界には五受を具備して居る。色界の中で初禪には三受がある。一に喜受、此は意識と相應する。二に樂受、此は眼耳身の三識と相應する。三に捨受、此は眼耳身意の四識と相應す

五受の三界分別

同上の理由



る。次に二禪には二受がある。一に喜受、此は意識と相應する。二に捨受、此も意識と相應する。次に第三禪には二受がある。一に樂受、此は意識と相應する。二に捨受、此も意識と相應する。次に四禪以上乃至有頂までは唯捨受のみであつて、決して喜受も樂受もない。

問上二界、中初二三禪有喜樂。四禪已上無喜樂。有何故耶。答喜樂猶蠢動。四禪已上極寂靜地。故唯有捨受、無喜樂受也。

【講義】上二界の中で、初二三禪には喜樂受があり、四禪以上には喜樂受がないのは如何といふに、喜樂受はアラ／＼しいものだから、初二三禪にはあるが、四禪以上になると極めて静かな處となるから、唯捨受だけあつて喜樂受はない

五受と三界

ことになる。

一九 生靜慮と定靜慮

問於上二界生靜慮定靜慮分別如何。答生靜慮者色界無色界果報也。即梵衆天等十六天色界空無邊處等四處無色界有情也。定靜慮者色無色八地修因也。

【文科】第十九に生靜慮定靜慮の別を示す。

【字解】一、靜慮とは靜に審慮する事で、此は色界に限る名である。今無色界まで通じた名としたのは恐らく根據のない記事かと思ふ。二、十六天とは、此は色界の天の數である。初禪に二天、梵衆天と梵輔天とである。二禪に三天、少光天と無量光天と極光淨天とである。三禪にも三天、少淨天と無量淨天と遍淨天とである。四禪には八天、無雲天と福生天と廣界天と無煩天と無熱天と善現天と善見天と色究竟天とである。以上十六天となる、此は有部の説であ

靜慮
色界十六天

生靜慮と定靜慮

る。若し梵輔天から大梵天を開けば十七天となつて、毘駄羅有部、即ち西方師の説となる。又廣果天から無想天を開けば十八天となつて、經部の一派なる上座の説となる。此に就いて十六七八薩經上といふ事があるが、此は大分に誤つて傳へて居る。十六天説が薩婆多、即ち説一切有部だといふのはよい。十七天説が經部だといふのは全く間違ひで、此は前記の通り西方師の説とせねばならぬ。又其が俱舍論の説である。世親の信じて居る説であるから、或は誤て經部としたものか。十八天説が上座部だといふのも誤りで、此は上座部ではない、經部の一派なる上座の説である。順正理論等に上座の事が見えて居る。婆沙には上座の名が見えて居らぬから、多分後の分派らしく思はれる。頌疏要義七九頁「色界十七天」の下参照。

【講義】上二界に於て生靜慮定靜慮を區別すれば如何といふ問であるが、靜慮の名は實は無色界に通せぬから、かういふ事はいへぬ筈のものである。俱舍論卷二十八の初に、生靜慮定靜慮の名が出て居るが、決して無色界に通じさせてはない。其答に、生靜慮とは色界の果報、といへば間違ひはないが、今は廣い

意味で色界無色界の果報であるといふ。即ち梵衆天等の色界十六天と空無邊處等の無色界四天の有情をいふ。次に定靜慮とは、此も色界に限るべきであるが、前と同様に無色界にも通じさせて、色無色界の八地へ生れるに就いて修する所の定其者をいふ。定の種類に就いては、以下委しく述べてある。

110 根本定と近分定

問就定靜慮根本近分差別竝喜樂捨受相應様如何。答根本定離下地煩惱得之。離下地縛必得上故云是也。近分定伏下地煩惱得之。對根本善是名加行善也。又云根本地功德近分地功德。上一二界合八根本八近分也。

【文科】第二十に根本定近分定の別及び三受分別を示す。

【字解】一、近分とは、根本の分に近き意味。四禪四無色の八根本定に各近分定といふのがある。但し初禪の近分定だけは特に未至定と名ける。二、加行とは、根本に對した名準備時代の善なれば加行善といふ。三、縛とは煩惱の異名。

近分

根本定と近分定

【講義】定靜慮をどうして根本と近分とに分ける。又其に喜樂捨の三受が如何に相應するかに就いて、其答に、先づ根本近分の區別からいふと、根本定とは其定より下地の煩惱を離れた處に得られる。下地の縛即ち煩惱を離れた處に上地の定を得るといふ其定が即ち根本定である。次に近分定とは、下地の惱を伏した丈で、まだ斷する處に至らぬのをいふ。根本定の根本善なるに對して、近分定は加行善である。又根本定を根本地の功德といふに對して、近分定を近分地の功德といふ。色界無色界を合すれば八根本定八近分定となる。

唯於初禪一地有中間禪勝根本有尋有伺定無尋唯伺不及
一二禪無尋無伺定故云中間定也捨受相應定也

【字解】一、中間禪とは、或は中間定ともいふ。初禪と二禪との中間にあつて、而も初禪に屬する定である。二、有尋有伺とは、尋伺の心所が相應する事。初禪を有尋有伺定といふ。三、無尋無伺とは、尋伺の相應せぬ事で、二禪以上は無尋無伺定である。四、無尋唯伺とは、尋はないが伺だけ相應する事で、中央の中間

中間禪

禪を無尋唯伺定といふ。

【講義】初禪と二禪との中央、而も初禪に屬して中間禪がある。其は根本定たる初禪の有尋有伺定よりも勝れて無尋唯伺定である。又二禪の無尋無伺定よりも劣つて居るから、特に此を中間禪と名ける。此定は捨受相應の定である。

又八近分、中唯初禪、近分名未至定。從欲界散地、未至上界定地、根本故名未至。歟。俱舍論二十八云。有說。未至定亦味相應。未起根本亦貪。此故。由此未至具有三種。從欲界散地、未至上界定地、根本故初禪、近分名未至。證據此文一也。

【字解】味とは味等至又は味定といひ、此には愛が相應して居るからである。三等至の一となつて居る。

【講義】八近分定の中で、初禪の近分定のみを特に未至定と名けて居る。此は欲界散地から上界定地の根本定へはまだ至らぬ意味で未至と名けたもの歟

未至定

根本近分
別の三受分

と、特別に此處には歟の字を附して居るが、しかし其にも及ぶまいと思ふ。俱舍論卷二十八で見ると、或説に、未至定にも、味等至が相應して居る。まだ根本定を起したことがないから、其に對して貪愛を起す故、未至にも味等至、淨等至、無漏等至の三種を具することある。此文の如きは確に、欲界散地から上界定地の根本にまだ至らぬから初禪の近分を未至と名くる、といふ證據の一になる。

初禪、根本、二禪、根本、喜樂受相應定。第三禪、根本、樂受相應定。第四禪、已上乃至有頂、五地、根本、捨受相應定。八近分、皆捨受相應定。

【講義】初禪と二禪との根本定は喜樂受が相應し、三禪の根本定は樂受が相應し、四禪以上乃至有頂の根本定は捨受が相應する。又八近分定は皆捨受が相應する。

色界、四根本、止觀均等。未至、中間、慧多定少。上、七近分、四無色、根本定多慧少。

根本近分別の定慧分

【字解】止觀とは、止は定、觀は慧、定慧の異名である。定は心を一境に止める、慧は諸法を觀察するから、定慧の事を一に止觀といふ。
【講義】色界の四根本定は定と慧とがよく平均して居る。未至と中間とは慧が多くて定が少い。又上七近分定と四無色の根本定は、反對に定が多くて慧が少い。

二二 三三 摩地

問有尋有伺等、三三摩地者何耶。答一有尋有伺、三摩地。初禪、根本、未至也。二禪已上乃至有尋也。三禪也。二無尋無伺、三摩地。頂、根本、近分也。

【文科】第二十一に三三摩地を明す。

【字解】三摩地とは梵語等持と譯す。定の事。故に三定というてもよい。有尋有伺等の事は既に前に記しておいたから、今は略しておく。

【講義】有尋有伺等の三の三摩地とは何をいふかといへば、一に有尋有伺の三

三三摩地

摩地とは、尋伺相應の定の事で、此は初禪の根本と未至定とである。二に無尋唯伺の三摩地とは、尋はないが伺だけ相應する定の事で、此は中間禪をいふ。三に無尋無伺の三摩地とは、尋も伺も共に相應せぬ定の事で、此は二禪以上乃至有頂の根本と近分とをいふ。

三三 三三 等至

問就四禪四無色、八定、味、淨、無漏、三三等至、分別如何。答一味定者煩惱相應、定、二淨定者有四種。一順退分定。順退、味定、味定、但、緣過去淨定。二順住分定。不退、不進、故名順住。三順勝進分定。順上地、定、故名順勝進也。四順決擇分定。順無漏、定、故名順決擇也。

【文科】第二十二に三三等至を明す。

【字解】一等至とは定の異名。故に問には、等至とあるも、答の方にはすぐに味定等というて居る。しかし、精密にいへば、等持、等至、等引、靜慮、止、何れも多少の

差異がある。二、淨定とは、有漏の善定の事で、味定に貪せらるゝ定である。三、無漏定とは、無漏だから、味定に貪せられない定である。四、決擇とは、無漏智の事。無漏智は眞に諸法を決擇する作用がある。

三等至

【講義】四禪四無色の八定に於て、味等至、淨等至、無漏等至を分別せば如何といふに、一に味定とは、貪愛といふ煩惱の相應する定である。二に淨定とは、同じく有漏ではあるが、此は清淨の善定であつて、此に四種がある。一に順退分定、此は退分に順する定で、即ち味定に順する。從て定から離れんとして居る。其味定とは、過去の淨定を緣じて其に貪するのである。二に順住分定、此は進みもせず退きもせざるが故に住分といふ。其に順するのである。三に順勝進分定、此は上地の定に順するから、順勝進分といふのである。四に順決擇分定、此は無漏定に順するから、順決擇と名けられたものである。三に無漏定、名目には無漏定の事が何とも書いてない、しかし無漏の九地といふ様な事は次に記されてある。又八定と三等至との關係に就いての間であるにも係はず、其事の説明がないのはどういふ事か分らぬ。此は前七定には三等至があ

無漏の九地

るけれども、第八定だけは無漏のない處であれば、從て無漏定はなくて、味淨の二等至のみ相應する。

問無漏九地者何耶。答未至中間四本靜慮。下三無色。此之九地無漏依地也。

【講義】無漏定は九種に分れる、其を無漏の九地といふ。九漏の九地とは、未至と中間と四靜慮と下三無色とであつて、欲界と有頂とを除く。此九地が無漏定所依の地である。

問欲界散地故無無漏定理在不疑。上七近分竝有頂根本何故無無漏耶。答上七近分劣未至地故無無漏有頂味劣故無無漏也。

【講義】欲界は散地であるから無漏のないのは、道理あつて疑ひのないことであるが、上の七近分や有頂にはどうして無漏がないかといふに、上の七近分は未至よりも却て厭離心が劣て居るから無漏がない。又有頂は定の極處であつて、却て味劣だから無漏がないのである。

由上の理

後編 問答分別 其下

三三 賢

問於七十五法就斷八十八使見惑八十一品修惑三賢四善根見道修道無學道並四向四果廢立如何答三賢者一五停

心不淨觀持 息念等也 二別相念住別別觀身受 心法位也 三總相念住總觀身受 心法位也

【文科】第二十三に七方便の中の三賢を明す。

【字解】一賢とは次の聖に對した名。聖より劣れることを顯す。三賢は方便位とて、聖に入る準備時代なれば、聖に區別して賢と稱したも。二停心とは、貪瞋痴等の種々の心を治して靜にする事。其に五種の觀法があるから五停心といふ。三、不淨觀とは、不淨を觀じて貪を治す事をいふ。四、持息念とは、數息觀ともいひ、息を數ふる觀法をいふ、其時念の心所が作用するから、或は念と

もいふ。五、念住とは、舊譯では念處といふ。實は其體慧なれど、念の心所も作用するから念住と稱せられる。

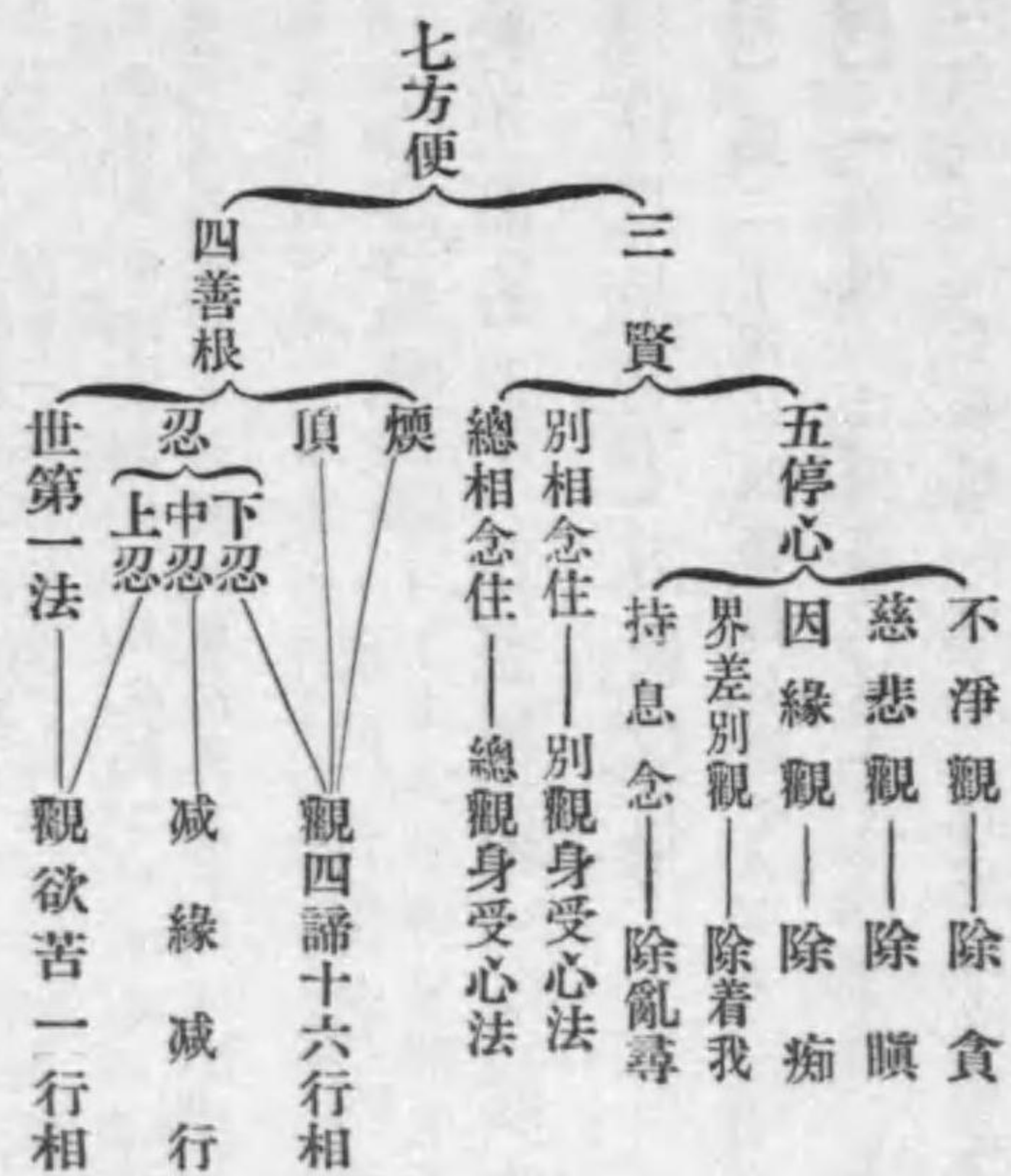
【講義】以下は修行の階級を明す所であるが、問があまりに大きい爲に從て答も非常に長い故、今は便宜上幾段かに分けて講義を致さうと思ふ。七十五法に於て八十八使の見惑と八十一品の修惑とを斷するに就いて、三賢と四善根と、見道と修道と無學道と、并に四向四果とを如何に立てるかといふに、其答に、先づ三賢から説き初めてある。實は其前に身器清淨とて、此身心を清めるといふ事があるが、しかし其は勿論修行の階級には入らぬ。身器清淨の事は、頌疏要義二二九頁「身器清淨」の下を見て頂きたい、今は略しておく。

三賢とは、一に五停心。心を靜にするに五種の方法があつて、初に不淨觀。貪欲心の多き人は此不淨觀を修して貪を治する。貪には姪貪、欲貪の別もあるが、其貪を治するには吾人の骨鎖を觀するのが最もよいこの事で、俱舍論には委しく此を説いて居る。不淨觀及び次の持息念の事は、頌疏要義二三〇頁「不淨觀と數息觀」の下を見て頂きたい。次に持息念とは數息觀の事で、此は

息を數へることに依て、心の散亂を治する。世の中には貪の人と散亂の人とが最も多いから、入修の要門は此二つであるというて、俱舍論でも二觀より外は説いてない。等の中には三觀を等取して居る。順序からいふと持息念は第五であつて、今の三觀が中央に入居る。一に慈悲觀、此は慈悲を觀じて瞋を除く。二に因緣觀、此は因果の道理を觀じて痴を除く。三に界差別觀、又は界方便觀ともいふ。此は十八界の差別を觀じて實我思想を除く。禪や天台では、佛の十八界を觀するといふ様に、特殊の觀法とした結果、此を念佛觀と稱して居る。此三觀に前の二觀を合して五停心觀といふ。此中持息念だけは往々梵語を以て顯して居る。梵語では阿那阿波那念といふ、尤も念は梵語ではない。舊譯の梵語では此を安般と寫してある。阿那阿波那は直譯するに呼吸となる。

別相念住
總相念住

二に別相念住とは、別々に身と受と心と法とを觀する位である。或は二々合觀、三々合觀、四々合觀というて、二個以上合して觀する事もあるが、其が皆別相念住の位である。此に依て、身の不淨、受の苦心、心の無常、法の無我を觀知するが



故に、淨樂常我の四倒を治することができる。三に總相念住とは、總じて身受心法を觀する位である。前の別相念住にて練習の功積みたるを以て、こゝでは單に總觀のみである。以上此を三賢といふ、又次の内凡に對して此を外凡といふ。

二四 四善根

四善根者。一煖法。

聖火前相故名煖。具觀四聖諦修十六行相。二頂法。在進

退兩際。如山頂故。或退位中此爲頂故名頂法。位。三忍法。忍可四聖諦最殊勝故。下忍亦觀四聖諦修十六行相。雖有退等必不斷善根。

惡趣得非擇滅中忍位七周滅緣二十四周。四世第一法。此有漏故名爲世。於世間減行上忍唯一行一刹那觀欲界苦下一行。

觀欲界苦一行一刹那。此位無間必入見道也。 此四善根名內凡位也。頌曰。煖必至涅槃。頂

終不斷善。忍不墮惡趣。第一入離生。此三賢四善根見道加行位也。是名七方便位也。

【文科】第二十四に四善根を明す。

【字解】一善根とは聖道の根本といふ意。次がすぐ見道であつて、聖道の起る前だから、こゝを善根といふ。其が四位に分れるから四善根となる。二、聖火

四善根

とは聖道を火に喩へたもの。三、十六行相の事はすぐ次に出る。四、忍可とは、忍は認める事。五、離生とは、見道の異名。見惑の生起を離るゝ事。委しくは正性離生といふ。六、方便位とは準備の位といふ事。見道に對した名。【講義】次に四善根とは、一に煖法。聖道の火が顯れかけ様とした處、丁度東天が明るくなつて、今にも日光が出で様として居るが如きを煖と名ける。こゝでは具に四聖諦を觀じて十六行相を修する。四諦に各四行相があるから其で十六行相となる。退位して善根を斷じ、逆罪を造り、三惡道に墮することがあつても、久しくは流轉せずして、後には必ず涅槃に至るといふ位である。二に頂法、此は進と退との中央であつて、丁度山の頂上の如き處なれば頂法といふ。或は又退位の中の頂上だから頂法といふと見てもよい。こゝでも四聖諦を觀じて十六行相を修する。退位する事があつても善根を斷ずる様なことはない。三に忍法、此處では最も勝れて四聖諦を認めるから、其で此位を忍法と名ける。忍位を下中上に分つ。下忍では、前と同じく具に四聖諦を觀じ、十六行相を修する。而して地獄、餓鬼、畜生の三惡趣に於て非擇滅を得し、再び

も單に欲苦の一行相を修する丈であつて、やはり一行一刹那である。次はすぐ見道へ入る。こゝも有漏であるから世と名ける。有漏世間の中では最も勝れて居るから第一と名ける。次に頌を引いていふ、煖法は必ず涅槃に至る。頂法は終に善根を斷せない。忍法は三惡趣に墮せない。世第一法は見道に入る。以上三賢と四善根とは見道へ入る準備の行位であつて、此を七方便位と名ける。

十六行相者

此體唯是慧觀四諦各有四行相。四行相者所緣境影像心心所如淨明鏡對所緣境時心心上現所緣境影像行解者心心所解了境

用也。行相行解。共能緣攝也。

苦諦四。一苦。

逼迫性故。

二空。

違我所見故也。

三無常。

待衆緣故。

集諦四。一因。

如種理故。

二集。

等現理故。

三生。

相續理故。

四緣。

成辨理故。

滅諦四。一滅。

諸蘊盡故。

二靜。

三火息故。

三妙。

無衆患故。

四離。

脫衆災故。

道諦四。一道。

通行義故。

二

三

四

出。

超生死故。

略頌曰。苦空無常無我。因集生

如。

契正理故。

三行。

總淨樂故。

四出。

超生

死故。

緣是集諦。滅靜妙離是滅諦。道如行出是道諦。

【字解】三火とは、貪瞋痴の三を火に喩へたもの。

十六行相

【講義】十六行相といふ言が前に出て居つたが、其はどういふ意味かといふに、其體は慧であつて、四諦を觀するに各四行相があるから、其で十六行相となる。行相とは能緣の心の上に映寫せる所緣の境の影像である。心々所は丁度明なる鏡の如くで、其が所緣の境に對する時、能緣の心の上に所緣の境の影像が現れる。行解とは、心々所が所緣の境を解了する事で、行相も行解も共に能緣に攝せられる。十六行相とは、苦諦に四行相があつて、一に苦、逼められるから苦しみを感ずる。二に空、我所見に反するからそこが即ち空である。三に無常、諸の因緣を待てできたものなれば決して常住ではない。四に無我、我見に反するから無我となる。集諦にも四行相があつて、一に因、丁度種子の芽を生ずるが如きものであるから。二に集、等しく果を現せしめるから。三に生、果を相續せしめるから。四に緣、衆緣和合して果を成辨せしめるから。滅諦にも四行相があつて、一に滅、有漏五蘊が永く盡きるから。二に靜、煩惱が永く息

むから。三に妙、多くの患ひが無くなるから。四に離、多くの災を離れるから。道諦にも四行相があつて、一に道、衆聖が通り行くものだから。二に如、正理に叶つて居るから。三に行、涅槃の城に趣くから。四に出、永く生死を超出するから。著者の略頌にいふ、苦空無常無我は苦の行相、因集生縁は集諦の行相、滅静妙離は滅諦の行相、道如行出は道諦の行相である。

二五 見 道

見道者、欲界、四諦、上界、四諦、上下八諦、下八十八使、見惑、斷之、有八忍、八智、其十六心中、前十五心、名見道、見無始已來未曾見四諦理、故名見道、頌曰、忍智如次第、無間、解脫道、前十五見道、見未曾見故。

【文科】第二十五に三道の中の見道を明す。

【字解】一、無間道とは、煩惱の斷の位であつて、忍の時をいふ。吾人と煩惱との間に得が入て居ると、煩惱との關係があるけれども、今は其得が間に入らぬ様になつて、煩惱と無關係の状態になつた位を無間道といふ。二、解脫道とは、擇滅の證の位であつて、智の時をいふ。既に煩惱は斷せられて、今擇滅の得せられる時を解脫道といふ。賊を追ひ出すは無間道の位、戸を閉づるは解脫道の位である。

【講義】三道の中、第一に見道といふのは如何といふに、欲界の四諦と上界の四諦と、上下八諦の下に八十八使の見惑があつて、其を斷するに就いて八忍八智の十六心がある。其中、前十五心を見道といふ。色界無色界は同じく定地であるから、此を合して上界として斷する。八十八使の見惑を上下八諦の部下に分類する。一々の諦の下に忍の斷と智の證とがあるから、其で十六心となる。名稱は次に出て居る。忍の位を無間道と名け、智の位を解脫道と名ける。見道とは、無始已來未だ曾て見た事のない四諦の理を今始めて見るからである。第一心と第二心とは忍と智との位であるから、つまり重見になるが、しか

し此時は單に欲界の苦諦を見たといふ丈で、まだ他の諦を見て居らぬから、其
 で智の位でも修道ではない。然るに第十五心の忍位に至て、上下八諦全部を
 見終て、次に第十六心の智位に入るから、其で第十六心は修道の部に屬するこ
 いふのが有部の説である。唯識では十六心見道といふも、有部では第十六心
 は見道ではない。丁度修惑斷證の終りが無學道である様に、見惑斷證の終り
 が修道だといふのが有部の教理の特色である。見惑頓斷破石の如しとい
 て、見惑は無漏智で以てどん／＼斷せられるから、僅に十六心で、見惑の全部が
 斷せられるといふ。頌を引いていふ、忍は無間道、智は解脫道である。十六心
 の中、前の十五心を見道といふ、未曾見を今始めて見るから此位を見道といふ
 のである。

十六心者。第十六心、修道攝也。一苦法智忍。二苦法智。此二、緣三欲界、苦。三苦類智忍。

四苦類智。此二、緣三欲界、苦。五集法智忍。六集法智。此二、緣三欲界、集。七集類智忍。八

集類智。此二、緣三欲界、集。九滅法智忍。十滅法智。此二、緣三欲界、滅。十一滅類智忍。十

二滅類智。此二、緣三欲界、滅。十二道法智忍。十四道法智。此二、緣三欲界、道。十五道類

智忍。十六道類智。此二、緣三欲界、道。

【字解】一苦法智とは欲界苦諦の法に對する智であつて、此智起る時に擇滅が
 證せられるといふ。二苦法智忍とは、苦法智之忍であつて、忍は忍可の義、まだ
 智に達せざる位、此時に煩惱の得が離れるといふ。三類とは、上界も欲界の同
 類だといふ意味で、上界には凡て類の字を附してある。

【講義】十六心の中、第十六心は前記の様に修道に攝せられる。十六心とは、一
 に苦法智忍、二に苦法智、此二は欲界の苦諦を緣じて起る。三に苦類智忍、四に
 苦類智、此二は上界の苦諦を緣じて起る。五に集法智忍、六に集法智、此二は欲
 界の集を緣ず。七に集類智忍、八に集類智、此二は上界の集を緣ず。九に滅法
 智忍、十に滅法智、十一に滅類智忍、十二に滅類智、此四は滅諦に關するもの、十三
 に道法智忍、十四に道法智、十五に道類智忍、十六に道類智、此四は道諦に關する
 もの。

二六 修 道

修道者。從第十六心至有頂第九無間道金剛喻定是修道位也。於此位中斷三界九地九九八十一品修惑也。斷品各有無間解脫道八十一品無間道八十一品解脫道合一百六十二心也。其中百六十一心修道第百六十二心有頂第九解脫道盡智無學道也九品道斷九品惑上上、上中、上下一、中中、中下一、下上、下中、下下、下品、道斷上品惑乃

至上品道、斷下品惑。

【文科】第二十六に修道を明す。

金剛喻定

【字解】一、金剛喻定とは、其定を金剛に喩へたもの。金剛は現今でいへば金剛石らしく見ゆれど、佛教の上で金剛といふのは金屬の名となつて居る。至て堅いから、物を摧破する義がある。今は煩惱を摧破するに喩へたもの。何れ

修 道

の處でも一々に其義があるが、今は煩惱の全部無くなつた有頂の第九無間道を特に金剛喻定と名けたもの。二、盡智とは、煩惱が全部盡きて解脫を得た時の智をいふ、無生智に對す。無生智は盡智の次に起る。

【講義】見道は未曾見を見る意味であつたが、第二の修道は其と反對に修習の義で、長時修習するから修道と稱せらる。修惑漸斷藕絲の如しで、修惑は仲々に一寸斷せられぬ。見惑一品斷というて、見惑は九品に分けずして、合して一品として斷する、而して其を上下八諦に分類する。然るに修惑九品斷で、修惑は九品に分けて斷する。上々品の惑は上々品の惑と合する、煩惱は異つても品が同じければ其を合する、而して三界九地に分けるから八十一品の惑となる。修道とは前記の第十六心から、有頂の第九無間道金剛喻定までをいふ。八十一品の修惑を斷するに就いて、一々の品に無間道と解脫道を分けるから、無間道も八十一品、解脫道も八十一品、合して百六十二心となるが、其中で百六十一心だけが修道で、次の解脫道盡智の位は此は無學道と名けられる。惑が九品に分れて居るから、從て道も九品に分れる。即ち上々品乃至下々品で

ある。最も卑い下々品の道は、最も危強な上々品の惑を斷する。乃至上々品の道は下々品の惑を斷する。俱舍論には、無始已來の大闇は小燈もよく此を滅するが、細闇は却て大燈でなくては滅せられぬ様なものと、面白い喩を出してある。

二七 無學道

無學道者、有頂、第九解脫道以後、斷三界、見修二惑已、所作已辨故云無學道也。

【文科】第二十七に無學道を明す。

【字解】無學とは、もう此上に修學する事なき意であつて、修學し盡した處が無學道である、即ち阿羅漢果の位をいふ。

【講義】第三に無學道といふは、有頂の第九解脫道以後をいふ。三界の見修二惑を斷じ終て、もう此上に煩惱として斷する事のない位に至つたのを無學道といふのである。

二八 預流向

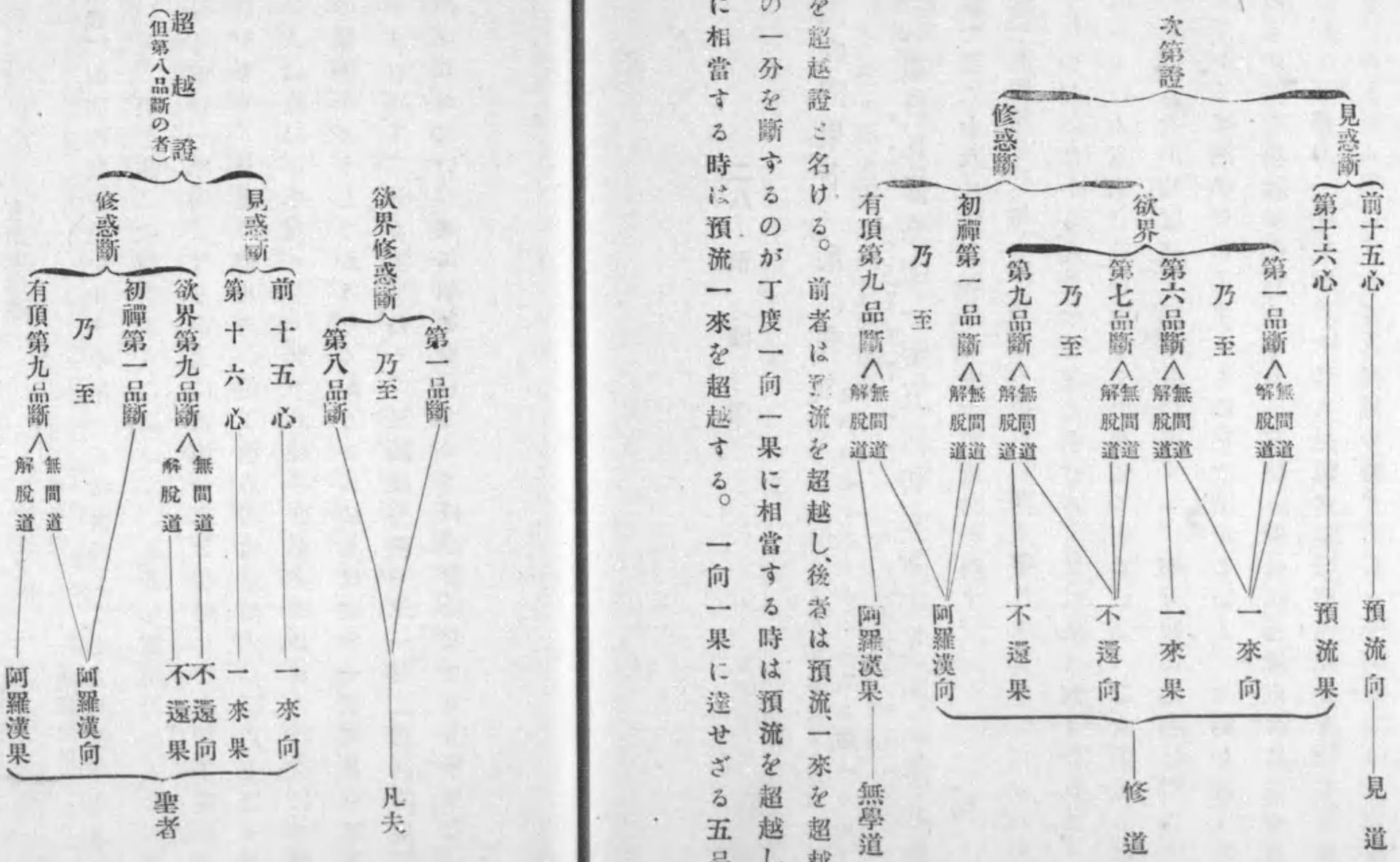
四向四果者、一預流向。見道十五心位也。此約次第證人。爲超越證人。一來向不還向也。於異生位。六七八品斷。一來向。下八地斷。不

還向也。頌曰。具修惑斷。一至五向。初果斷。次三向。一離八地。向三上。

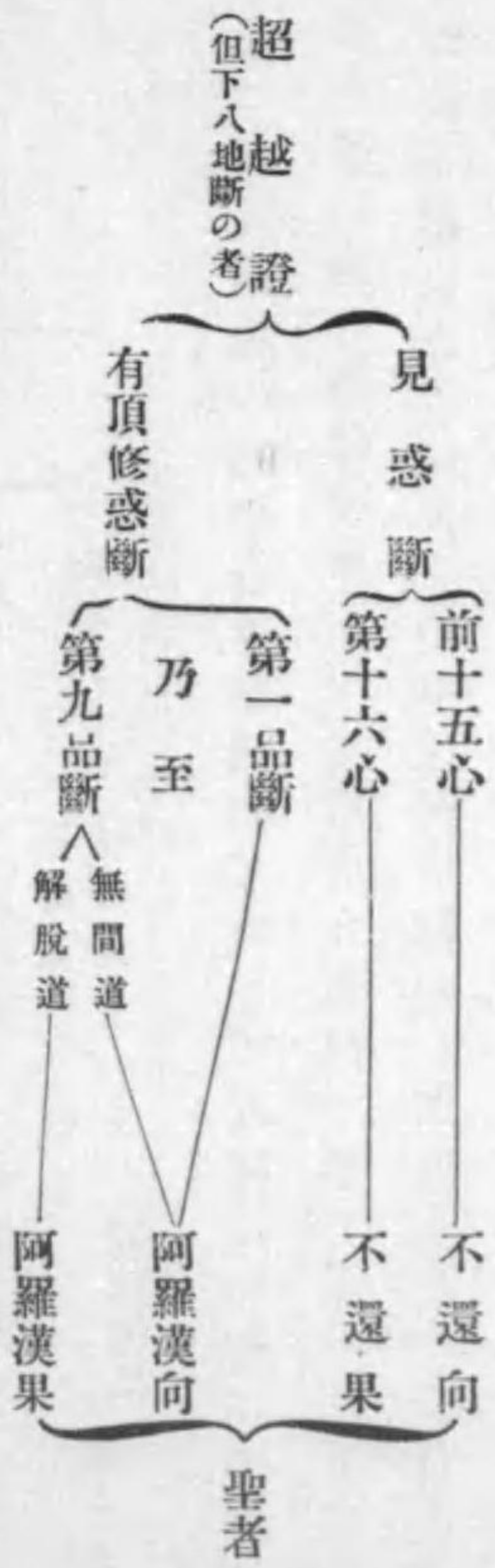
【文科】第二十八に四向四果の中の預流向を明す。

【字解】一、預流とは、初めて無漏の流れに預る事、凡夫であつたものが初めて聖者となつたのだから、此位を預流と名ける。其に果と向と分れる。向とは果に向ふといふ意味で、果に至るまでを凡て向といふ。二、次第證とは、七方便の次が見道、其次が修道、終て無學道に達する。即ち初に見惑を斷じ、次に修惑を斷じて、かくて無學果に達するものを次第證といふ。次第を追うて證するのであるから、次第證と名けられる。三、超越證とは、見道以前に先づ有漏の六行觀を以て修惑の一分を斷じ、次に入見道、次に修惑の殘分を斷じて無學果に達する。かういふ様にすると、入見道の時すぐに一來向、又は不還向となるから、

其を超越證と名ける。前者は預流を超越し、後者は預流一來を超越する。修惑の一分を斷するのが丁度一向一果に相當する時は預流を超越し、又二向二果に相當する時は預流一來を超越する。一向一果に達せざる五品の惑を斷



じた丈では、入見道の時やはり預流向であつて、此時は超越はできぬ。又六行觀では有頂の惑を斷する事ができぬから、預流一來不還の三を超越する譯にはいかぬ。四、異生とは凡夫の事、生死に輪廻して度々生を受け直すからである、衆生といふに同じ。



【講義】四向四果の位を明す中、第一に預流向とは、此は前記の見道十五心の位をいふ。但し其は次第證の人に就いていふ、若し超越證の人ならば、預流を超越して直に一來向となるか、又は預流一來を超越して直に不還向となる所の二種がある。見道以前、凡夫の位で、欲界の修惑第六品斷以上乃至第八品斷までの人は直に一來向となり、又下八地の修惑を斷じた人は直に不還向となる。斷の關係がどうしてかうなるかといふに、其は次の一來向及び不還向の下を参照すればすぐ分る筈である。又頌疏要義一三二頁「四向四果」の下をも参照せられたい。次に頌を引いていふ、修惑をまだ少しも斷せない具縛の人

と欲界修惑第一品斷より乃至第五品斷に至る五種の人とは、入見道の時預流向と名ける。前者は次第證の人、後者は形を超越に取つても斷じ方が少いから、まだ超越のできぬ人である。次の三品、第六七八品を斷じた三種の人は直に一來向となる。又第九品斷以上乃至下八地の全部の修惑を斷じた六十四種の人は直に不還向となる。此二種は超越證に約する。こゝに六十四種といふは、四禪と下三無色とに九品があるから六十三となり、其に欲界の第九品を合せて六十四となる。

異生、凡位斷、下八地惑、五部合斷也。五部合斷者、四諦、修道、五部、煩惱各九品、五部、上品合一無間一解脫道斷、乃至下品亦如是、九無間九解脫斷、云五部合斷也。有漏道斷、以上地、近分道斷、下地、煩惱、故不斷有頂惑也。有漏智以六行觀斷、六行觀者、無間道觀、下地、作、麤苦障、行相、解脫道觀、上地、作、靜妙離、行相。

【講義】此下は因に有漏道斷を示す。凡夫の位で下八地の惑を斷するには、五部合斷するに因て、四諦と修道と五部の煩惱を合斷するのである、即ち見修二惑を合斷する意味である。五部の煩惱各九品に分る、しかし上々品は上々品と合し、乃至下々品は下々品と合して、其一品の惑を斷するに一無間道一解脱道とするから、九品では九無間道九解脱道となる。しかし三界九地別々に九無間九解脱なれば、全部では八十一の無間道、八十一の解脱道である。本文の意味は大體かうであるが、こゝに多少の疑問が起らねばならぬ。五部合斷とあるから、見惑までも斷せられるかといふに、元來見惑は無漏斷に限ることなつて居る。されば實は修惑だけ斷せられて、見惑は單に伏せられる丈である。と見ねばならぬ。伏も伏斷というて、時には斷の意味にも用ふ。前の具修惑の頌文から見ても、修惑だけ斷せられる様になつて居る。又俱舍論には五部合斷の文字はない。却て婆沙には五部合斷といつて居る。五部合斷といふ事は徹底せない文字だから、俱舍論が此を用ひぬのではないかとも思はれる。有漏道で斷するには、上地の近分定の道を以て次の如く六行を觀じ、かくて下

地の煩惱を斷する。例へば欲界の煩惱を斷するに、未至定の道を以て六行を觀すといふ様にする。乃至無所有處の煩惱は有頂の近分定の道で斷せられるが、有頂の煩惱のみは有漏ではどうしても斷せられぬ。有漏の智で六行觀をやつてさうして煩惱が斷せられる。六行觀とは、下地を觀じて、苦、瞋、癡の三行相を起し、又上地を觀じて、靜、妙、離の三行相を起す。前者は無間道で、後者は解脱道である。

二九 一來向

一一ニハ一來向スルニ、修惑ニ從リ一品ニ至ニ五品ニ來向也。

【文科】第二十九に一來向を明す。

【字解】一來とは、一往來の意味で、一度欲界の天へ生れ、後人界へ還り來るからである。或は又天から人へ往き、次に天へ還るのもよい。

【講義】第二に一來向とは、欲界の修惑第一品斷より第五品斷に至るまでをいふ。其一品に無間道解脱道があることは例の通りである。第六品斷の

無間道は如何といふに、此も一來向の中であることせねばならぬ。其點が本文は一寸不完全な書き方である。さうでないこと超越證の斷道が説明できぬ事となつて来る。

一來向、中家家、聖者有^二。一、天家家。^{天三人。天二。人一人。人中得道。}二、人家家。^{人三人。天二。}

九品、惑潤七生。^{人二天。天中得道。}上上能潤^二兩生^一。上中上下中上各潤^二二生^一。中中中下共潤^二二生^一。下三品合潤^二一^一生^一。三品斷

者、三生家家。^{上品、二生、上中品、一生、上下品、一。}四品斷者、二生家家。^中

頌曰、斷欲三四品、三二生家家、斷至五二向。^{品已上、五生潤生、惑已斷故受二生。}頌曰、斷欲三四品、三二生家家、斷至五二向。^{品已上、五生潤生、惑已斷故受二生。}

家々々々
惑潤

【字解】一家々とは、天の家から人の家へ、又人から天へ轉生して、欲界の人天を往來するをいふ。此が天家々と人家々とに分れる。天家々は人中で見道に入り、次で天へ生れ、人天往來して、最後に天中で涅槃に入る。人家々は其が反對になる丈で、外に變つた所はない。二、惑潤とは、惑の力が幾何の生を感ずる

天家々々
人家々々

かといふに、欲界九品の惑は七生を感ずる丈の力があるといふ。そこで三品斷ならば三生家々、四品斷ならば二生家々といふことになる。其は講義の下で委しく記さうと思ふ。

【講義】一來向の下には家々の聖者といふがある、其が天家々と人家々とに分れる。一に天家々とは、人中得道のもものが、第一に天の一生、第二に人の一生、第三に天の一生、こゝで涅槃に入れば、かういふのは二生家々である。其は天へ二度生れて居るからである。次に第四に人の一生、第五に天の一生、かくて涅槃に入るは三生家々である。前者は天二人一で、後者は天三人二である。二に人家々とは、天中得道のもものが、先づ第一に人の一生、次に天、次に人、こゝで涅槃に入る時は、人二天一の二生家々である。又人が三生、天が二生ならば、人三天二の三生家々である。

どうしてかういふ事になるかといふに、欲界九品の惑はよく七生を潤す力を有して居る。上々品の惑は二生、上中、上下、中上の惑は各一生、中々、中下の惑は共じて一生、下上、下中、下々の惑は共じて一生、合計七生を潤すといふ。若し三

九品潤生

品を斷すこせば、上々の二生と、上中、上下の各一生と、既に四生を潤す分を斷じたから、残りは三生といふ事になる。但し三生というても人天往來するから、得道の分を合せて實は六生となる譯である、其を三生家々と稱する。若し又四品を斷すこせば、上々の二生と、上中、上下、中上の各一生と、既に五生を潤す分を斷じたから、残りは二生といふ事になる。但し二生というても人天往來だから實は四生となる譯である、其を二生家々と稱する。頌疏要義一三四頁「天家々人家々」の下参照。頌にいふ、欲界の三品の惑を斷すれば三生家々、四品の惑を斷すれば二生家々である。又五品の惑を斷じた人は、何れも第二の一來向である。

三〇 不還向

三二不還向。斷欲修惑、第七八品。

【文科】第三十に不還向を明す。

不還向

【字解】不還とは、欲界の煩惱を斷じたに依て、再び欲界へ還らざる意。
【講義】第三に不還向とは、欲界の修惑の第七品斷より、第九品斷の無間道に至るまでをいふ。第九品斷の無間道が不還向の中へ入るこいふ事が、今は略されてあるからよく注意せねばならぬ。其事は既に一來向の下で記しておいた。

不還向、中有一間聖者。七品斷八品斷人、下三品、共潤人天合受、一 頌曰斷ニ
七或八品一生名一間。此即第三向。上巳

【字解】一間とは、間は間隔の義、一生を隔つる意。

【講義】不還向の事を一間の聖者とも名ける。下三品は共じて人天の各一生を潤すのであるが、今七品斷又は八品斷のものは、既に一生を減じて居るから、人天の何れの一生か、残る丈になる、一生を隔つる意味で此を一間の聖者と名けて居る。頌にいふ、七品斷又は八品斷のものは唯一生を残して居るのみだから一間と名ける、此が即ち第三の不還向である。

一間の聖者

不還向

三 阿羅漢向

四阿羅漢向ズルヨリ。斷ズルヨリ初定ズルヨリ一品ズルヨリ至有頂ズルヨリ八品ズルヨリ皆阿羅漢向也。

阿羅漢向ズルヨリ上ズルヨリ。

【文科】第三十一に阿羅漢向を明す。

阿羅漢向

【講義】第四に阿羅漢向とは色界初禪の第一品斷より有頂の第九品斷無間道までをいふ。此も本文では第九品斷無間道の事は記していないが、こゝまでを阿羅漢向とするとせねばならぬ。頌にいふ、初定の第一品斷から有頂の第八品斷までが皆阿羅漢向である。

三 預流果

四果者初果ハ必不退ナリ。三果ハ亦不退。

一預流果初預流ハ聖流ニ故ニ梵云須陀洹見道位ニ。斷三界見惑第十六心位證之也。

【文科】第三十二に預流果を明す。

預流果

【講義】前に四向を明したから此から四果を明すのである。順序からいへば預流向の次が預流果、乃至阿羅漢向の次が阿羅漢果である。四果の中で、初果は見惑斷の結果であるから、決して初果を退することはない。後三果は修惑斷の結果であるから、時に依ると退果することもある。第一に預流果とは、初めて無漏聖道の流れに預つたからである。梵語では須陀洹シュダヘンといふ。見道十五心の位で三界の見惑全部を斷盡したに依て、第十六心の解脱道に至て此を證する其位を預流果といふ。

三 一來果

一一來果梵云斯陀含此云薄食嗔癡已斷修惑六品欲惑薄故云薄食嗔癡也住此果若不斷下三品惑彼往天上一來人間而般涅槃故名一來果也。

【文科】第三十三に一來果を明す。

一來果

【講義】第二に一來果とは梵語では斯陀含といふ。一來果の事を又は薄貪瞋癡ともいふ、己に欲界修惑の三分の二、即ち六品までを断じて、欲界の修惑が薄少になつた意味で薄貪瞋癡と稱せられる。此一來果はまだ下三品の修惑を断じないから、其感力に依て六欲天へ生れ、一たび人間へ還り來て、人界で涅槃に入るから其で一來果と名けられる。

三四 不還果

三二 不還果

梵云阿那含已斷欲界修惑。必不還生欲界故名不還也。

【文科】第三十四に不還果を明す。

【講義】第三に不還果とは梵語では阿那含といふ。既に欲界の修惑全部を断盡して、再び欲界に還り來らざる邊で不還果といふ。

就此不還果有種種差別七種不還

以初五名一中般。謂欲界沒往於色界住中。五種那含。

有、位、般、一、生、般。生、色、界、已、不、久、起、聖、道。二、有、行、般。生、已、長、時、加、行、勤、修。三、有、上、流、般。是、上、行、義、於、色、界、要、待、上、生、方、般、涅、槃。四、無、行、般。生、已、經、久、無、加、行、懈、怠、不、斷、餘、煩、惱、般、涅、槃。五、無、色、般。超、欲、界、沒、不、生、色、界。七、現、般。不、生、上、界、唯、住、欲、界、於、現、身、中、得、涅、槃。故。

【講義】不還果には種々の差別がある。第一に七種不還とは、此中、初の五を五種の那含と名ける。那含とは阿那含の略である。此五は何れも色界に行く不還であるから、第六第七に區別して特に五種の那含と稱する。一に中般とは、此は欲界で死んで色界へ行く途中、中有の位で涅槃に入るのである。二に生般とは、色界に生じてから久しからずして聖道を起し、餘の煩惱を断じて涅槃に入るのである。三に有行般とは、色界に生じてから長く修行して多くの功德を得て涅槃に入るのである。四に無行般とは、色界に生じてから久きを經ても別に修行もせず、懈怠して多くの功德を得ず、涅槃に入るのである。五に上流般とは、上流は上に行く義で、色界の中で必ず上方に轉生して、かくて

涅槃に入るのである。六に無色般とは、欲界で死んで色界へは生れずに、超ねて無色界へ生れて涅槃に入るのである。七に現般とは、色界へも無色界へも生れずに、唯欲界で而も現在の身の儘で涅槃に入るのである。頌疏要義一三七頁「不還果の種類」の下参照。

上流有^二一^ニ樂慧^一。即有^レ雜修^一。雜修靜慮總爲^二三事^一。頌曰、爲^レ受生、

現樂及遮煩惱退^上。若於^レ羅漢除^レ受生、一^ニ雜修者^一。中間有漏前

後無漏、以^レ相間雜^レ故名^レ雜修。由^レ雜修、五品生有^二五淨居^一。一下品、

二^ニ中品^一。三^ニ上品^一。四^ニ上勝品^一。五^ニ上極品^一。

【字解】一樂慧とは、慧を願ふ不還で、次の樂定に對した名である。二、現樂とは、現法樂住の略で、此現在の身で法樂に住する事。三、五淨居とは、第四禪天に入天ある中の後の五天をいふ。或は五那含天ともいふ。清淨の居處といふ意。【講義】前に説いた上流般を二種に分ける。一に樂慧、此は雜修靜慮を修して、

樂慧と雜修靜慮

よく色究竟天に生れる。雜修靜慮は、三個の事由の爲に此を修する。頌を引いていふ、一には五淨居天へ生を受ける爲めである。二には現法樂住の爲めである。三には煩惱を起して退する事を遮らんが爲めである。但し阿羅漢では受生の一を除く、阿羅漢にはもう受生といふ事がないからである。雜修といふのは、中間に有漏が交つて、無漏と有漏とが相交るからである。第一に無漏、第二に有漏、第三に無漏、第四に有漏、第五に無漏といふ様なのをいふ。雜修に下品と中品と上品と上勝品と上極品との五種があるから、從て其生れる場處が五種になつて居る。即ち次での如く無煩天、無熱天、善現天、善見天、色究竟天に生れる。此五處を五淨居天と稱する。

樂慧上流有^二一^ニ全超^一。梵衆天^ニ没^レ生^レ色究竟^一。一^ニ半超^一。梵衆天^ニ没^レ或^ハ超^一一天^ニ。

究竟^ニ皆名^ニ半超^一。二^ニ遍没^一。於^ニ十六天^一遍^レ受^レ生^レ故^一。聖^ハ必^ク不^レ生^ニ。非^ニ全超^一故也。大梵處^ニ解^レ見^レ處^一故^一。一^ニ導師^一故。

【字解】一、乃至とは、超一天に對して超二天、超三天と進む意。又十三天没に對して十二天没、十一天没と退く意、此兩方にかゝるものと見ねばならぬ。二、僻

上流の三種

見とは悪見の事で、大梵王は種々の悪見を起すからである。三、一導師とは、大梵王は梵天の中の大王だというて慢心を起して居るからである。

【講義】樂慧上流を三種に分つ。一に全超とは、色界第一の梵衆天で死んですぐに色究竟天へ生れる、中間の十四天を全部超ゆるから全超と名ける。二に半超とは、梵衆天で死んで或は一天を超ゆる、或は二天を超ゆる、若しくは或は十三天で死し、或は十二天で死んで色究竟に生れる、此は全超でないから半超と名ける。十六天の中、十五没なれば次の遍没となる。梵衆天没を除けば十四没となる。若し一天を超ゆるば十三没となるから、超一天と十三天没とはつまり同じ事となる譯である。三に遍没とは、此は十六天に全部受生するからである。十六天といふのは大梵天を除いて居る。聖者は必ず大梵天には生れない、何となれば一には悪見の處である、二には大王というて慢つて居るから、此一天だけは除かれてある。

一樂定。即無雜修能生有頂樂定那含。雖生無色經三色生故是色界攝。

樂定

【講義】二に樂定とは、此は定を願ふ方であるから、雜修靜慮を修せないで、遂には有頂天へ生れる。樂定不還は無色界に生れても、而も色界の生を経て行くから、やはり色界の攝としたのである。直に無色界に行くのでないから、第六の無色般とは異つて居る。

九種不還。頌曰。行色界有九。謂三各分三。業惑根有殊。故成三九別。上巳。中般三。一速般。二非速般。三經久般。生般三。一生般。二有行般。三無行般。上流三。一全超。二半超。三遍没。

九種不還

【講義】不還を九種に分けることもあるが、此は七種不還の中の前五の色界へ行く不還を更に細かくして九種としたものなれば、範圍の上からは七種不還より狭いことになる。頌を引いていふ、色界へ行く不還が九種に分れる。中般と生般と上流般との三を更に各三種に分けるから九種となる。其は業の異りと煩惱の異りと機根の異りとで三が更に九となるのである。先づ中般の三とは、一に速般、此は中有に入てすぐに涅槃に入るもの。二に非速般、此は

中有に入てもすぐに涅槃に入らざるもの。三に經久般、此は中有に入て久きを経て後に涅槃に入るもの。丁度生般の分類と同様の區別である。次に生般の三とは、一に生般、二に有行般、三に無行般、此は七種不還の中の三種である。後に上流の三とは、一に全越、二に半超、三に遍沒、此は樂慧上流の三種と同様である。

七善士趣。頌曰。立七善士趣。由上流無別。於前九種不還。不開上流也。

【字解】善士趣とは、趣は惡趣の趣と同じく有情に名けたもの。士も亦有情に名けたもの。善の有情であるから、其が善士趣と稱せられる。

【講義】七善士趣とは、頌を引いていふ、七善士趣を立てるのは上流を三種に開かぬからである。前の九種不還の中で上流を三種に開かずに、合して上流般としておけば九種が七種となる譯である。

七善士趣

經生聖者有二。一欲界經生。二色界經生。

【字解】一、經生とは、生を經ること、幾度か生れ變る事である。二、厭心とは、苦を厭ふ心である。厭心強ければ上界の長壽を得ることを好まぬから、さういふ者は欲界經生となる。

【講義】經生の聖者に二種がある。一に欲界經生、此は欲界で生を經る丈であつて、色界や無色界へは生れぬ、なせなれば苦を厭ふ心が強いから、上界の長壽を受け様とせぬのである。二に色界經生、此は厭心が弱いから無色界へも生れる。

經生の聖者

三五 十八有學

十八有學者。謂四向三果。爲七及隨信行。隨法行。

信解。見至。家家。一間。

十八有學

百八十一

五種不還也。身證不還無依因故不入此數。

是聖者果滅定有漏不_レ是依因。依因無故不預_レ其數。

得_レ滅定轉名爲_レ身證。無漏三學是聖者因。擇滅涅槃。

【文科】第三十五に十八有學を明す。

【字解】一、有學とは、まだ修學すべきものある人のことであるから、四向四果の中では四向三果に通じて阿羅漢果には通せぬ。二、隨信行とは、鈍根だから唯聞いて信する、さういふ行者をいふ。三、隨法行とは、利根だから法に隨て自分の智慧で觀じて行く行者をいふ。四、信解とは鈍根だから信じて解する行者である。五、見至とは、利根だから自己の見で果に至る行者である。六、身證とは滅盡定を得る邊でいふ。心の解脫に對して、其を身に證るといふのである。七、三學とは、戒と定と慧との三である。此三は修學の最も必要なものなれば三學と稱せられる。

十八有學

【講義】以上四向三果は第四の阿羅漢果が無學であるに對して此を有學と稱する。實は四向三果の外ではないが、其一部に特に他の名稱を附したるものも

あつて、其等を總稱して十八有學と名けたのである。十八有學とは、先づ四向三果を七とする、阿羅漢果を除く。第八に隨信行、此は見道の鈍根に名けたもの。第九に隨法行、此は見道の利根に名けたもの。第十に信解、此は修道の鈍根に名けたもの。第十一に見至、此は修道の利根に名けたもの。第十二に家々、家々の事は前に記して置いた。第十三に一間、此事も前に出て居つた。こゝに一品惑といふは不穩當である、八品斷ならば一品惑なれど、七品斷なれば二品惑であるから、此は單に一生と見る方がよい様に思ふ。以上十三の外に中般、生般、有行般、無行般、上流般の五種不還を加へて十八有學とする。五種不還とは前に五種那含と申してあつたものである。身證不還は十八有學の中へは入らぬ。滅盡定を得たるものを身證と名ける。無漏の戒定慧は聖者所依の因であつて、擇滅涅槃は其果である。然るに滅盡定は有漏だから依因とならぬ、依因がないから十八有學の數に入らぬのである。

三六 阿羅漢果

四阿羅漢果

此云應供亦是殺賊不生之義也。能斷有頂第九品惑所作已辦不受後有。

【文科】第三十六に阿羅漢果を明す。

【字解】一應供とは供養に應ずる意味で、人から供養を受ける丈の資格あるをいふ。此は佛の十號の一と同名である。二殺賊不生とは、煩惱の賊を殺して再び生ぜしめないのをいふ。三後有とは、後の生といふ事で、次生をいふ。

【講義】第四に阿羅漢果とは、阿羅漢は梵語であつて、其を應供と譯する。亦殺賊不生の意味もある、此は勿論義翻である。此位へ來るともう有頂の修惑第九品まで全部滅盡して、斷惑の所作が辨じ了て、次生を再び受けぬ様になる。此が小乗教最後の位であつて、終極の目的地だとせられてある。

阿羅漢果

無學聖者有九種差別。九無學者。一退法。謂遇小緣。一思法。謂遇大緣。退失。

二護法。於所得法。能自防護。四安住法。無勝加行不退。五堪達法。性堪達不動。

六不動。不為煩惱所退動。已上六種羅漢。七不

退。非練根得名為不退。練根所得名為不動。八慧解脫。謂由慧力離煩惱障。九俱解脫。兼得滅定離解脫障。此二即是時解脫。不

【字解】一時解脫とは、鈍根であつて、時機を待て解脫するをいふ。前の信解が

此時解脫となる。二、不時解脫とは、利根であつて、時を待たず何時でも解脫のできるのをいふ。前の見至が此不時解脫となる。三、煩惱障とは、煩惱即障の持業釋であつて、即ち見修二惑をいふ。四、解脫障とは、解脫之障依主釋であつて、或は定障ともいふ。即ち定の障りの事。

【講義】九無學として、無學の聖者を九種に分ける。一に退法、一寸した縁で所得の阿羅漢果を退失するもの。二に思法、退失を恐れて、寧ろ自殺を思ふもの。三に護法、所得の果をよく防ぎ獲るもの。四に安住法、勝れた退縁が無ければ退することもなく、又勝れた加行をなさなければ進むといふこともなく、其處に安住するもの。五に堪達法、機根を練ることに堪へる性を有して居るか、速に不動に達すべきもの。六に不動、煩惱の爲に決して退動せられざるも

九無學

阿羅漢果

の已上を六種羅漢と稱する。有學及び凡夫は此六種の種性を有して居る、丁度唯識の聲聞種性に當る。六種羅漢の中で前の五は鈍根だから退果する、第六は利根だから退果せぬ。前者を時解脱と稱し、後者を不時解脱と稱する。こゝに退するといふのは、果退、退して羅漢果を退することである。外に性退とて種性を退する説もある、此は六種の中で、中の四に限て、第一の退法には通せぬ。頌疏要義一三九頁「六種阿羅漢」の下参照。

七に不退、此は第六の不動から開出したものである。練根して得られたは不動であつて、練根して得るのでないのを不退と名ける。不退の方が不動よりも上等の羅漢である。八に慧解脱、此は慧の力で煩惱障を斷じて解脱を得たのをいふ。前の七種の羅漢の外ではない、次の俱解脱に對して慧解脱と名けたものである。九に俱解脱、此は煩惱障を離れた外に、兼て滅盡定を得して解脱障即ち定障を離れたのだから、其で俱解脱と稱する。慧解脱と俱解脱とは、此は時解脱でも不時解脱でもどちらにも通ずる。二十七賢聖といふ事があるが、其は十八有學と九無學とを合せ稱したものである。冠註には二十七賢

となつて居るが、此は聖の字が脱落したものと見わる、古本には賢聖となつて居る。實は二十七聖といふべきであつて、賢の字は一寸おかしい様に思ふ。

三七 聲聞と獨覺と佛

問三乗修行得果差別如何。答一聲聞。積ニ三生六十劫、行於佛邊、聞佛所說、四諦得、四向四果、名聲聞、聲教、故

名聲聞。

【文科】第三十七に聲聞と獨覺と佛との別を示す。

【字解】三乗とは、聲聞と獨覺と菩薩とをいふ。獨覺を舊譯では緣覺といふ。

【講義】長い問答が漸く濟んで此から問が改まる。三乗が修行して得たる果の區別は如何といふに、一に聲聞、短いので三生、長いのは六十劫の間修行する。而して佛の邊りで佛の説き給へる四諦の教を聞いて四向四果の勝益を得る。なせ聲聞と名けるかといふに、佛の聲より顯れた教を聞くからである。